
東方超銀河伝説 ウルトラギャラクシーサーガ

A G I T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方超銀河伝説 ウルトラギヤラクシーサーガ

【Nコード】

N8930X

【作者名】

AGIT

【あらすじ】

東方英雄光 NEXUS、ダークザギとの戦いから半年、八雲カズキはウルトラマンネクサスとして幻想郷を守り続けていた。だが多元世界となった地球の幻想郷に様々な異変が外の世界をも巻き込み起きようとしていた……………

これは東方英雄光 NEXUS の続編です、詳しく読みたい方はそちらを優先して読んだ方がよろしいかと。

あと練り直したため途中から違う話となっております。

EPISODE 01 新たなる始まり（前書き）

続編がスタート！

今回は活報で募集し名前が出た怪獣の一体が登場します。

登場怪獣

宇宙怪獣ベムラー

プロブタイプビースト ペドレオン

登場

EPISODE 01 新たなる始まり

「ん…………あ、もう朝か」

和室の中で金髪の青年が起床し布団から起き上がろうとしたが何か布団の中に違和感を感じる、更に何かに引っ張られてる感じがし掛け布団を捲るとその中には。

「っ!」

黒く丁度良い長さの髪の毛の少女が白い寝巻の和服を着てるが少し乱れて眠っていた。

「あわあわあわ……………」

青年はやっちゃったあああ的な感を醸し出していたがいや、そんな事あるはずないと昨夜の記憶を思い出していた、確かに一人で寝たはず、考えてみたらこの少女の布団は隣だから寝呆けて入ってきたんだ、色々推測していると少女は目を覚ます。

「…………カズキ？」

青年の名前を眠そうに言うと。

「おはよう霊夢」

少女の名前を激しく動揺しながら呼ぶ。

「ふわあゝ…………私確か…………夜中に起きて…………トイレ行っ
たはず……………」

ここで青年は何も間違いは起きていないとホッと息を吹く。

「どうかしたの？」

少女は寝呆けているため今の自分の状況がわかっておらず。

「まあいいわ……………」

「おわっ!？」

少女に飛び付かれ後ろへ倒れる、まるで押し倒されたように。

「霊夢…………ちよつと…………ちゃんと起きろよ…………朝だぞ」

「朝…………ん？」

少女は頭が覚醒し今の自分の服装の乱れと何をしているかに気付く。

「あわわわあああああああーっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

大きな声で叫ぶのだった。

「なんで言ってくれなかったのよ！」

「お前が抱き付いてくるからだろ！」

そして布団を仕舞い洗顔をすませ朝食の支度をし居間の丸いテーブルで朝食を食べる。

だが先ほどの事があり少々喧嘩気味。

「霊夢はもう少し巫女の自覚持った方がいいんじゃないのかな？」

青年の名前は八雲カズキ、やくも普通の人間ではなく妖怪と宇宙人の間に産まれた妖怪。

「カズキこそもう少し男だって自覚持つて行動したら？」

彼女は博麗霊夢、はくれい れいむこの博麗神社の巫女でその巫女服が紅白で脇が出ているのが特徴、人間だが空を飛ぶ程度の能力、霊気を操る程度の能力という不思議な力が使える。

だがこの幻想郷では珍しくない。げんそうきょう

この幻想郷では人間や妖怪、幽霊が共に暮らしている一つの空間であり、日本のある場所にあるのだが普通の人間では出入りはできない、博麗大結界というシールドみたいな物で被われており見る事すらできない。

だが普通の人間にも入る方法はあったりするがかなりまれ。

「なら霊夢ももう少し女の子らしくしたら？朝から昼寝してないでさ」

「アンタだって縁側でお茶飲んでるだけじゃん！」

「残念、俺は藍の所に行つて毎日弾幕の出し方や空を飛んだり隙間の開き方を習つたりしてるの、霊夢が寝てる間に」

ああ言えばこう言うとなんやり取りが繰り返され拉致が開かないと思いきや。

「あら朝から仲がいいわねえ」

「紫」

「母さん」

空間に亀裂が入るように開いたスキマから上半身をだけを出して部屋に入る金髪で紫の服の女性が、彼女は八雲紫^{やくも ゆかり}、名前から察っせらること通り彼女こそがカズキの母親だ。

幻想郷最古の妖怪。

「まあ喧嘩するほど仲がいいって言うし」

「それで、用件何？まさかからかいに来ただけって言うんじゃないわよね？」

結界を管理するものがもう一人の結界を管理するものの所に来たのだ、だが自分が言った通りの事だと思っていた。

「そうよ、仲がいい二人をからかいに来たのよ」

「「やつぱり」」

すごく真面目というわけでもないため日常茶飯だが。

「まったく、冬眠して起きたと思ったらいきなり」
「よかった、そこは繋がってなくて」

人間ではなく妖怪である紫は冬眠？までするため冬の間は会えないのだが。

「だけど早く起きちゃったのよね」地球温暖化？」

3月までぐっすり、と行きたかったらしいがなぜか気温が高く1月に目覚めていた。

因みに今は1月の下旬、まだまだ寒いがすごく寒いわけでもない。

「今日も来るカズキ？」

「もちろん」

「ならお菓子用意して待ってるわよ」

そしてスキマの中に入り出入口を閉じた、この能力は境界を操る程度の能力を使い開いたり閉じたりしているのだ。

「確かに最近変よね、もうアレから半年ぐらいはたったのに」

「ダークザギは倒された、だけど怪獣とビーストの生き残りはまだ沢山いるからなあ」

半年ぐらい前、幻想郷を脅かす宇宙からやってきた妖怪、異星獣スピースビーストが現われ人々を襲っていた、更には怪獣という巨大生物まで出現するようになっていたがそれらはダークザギが呼び寄せていたものだったがカズキは光の巨人ウルトラマンネクス、ウルトラマンノアに変身しザギを倒したのだったが、

元々はネクサスの世界にある幻想郷だったのだが、ある宇宙人の計

画により時空が歪みネクサスの世界ではなくなり様々な世界が融合した多元世界となってしまうカズキがいたネクサスの世界は遠い過去のものとなってしまうのだが幻想郷だけはそのままだった。

「まあ何が来ても俺がこの幻想郷を守るさ」
「そ、そう」

その言葉は嬉しいのだが本当にそれだけでいいのか、そう感じていた。

（だけど……………ずっとここに閉じこもったままじゃ……………）

少し不安だった、自分の傷を隠すためにここから出ないのでは、幻想郷から出ないままになるのではと。

「カズキ」

「何？」

「……………なんでもない」

だがそれを言う勇氣はなかった。

「変な霊夢」

「ん？アンタに変なんて言われるなんて心外ね」

「それはどういう意味かな？」

「言葉の意味よ」

味噌汁をずーっと飲み先までの雰囲気は薄くなっていった。

「さっさと食べて掃除して昼寝するわよ」

「はいはいとその前に」

カズキは白く真ん中に青いクリスタルが埋め込まれ、赤と青のラインが流れる短剣エボルトラスターを取り出すとそれはゆっくりと点滅していた。

「朝っぱらから不粹ね」

「じゃあ……………行ってくるか」

腕を回しながら立ち上がり神社から出て鳥居の前に立ち。

「ネクスス……………！」

鞘を強く握りエボルトラスターを振り上げるとそれを持った右腕を大きく回し頭上高く挙げると赤い光が放たれカズキは包み込まれるとその場から姿を消した。

この幻想郷で人間が多く住まう人里の近くにある魔法の森の中、そこにナメクジのような両手が鞭を束ねたような触手で頭部に二本の触角が生えた巨大生物、ブロブタイプビースト・ペドレオン（グロース）が現われ人里を目指していた。

「ギシャアアアツ!!!!!!!!!!!!!!」

魔法の森はあまり人が入らないため怪獣やビーストが潜伏しているも気付かない場合がある。

「おいおい朝からこりやないぜ」

その森に住む金髪で白黒の魔法使いのような服を着た少女、霧雨魔理沙が森の中に建っている霧雨邸から出てきた。彼女は主に魔法を使う程度の能力があり魔法を使う事ができる。

「しかも気色悪いペドレオンなんてなあ」

「そんな事言つてないで」

そこに同じように森に住むやはり金髪の少女、アリス・マーガトロイドがやってくる。

魔理沙は人間だがアリスは魔法使いで元人間に分類される。

「だけどよくやっぱりあんな不気味なの朝から見るの気分悪くならね？」

「ん……確かにそうよね………」

ペドレオンは聞こえていたのか大きな鳴き声を上げ頭部の二本の触角の間から火炎弾を放つ、森に当たれば火事となり大惨事になりかねないのがその火炎弾を宙で爆発させる赤い光が現われ巨人の形になる。

「さっそく来たみたいだぜ」

光が消えると胸にY字の赤いクリスタルが付いた銀色の巨人、八雲カズキが変身したウルトラマンネクサス・アンファンスが現れた。だがこのネクサスは本物ではなく本物の分身である、ネクサスの本当の名はウルトラマンノアで次元を司る神でありその一部の光を授かったカズキはその光でネクサスに変身しているのだ。

「シエアッ！」

左腕を曲げて後ろへ引き指を真っ直ぐ伸ばし右腕を伸ばし拳にし構える。

ペドレオンはネクサスを見ると怒りが込み上げ闘争本能が向上すると火炎弾を放つがネクサスは両手を前に伸ばし円形の青い光の壁サークルシールドで防ぐ。

「キシヤアアアッ！！」

ペドレオンは更に怒り突進してくるが回し蹴りを繰り返し頭部を攻撃すると横を向きそこに足を上げて曲げてから勢いよく伸ばしてキックを炸裂し遠くへ蹴り飛ばす。

「フッ！」

両腕には鋭い切れ味を持ったエッジが付いたアームドネクサスが付いておりその左腕をエナジーコアの前に構えるとアームドネクサスが青く発光、

左腕を下ろすと全身が揺らぎ頭から金色の光に包まれ徐々に変化、光が全身を包み込むと光は消えネクサスは銀色だけではなく上半身は力強い赤に、下半身は素早い青に色が変わり胸にはエナジーコアだけではなく青いクリスタル、コアゲージが付いておりその左右には炎の翼を描いたような金色のライン、ファイヤーシンボルが流れた姿、

ウルトラマンネクサス・ジュネッスブレイブにスタイルチェンジ。

「ディヤッ！」

このスタイルは力、素早さ、技が向上された姿である。

ネクサスはこの姿になりパンチを繰り出すとペドレオンのその体は凹み苦しむ。

こういう体が柔らかい生物はダメージを和らげる事ができるがネクサスの攻撃の威力が高く受け流せなかったのだ。

ペドレオンは腕の触手を振るうが。

「セアッ！」

アームドネクサスのエッジが光り、それでアッパーをするように右腕を振り上げその触手を切り落とす。

ペドレオンは体の一部が切り落とされ痛み悶えるが片手の触手を叩き付ける。

「グアア！？」

前のめりになると更に背中に触手が叩き付けられ膝を地面に付く。

そのままペドレオンは縦長の大きな口でネクサスを丸呑みにしようとするが。

「シエアッ」

その口の中に青い手裏剣光線パーティクルフェザーを打ち込むと口内は炎上、すぐに口を閉じるとネクサスの反撃を食らい吹き飛ばされる。

「ハアアアア……………フッフッ！」

両腕を下げ腹部の前でクロスするとアームドネクサスは金色に発光ゆつくりと拳が上に向くように曲げるとその間に金色の稲妻が走り素早く腕を挙げるとアームドネクサスは強く光りゆつくり腕を左右

記録された場所である。

その湖の水面は大きく揺れており水中に何かが潜んでいそうだった。

「ここか……行方不明者が多発してる湖は」

そこにカズキと年齢が変わらない茶髪でメガネを掛けた青年がやってきた、名は円光一、メ下カ・コウイチ大学生だったがある事情で休学していた。

光一が言うようにこの竜ヶ森の湖で釣り人が何人も行方不明になっているらしくこの時代の防衛チームのスーパーGUTSガッツも調べているのだが何も手掛かりが掴めていなかった。

「湖の中に何かいるのか……？」

目を瞑ると誰かと話しているように口を開く。

「そうか、わかった、ありがとう」

誰かに礼を言うと光一は白と金色で金色のラインが四対流れるカバ―が付いたアイテムのスパークレンズを出しそれを持った右腕を円を描くように大きく回し頭上高く挙げるとカバーが開き中にあつた発光体が強く光り光一は白い光に包まれその光と共に湖の中に飛び込んだ。

湖の中には魚が居るのだが何かから逃げるように泳いでいた。水中には魚ではない黒く巨大だが手が短い宇宙怪獣ベムラーが潜んでおり魚を食べていた。

「グワアアアン!!」

ベムラーは自分の巢にしていた湖に侵入者が入ってきたのに気付いた。

目の前に光り輝く巨人が現われ光が消えると胸に金色のラインが流れるプロテクターはスパークレンスのカバーに似ており赤と青紫と銀色、額に菱形の宝石、ティガクリスタルが付いた巨人、光一が変身したウルトラマンティガ・マルチタイプが現われた。

「チエツ!!」

右腕を伸ばし指を伸ばし左腕を後ろに引き拳にし構える。

ベムラーは先制攻撃で口から青白い熱線を吐くが水中の中というにも関わらず素早く動いて攻撃を避けると青い手裏剣光線ハンドスラッシュを放ち攻撃をする。

それから飛ぶように水中を泳ぎ腹部にパンチを繰り出すベムラーはゆっくりと後ろへ吹き飛ぶ。

「グワアアアア!!」

だがその状態で熱線を放ち左胸に当たりティガは腕を上げて藻掻くように後退り岩に足を引っ掛け転ぶと後ろに倒れベムラーは泳いで接近し踏み付ける。

ティガはこのままではいけないとティガクリスタルが赤く輝くと。

「ん~~~~ハッ!!」

額の前で両腕を交差してから腕を下げると青紫の模様も赤きなり素早さを犠牲に力を向上させた姿、パワータイプにタイプチェンジを

しベムラーの足を掴みそのまま立ち上がって持ち上げると投げ飛ばす。

パワータイプは水中戦に適した姿である。

「テヤッ！」

ベムラーに近付き力強いパンチを叩き込んでゆくティガ、だがティガはまだ気付いていなかった、ここが竜ヶ森の湖ではなくなっているのに。

（やっぱり動きにくい……！）

ベムラーを飛行機投げするように持ち上げるとジャンプし上を目指し飛ぶと同時にティガクリスタルが紫に光る。

「ふわあ……ポカポカしたお昼寝日和ですね」

幻想郷の霧の湖の中心の島に建つ紅い屋敷、紅魔館の門番の妖怪の女性、赤い髪の毛で緑の中華風な服装をした紅美鈴ほんめいりんがうとうとしていた。

「このままお昼寝しちゃおうかな？」

「何言ってるのよ」

背後に銀髪のメイドの女性が急に姿を現した。

「さ、咲夜さん！？べ、別に私はお昼寝なんてしようとは……………」

名前は十六夜咲夜、紅魔館のメイド長である。

「嘘おつしゃい！」

「ひえ〜！」

咲夜はナイフを出してお仕置きしようとしたら湖から水浸きが急に立ち何事だと思い空を見上げると。

「う、ウルトラマン！」

それは力を犠牲にし素早さを向上させた青紫の姿、スカイタイプにタイプチェンジをしたティガがベムラーを持ち上げたまま空に飛び立ったのだ。

「タアアアアアッ！！！！！！！！」

ベムラーを高く投げ飛ばすと腕を左右に広げ手にエネルギーを貯めてから上に挙げて手の平の間にエネルギーを圧縮し青い光の球が生まれ腕を下げ手裏剣のように青い光の矢、ランバルト光弾を放つ、矢はベムラーを打ち貫き、ベムラーは断末魔を上げる間もなく爆発し倒された。

「っ！」

ティガは回りの景色がさっきまで違つとわかり動揺を隠せず地上に降りると同時に光に包まれ紅魔館が建つ島の地に降り光が消えると光一の姿に戻る。

「ここは一体……僕は竜ヶ森の湖に居たはずなのに……うわっ!？」

辺りを見渡し後ろを向き紅魔館が建っており驚くと足を滑らせ湖に落ちてしまっ、泳ぎは上手いのだが先ほど疲れが残っており溺れてしまっ。

(ヤバイ……疲れてて泳げない……)

スパークレンスを出そうとするが空回りして出せない、このままでは命が危ないと感じていたが意識がだんだん薄れ手放そうとしていたら腕を掴み引き上げるものが現れ、そのまま身を任せ意識を手放した。

T o b e C o n t i n e d …

EPISODE 01 新たなる始まり（後書き）

ベムラーが竜ヶ森の湖に現れるのはお決まり？

次回出す怪獣は決まっていたり、1月に冬眠？から目覚めた原因の一つでもあったり。

次回予告

光一

「幻想郷？」

レミリア

「……………多分時空が不安定で……………」

美鈴

「それにしても最近ポカポカしてますね」

ファイヤーゴルザ

「グゴオオオ……………！」

光一

「ゴルザだと！？」

咲夜

「レイが逃がしたって言うてたのかしら？」

メルバ

「クオオオオオオオオン！！！！！！」

光一

「メルバまで……！」

次回【EPISODE 02 光を継いだもの】

EPISODE 02 光を継いだもの（前書き）

今回はティガで早速強敵が出現します。

登場怪獣

超古代竜メルバ

宇宙斬鉄怪獣ディノゾール

超古代怪獣ファイヤーゴルザ

登場

EPISODE 02 光を継いだもの

紅魔館の一室、光一はメガネを掛けていない状態で眠っていたが目を覚まし起き上がり。

「メガネ……………メガネ……………」

お決まりな事を呟きながらメガネを探し隣にあった棚の上に置いてあったメガネに気付きそれを着眼した。

「ここは……………」

辺りをキョロキョロし窓から外を覗くと霧の湖が見えていたが霧が出始めていた。

「霧……………」

時間は昼食の時間を過ぎた辺りだろうか、何も食べてないなと思うと腹の虫が鳴り響くとすぐに扉が開き中に咲夜がワゴンを押して入ってきた。

「気が付きましたか？」

「貴方は？」

お決まりの言葉を吐くと咲夜は自分の名と職業を紹介。

「僕は円光一です、助けていただきありがとうございます」

「湖に足を滑らせた時は驚きましたよ」

それを聞き顔を引きずる。

「……………見ました？」

「確実に」

ティガからその人間の姿に戻るのを目撃されていた。

「まあ……………大丈夫ですよ、同じような人を何人も知ってますから」
「同じような？」

その言葉に疑問に思うとまた腹の虫が。

「お昼過ぎてましたからそろそろお腹空いた頃だと」
「重ね重ねありがとうございます」

ワゴンに乗せていたのは食事等々だった。

「外の世界から来たのですよね？」

「外の世界？」

考えてみたら幻想郷の事を説明してないため一から説明して数分、
食事しながら聞いていた。

「なるほど……………妖怪とかね……………でなんで？」

「あ、いや、外の世界はどんな風に……………」

「どんな風につて……………」

光一も説明した、怪獣が現れてスーパーGUTSがそれに対処したりメトロポリスが昔東京と呼ばれていたたり人類が外宇宙に進出していたり。

「そうですか……………」

それを聞いて前にある人物から聞いていたのとは違うなと思っていため“ナイトレイダー”という名前知らないか聞いてみた。

「確か100年か150年ぐらい前に地球を守っていた防衛チームですね」

それを聞いて少し複雑な気分となっていた、その人物がいた時代では本当になくなっていた、この事を伝えるべきか。

なぜ聞かれたのかは興味本位と思っていたが別の真意があるとはまだ知らなかった。

「ごちそうさま、美味しかったです」

「ではこの紅魔館の当主の元に案内します」

「よろしく願います、咲夜さん」

「咲夜でよろしいですよ、光一さんはお客様なのですから」

「じゃあ僕も呼び捨てで呼んでいいよ、咲夜」

光一はベッドから降りて立ち上がり咲夜の案内の下、当主のいる部屋へ誘われる。

その頃、人里では。
ある家から黒い髪の毛の青年が出てきた。

「もう昼過ぎか」

両手を挙げて背伸びをする、この青年の名前はモロボシ・ジン（漢字表記 諸星 刃）、カズキと同じくウルトラマン、ウルトラマンゼロである。

「今日もいい天気だなあ」

ジンはゆつくりと歩き始めた、夕飯の買い物を兼ねて。

（今日の夕飯どうするか……………）

歩いていると里の人々が騒ついてるのに気付いた、なぜかと思っていると。

「あ、ジンさん」

「よう早苗」

緑色の髪の毛で青と白の巫女の服を着た少女、東風谷早苗（こちや さなえ）が話し掛けてきた。

「なんでみんなこんなに騒々してんだ？」

「ジンさんまた寝てたんですか？」

「朝早いから、事を済ませたら寝ちまうんだよ」

朝が早いのは本当である、戦い方が格闘といった拳法中心のため毎朝の鍛練だけは怠っていないが眠いたため朝食食べたらずまた寝てしまふのだ。

「朝ペドレオン出たのは？」

「それは知ってる、カズキがもう出てきたからぐっすり寝たけど」

「じゃあその次に霧の湖に現れた怪獣とウルトラマンは？」

その話には深く食い付いた。

「な、ナンダツテエー！？それは本当かい？」

「わざとらしいですよ、ええ、黒い怪獣と一緒に霧の湖から出てきてその怪獣を倒したみたいですよ？」

「どんなのだった？」

聞かれると思い妖怪の山に住む鴉天狗の妖怪、射命丸文しゃめいまる あやが発行している新聞、文々。新聞を出して見せる。

「文さん、ちょうどペドレオン戦の後に来ていたみたいでちゃんと写していたみたいです」

記事の一面には新しく現れたウルトラマンの事が書かれており写真はちよつと突然現れたからかブレていたがちゃんと何かわかるぐらの写真だった。

「これは……………ウルトラマンティガ！」

「ウルトラマンティガ？」

「いつからか知らないけど光の国に名が知られるようになったウルトラマンだ」

恐らく最初のギャラクシークライシスにより名が知られるようになったのだろう。

「3000万年前の光の巨人らしい」

「3000万って………ダンさんやゲンさんよりすごく年上じゃないですか！」

「ティガの血縁は途切れる事なく現代まで続きその現代の血を引くものがティガになって戦ったらしい」

不真面目な部分があると思いきや結構真面目であるジン、少し驚いていた。

「霧の湖だよな………チルノは確か」

「旅に出てますよ？まあ幻想郷の中ですが」

氷の妖精チルノ、闇を光に変えた妖精でダークザギの配下のダークメフィストの闇を光にしウルトラマンブリザードとなり戦っている、ザギの決戦の後、もっと強くなるために旅を、幻想郷の中だがしている。

「しょうがね、行ってみるか！」

「じゃあ私も着いていきます」

「じゃあ行こうぜ！」

この半年間、ジンもカズキもウルトラマンでなくても普通に飛べるようになっていた、二人は一緒に飛び立ち霧の湖を目指した。

「ここがそうです」

紅魔館では光一は当主の部屋の扉の前に来ていた。

「お嬢様、例の方が」

「入れてちょうだい」

扉を開けてから光一が部屋に入る、咲夜は入らず扉を閉める。

部屋の奥の椅子に座っていたのは背中にコウモリのような羽根、青っぽい髪の毛に赤い瞳にワンピースみたいな薄い紫っぽい服と帽子を着た少女、吸血鬼のレミリア・スカーレットがいた。

「貴方がさっきの光の巨人ね」

「はい、アレはウルトラマンティガと言います、僕の名前は円光一、あなた方が言う外の世界の人間です」

やはり外の世界という言葉を聞くと少し顔を引きつる。

「私はレミリア・スカーレット、この紅魔館の主人で吸血鬼よ」

先ほど幻想郷の事を少し聞いていたためさほど驚きはしなかった。

「ティガ………ある国の言葉で3という意味ね、という事は三つの姿があるのかしら？」

「お察しの通り、ティガには三つの姿があるのですが……」

言葉を詰まらせた、三つの姿だけではないと察した。

「三つだけではないのね、それとなぜ貴方はウルトラマンに？」

「それは……三ヶ月ぐらい前の事です」

三ヶ月前……

光一の自宅、屋根裏部屋の整理をしている時だった。

「確かこれ……」

荷物の中に木箱がありそれを自分の下へ近付ける。

「ダイゴさんが僕にくれた」

これは親戚のおじさんであるマドカ・ダイゴからもらった木箱であり、本人からは困った事があつたらこれを開けて中身のものを使えと言われていたらしい。

「……………」

光一は興味があつた、中身は一体何なのか、これで何ができるかが木箱の蓋を開けて中身を見ると中にはスパークレンスなのだが金と白ではなく黒と銀色のブラックスパークレンスと手紙が入っていた。手紙の内容は「君がこれを正しい心を持って使うのならば闇は光へと変わる」と書かれていた。

「ダイゴさんの字だ」

光一はすぐにダイゴの物だとわかった、手紙の裏を見ると白い制服を着て戦艦のブリッジの前に六人の男女が写った写真が貼られてあった、これはスーパーGUTSの前の防衛チームのGUTSの戦艦と制服だった。

「正しい心、一体……」

恐る恐るブラックスパークレンスを握る、だが何も起こる気配がないと思いきや突然地震が起きた。

「なんだ!？」

光一はすぐに屋根裏から降りて家の外に出ると皮膚がメタリックブルーで首が長く眼が四対で赤く丸い点が首に並べられた鞭のような尻尾を持った宇宙怪獣、宇宙斬鉄怪獣ディノゾールが地上に降り立ったのだ。

「怪獣……!」

怪獣が現われ人々は混乱し狭い道や大通りに入りっして一緒の方向へ逃げ出す。

その人混みに光一は流されるように走りだす、ブラックスパークレンスを握ったまま。

そして避難所に到着、その場から街の映像が見れるため見ているとディノゾールと赤と青と黄色の戦闘機が合体したスーパーGUTS

の大型戦闘機ガッツイーグルが駆け付け攻撃を開始する。

だがデイノゾールは怯む事無く街を破壊する、その映像を一緒に見ていた他の人々は騒ぎだす、自分の家が破壊されたなどと、自分の居場所がなくなり笑顔が消える、その連鎖が繰り返されており重い空気になってくる。

ガッツイーグルは三機に分離しフォーメーションを組んで前から攻撃を仕掛け後ろへ後退させようとビームを放っていくが結果はあまり見られていない、

このままでは街は壊滅してしまう。

（このままじゃ……………）

デイノゾールは赤い機体、 号を撃墜してしまう。

光一はそれを見ると体が勝手に動きだし避難所から出て気がない林の中に自然と向かってしまう。

ブラックスパークレンスを見ると勝手に振り上げてカバーを開いて起動してしまうと一瞬金と白のスパークレンスになった感じがした
が光一は気付くことなかった、そして黒っぽい光に包まれその場から姿を消すとデイノゾールの前に黒いウルトラマンティガ、ティガ
ダークが現れるが黒からすぐにマルチタイプになる。

「っー」

ティガにいきなり変身してしまったため驚きを隠せず手の平を見て回りをみると建物が小さく見えていた。

自分だけが驚いているわけがなく数年前に姿を現しあるウルトラマンと共に怪獣と戦ってすぐに姿を消したティガがまた現れたことに驚きと喜びを人々は露にしていた。

（僕がウルトラマンに……………）

だがその隙をディノゾールが逃す事はなく細く長い舌の断層スクー
プティザーを振るいティガを攻撃しダメージを与えるとその傷から
火花が散る。

「グワア！？」

ダメージに膝を地面に付くが立ち上がりディノゾールに向かって走
っていくがスクープティザーの速さに為す術なく近付けなかったが
スーパーGUTSの援護により攻撃は止まり接近してパンチやキッ
クを繰り出し攻撃をしていく。

「ハッ！」

長い首を腕で締め頭にパンチを数発食らわし腕を放すと胸部を蹴り、
吹き飛ばすとトドメを射そうと腕を後ろに引いてから前に伸ばし交
差するとゆっくり腕を広げ白い線が走り、L字に組み白い光線、ゼ
ペリオン光線を放ちディノゾールを倒しその場から姿を消すと光一
は元いた場所に戻り倒れた、先の戦いで体力を消耗していた、だが
それだけではなく闇を無理やり光に変えて戦ったため必要以上に消
耗をしていたのだ。

そして現在……

「それから怪獣と何度も戦って黒かったスパークレンスは金になり、
ティガダークにならずマルチタイプに直接変身できるようになった」

「力の使い方を自然に覚えていったのね」

「僕にはまだ………」と自信無さそうに言うがレミリアは。

「だけど正しい心を持っていたから力に呑み込まれる事無く戦えたのじゃなくて？」

「そう言われると少し照れます………」

頬をポリポリ指で掻く仕草を見せる。

「すぐに外の世界に帰りたい？」

「親は幼い頃に怪獣災害で亡くして親戚のおじさんは宇宙で研究していますから……… スーパーGUTSもありますから、少し幻想郷に興味がある」

「あら、そう、けど幻想郷にも出るわよ？」

出る、普通なら何がだが先の話をしていたためすぐに怪獣が出るとわかった。

「半年前に色々あってね、怪獣が現れたのはそれからもっと前だけだ」

「そうだったんですか………」

すると突然ポット等を乗せたワゴンと咲夜が現れた。

「お嬢様、紅茶の時間です」

「あらもうそんな時間」

光一は間が抜けた表情に、なんで、どうして咲夜がここに。

「私は時間を操る事ができるので時間を止めてここに入って来たんです」

そう、咲夜は時間を操る程度の能力があり時を止めて気付かぬ間に部屋に、時間を遡る事はできないが時を止めて様々な仕掛けができる。

レミリアは運命を操る程度能力があり他人の運命が見えたりする。

「すごい………（あつし陸が聞いたらすごく食い付くな）」

友人の名を心中でボソツと呟く、咲夜は紅茶を淹れる準備をしていると。

「こんにちは」

早苗が入ってきた、門番は何をしていると聞いた所外を見てと言われ窓から覗くと。

「ジンさん！今回は私が勝利をもらいますよ！」

「そんなの二万年早いぜ！」

門の前で格闘バカ二人が決闘していた、その隙に入ってきたのだ。

「美鈴………」

頭を抱える咲夜、後でお仕置きと思っていたが。

「それで貴方は何しに来たの？」

まあさしずめティガの事を天狗の新聞で知って来たんでしょ？」

「言わなくてもわかってるじゃないですか」

早苗も自己紹介する。

「ティガはその人間よ」

あっさり教えてビックリする光一だが。

「外の世界から来たんですか!？」

「そうだけど……………」

さつきから外の世界と三回も聞かれて疑問に思いながらも今がどんなものか教える。

「私も外の世界の人間なんです」

「そうなの？」

同じように自分の世界から来た人間がいたことに驚くのだが早苗は小さく「今の外の世界ではないのですが」と哀しげに呟いていたが聞こえなかった。

「本当はジンさんが行こうと言いだしたのですが本人がアレなんで……………」

早苗にも紅茶を出し再び外を覗くとジンと美鈴がドラゴ ボール並みの戦いを繰り広げていた。

（まさか……………美鈴さん……………!）

ある考えが過っていた。

（ジンさんと手合わせがまたできてよかった）と美鈴は心中で付く。

「オラアアアッ！」

ジンが飛び蹴りするがその足を掴み壁の方に投げ飛ばしたが。

「甘いぜ！」

壁を蹴って突撃、すれ違いざまに腕を掴んで。

「ヤベツ！」

「キヤーッ！」

掴んで投げようとしたが勢い余って湖に落ちた。

「あの格闘バカ二人は放っておきましょう」

それがいいと全員同じ考えで外を見るのやめようとしたら霧が晴れ
陸地が見えるとその陸が盛り上がり地底から巨大な姿を見せた。

「怪獣……！」

「アレは……ゴルザ！」

だが光一が知っているゴルザではなくファイヤーマグマエネルギー
を蓄えてパワーアップを果たした、黒く赤い血管のような模様が入
った筋肉質の体に頭部が硬い甲羅に包まれた超古代怪獣ファイヤー
ゴルザが現れたのだ。

「まさか……レイが逃がしたゴルザかしら？」

レイとは怪獣を操る事ができる地球のレイオニクスだが今はこの星

にはおらず宇宙にいるためファイヤーゴルザはリベンジする相手がない。

「ガゴオオオオッ！！！！！！」

ファイヤーゴルザは目の前に紅魔館が見えたためそれを破壊しようと歩きだす。

「こつち向かってるわね」

「向かってますね」

「そんな悠長な」

三人が向いた先には光一が。

「わかりました」

この場で変身しようとスパークレンスを出す。

「待った！ここで変身しないで！ウルトラマンの光は日光と同じだから私灰になっちゃう！」

吸血鬼なため日光はおるかウルトラマンの光は言語道断。

「あ、はい！」

光一は部屋から出て庭に入るとスパークレンスを持った右腕を伸ばし起動させると金色の光が発生し右腕に左手を組み両腕を回してスパークレンスを掲げて光を解放すると光一はティガ・マルチタイプに変身し徐々に巨大化してジャンプしファイヤーゴルザに飛び蹴りを放ち吹き飛ばし奇襲に成功。

「ハッ！」

腕を構えるとファイヤーゴルザは立ち上がりティガを見ると大昔の記憶が甦ったのか大きな咆哮を上げ怒りを見せる、大昔からゴルザはティガ等の超古代の巨人と戦っているためか同族の記憶があるのだろう。

ファイヤーゴルザは額からオレンジ色の光線、超音波光線を放つがティガはジャンプして避け空中で捻るように回転して背後に立つと背中にパンチを連続で食らわすがびくともせず。

「グゴ？」

「グウウ！？」

尻尾で吹き飛ばされてしまった。

「ハッ！」

ハンドスラッシュを放つがファイヤーゴルザはそれを吸収すると額から超音波光線を光弾として放ち攻撃、ティガは右に飛び込むように避けて転がり込み立ち上がると額の前で腕を交差し下へ下げるとパワータイプにチェンジ、力強いパンチを繰り出すが受け止められる。

「っ！」

左手でも繰り出すが受け止められそのまま持ち上げ腕を曲げティガを苦しめるが。

「タアッ！」

胸部を蹴りファイヤーゴルザから解放されると両腕を大きく回して
し字に組んで黄色いゼペリオン光線を発射し誰もが決まったと思っ
ていたが。

「ガゴオオオオオッ！！！！！！」

「嘘！？」

「まさか必殺技まで吸収できる体なんてね、あんな筋肉質の体で」
「まったくですね」

ファイヤーゴルザは必殺技のゼペリオン光線さえまで吸収してしま
い超音波光線をもっと強力にして放ってしまいティガはそれを浴び
て大きく吹き飛ばされてしまった。

「ジンさんは何してるんですか！」

早苗は外に出て湖の近くでジンを探し回る。

「咲夜、貴方も探してきてちょうだい、あのバカ門番もついでに」
「かしこまりました」

咲夜はすぐさまその場から消えジン達を探しに出掛けた。

「……………っ！」

レミリアはティガとファイヤーゴルザを見て表情が変わる、運命が
見えたのだ。

「まさかこの後に……………」

すると鳥の鳴き声みたいな声が響き紅魔館は揺れる。

「また怪獣……！」

早苗はその空を飛ぶ怪獣を目撃した、それは赤い体に竜のようだが嘴があり両手は鋏のような鎌で翼を大きく広げ大空を切り裂くように飛ぶ超古代竜メルバが来襲したのだ。

（メルバ……！）

ティガ「光一はかつてメルバと戦った事がある、その時にゴルザも現れ二体同時に戦い苦戦した記憶がある。

「クオオオオオオン！！！！！！！」

メルバは眼から赤い光線メルバニツクレイを放ち攻撃。

背中に光線を食らい膝を付く、前はゴルザが逃走したためスカイタイプになり倒せたが今はパワーアップしたファイヤーゴルザがいるためスカイタイプでは力負けしてしまい苦戦をかなり強いられる、作戦を一瞬で決めなければならぬがその一瞬させ怪獣は与えてくれない。

ファイヤーゴルザの超音波光線、メルバのメルバニツクレイが同時に放たれ円形の光の壁ウルトラバリヤーで防ぐがいつまで保つか分からない。

「ジンさん！」

早苗はまだジンを探していた、そして。

「見付けた！」

水面を大の字で浮いて流されてるジンと美鈴を見付け取り敢えず助ける。

「ジンさん起きてください！寝てないで！」

バシンバシンと頬を叩いてるとジンは目を覚まし起き上がる。

「アレ？俺何してた？」

「何言っているんですか、怪獣がウルトラマンと戦っていますよ？」

「マジで！？」

その方向を見るとティガが二大怪獣に苦戦しているのを目撃。

「これはヤバいな」

左腕に嵌められている三つの菱形の青い宝石が埋められた金のブレスレット、ウルトラゼロボレスレットからメガネのようなレンズがオレンジのウルトラゼロアイを出し。

「デュアッ！」

それを着眼、すると回りに二つのブーメランが乱舞して頭から姿が変わっていき二つの眼に緑色のビームランプ、銀のプロテクターにカラータイマー、赤と青に銀色のラインが走りブーメランが頭に装着されると腕を曲げて巨大化しウルトラマンゼロに変身を完了すると同時にファイヤーゴルザとメルバに炎を足に纏った飛び蹴りウルトラゼロキックを炸裂し二大怪獣を蹴り飛ばす。

「君は……………」

「俺はゼロ、ウルトラマンゼロ！セブンの息子さ」

「ウルトラセブンの……！」

ウルトラセブンはかつて地球を守っていたウルトラマンでかなりの実力の持ち主、ゼロの父親でもある。

「それはいい、アイツらを倒すぜ！」

「うん！」

ティガは体勢を立て直して腕を構えるとゼロも左腕を伸ばし手の平を広げ右腕を拳にし後ろへ引く拳法の構えをするように構える。

ゼロはメルバ、ティガはファイヤーゴルザに挑む。

「デリヤアアアツ！！！」

まずゼロはメルバに飛び掛かり取っ組み合いとなり左手で首根っこを掴み右手で殴り付けていく。

「デュアツ！」

手を放し腹部を右足で蹴り、そして左足を高く上げて回し蹴りをメルバの頭部に決める。

「クエエエエツ！？」

横を向くと左腕を両手で掴み背負い投げの要領で投げ背中から地面に落とすとその腹部に踵落としを叩き込むと首を掴み体を回転しジヤイアントスウィングを繰り出し再びメルバを投げ飛ばし、投げ技で攻めていく。

「ハッ！」

ティガは飛び掛かり勢いの付けたチョップをファイヤーゴルザの右肩に、そして右左とローキックを筋肉質の太い足に食らわしていく。

「タアアアアアッ！！！！！！！」

そしてファイヤーゴルザの胸部にエネルギーを拳に貯めて放つティガ・電撃パンチを打ち込み火花が散ると更に足にエネルギーを貯めて炸裂するティガ・電撃キックを繰り返したまや火花が散ると。

「ハッ！！！」

ティガ・電撃キックを回し蹴りで使用し頭部に食らわしファイヤーゴルザは横に倒れ立ち上がろうと前のめりになっているとそこにウルトラかかと落としを肩に打ち込むと顔面から地面に激突。

「フウウウウン！！！！！」

そこでファイヤーゴルザを頭が下になるように持ち上げ、一気に地面に叩き付けるウルトラヘッドクラッシャーを炸裂！

ファイヤーゴルザの頭は地面に埋まってしまい足と手をばたつかせる。

メルバも逃げようと翼を広げ飛び立つが、ゼロはカラータイマーの左右に頭に付いたブーメラン・ゼロスラッガーを装着し青白く光りだし両手を左右に平行に広げるとそれから青白い光線が放たれる。

「逃がすか……よっ！！！！！！！」

必殺技ゼロツインシュートを発射、光線はメルバを捉え一直線に向

かっついていき、メルバを光線が貫き、空中で爆散した。

「ハッハアアアア………！」

両手を広げ手の平に赤いエネルギーを貯めていき大きく回し胸の前でエネルギーを圧縮し左腕を拳にし曲げて右腕を伸ばし赤いエネルギー光線、デラシウム光流を放つ、光線はファイヤーゴルザの腹部を貫き、命中した場所から火花が散り、ファイヤーゴルザは大爆発した。

「デヤッ！」

「ハッ！」

ティガとゼロは空へ飛び消えていった。

「ジンさん、格闘バ力過ぎますよ？」

「すみません………」

先の対美鈴戦で遅くなったり探したりするのが大変だったため怒られてる。

「貴方は仕事サボって何決闘してるのよ」

「ごめんなさい」

こっちは決闘で仕事忘れてまんまと早苗に入らるので怒られてる。

「取り敢えず貴方どうする？幻想郷にいるなら紅魔館住む？」

「いいんですか？」

「ええ、貴方仕事できそうだから咲夜の補佐してもらいたいのよ」

レミリアの目には狂いがなかったり、光一は一人暮らしが長い
ためバイトも色々こなしており大学にも通える頭のため人並みに働ける
ぐらいの能力だった。

「そしたらお言葉に甘えて……………」

こうして紅魔館にお世話になる事になったのだった。

T o b e C o n t i n e d …

EPISODE 02 光を継いだもの（後書き）

ファイヤーゴルザとメルバの組み合わせは大怪獣バトル ウルトラアドベンチャーからです。

今回はあのバカが登場するのですが変身者がオリジナルで原作ダイナなのですが。

次回予告

スバル

「ネオマキシマオーバードライブの領域、越えます！」

ダイナ

「アレは……ゼロドライブ航法じゃねえか……！」

映姫

「近くまで参りましたので」

紫

「それはどうも」

小町

「四季様、アレ……」

スバル

「見たかあ！俺の超ファインプレー！」

次回【EPISODE 3 もう一つの光】

EPISODE 3 もう一つの光（前書き）

今回はえーきさまが登場、説教されたいなあー（笑）
そしてあのバカも登場！

登場怪獣

超合成獣ネオゲランダ
登場

EPISODE 3 もう一つの光

外の世界の宇宙、太陽系外の外宇宙の宇宙開発に積極的に関わる組織ZAP SPACYとスーパースパイGUTSが協力して小惑星に設置された宇宙ステーション、イカロス3。

そこではネオマキシマエンジンに変わるエンジンの実験を行っている。

そして今も、その実験機のテストパイロットが宇宙を駆けようとしていた。スーパースパイGUTSに入隊するため訓練学校に通っていたのだがZAPから引き抜かれテストパイロットをやっている頭にバランダを巻いたジングウジ・スバルはその実験機は動物でいうイカに形が似た灰色で青と赤のラインがコックピットに沿いV字に流れ真ん中辺りから後部に掛けて尾翼が付いた機体ガッツウイング・ゼロの可変翼が展開されているのを閉じスタンバイモードとなったのに特殊なブースターを後部に装着したスノーホワイト・ゼロに乗り準備をしていた。

「これがこうしてこうなって……………」

整備士の技術もかじっているため機体のシステムのセッティングをするのは馴れていた。

【スバル】

「あ、ムサシ」

モニターにスバルと同年の茶髪で青を基準にしたZAPの制服を着た青年、春風ムサシが映し出された。

「どうかしたか？」

【出撃前にアレなんだけど……………光一が行方不明になった】

光一は二人とは幼なじみであり仲がいい。

「なんだって!？」

【悪い、だけどこれは伝えておかなきゃいけないと思ったから】

ムサシは昔から宇宙に携わる仕事に就きたいと夢を見てZAPの訓練学校に、成績は優秀だったためすぐにイカロス3のZAP隊員となれた。

「サンキュームサシ、だけど見送りは可愛い娘が良かったなあ」

【相変わらず女の子好きだなあ……………】

「まあな」

ゲラゲラ笑いながら返すと出撃の時間となり。

「じゃあそろそろ行くわ」

【ああ】

スバルはヘルメットを被り酸素マスクを装着しコックピットを閉め整備員の指示に従い機体を移動させカタパルトに着くと機体を固定させる。

整備員は退避するとスバルはシステムを一つ残してすべて起動、ハ

ツチが開き。

「スノーホワイト・ゼロ！ジングウジ・スバル、発進します！」

ブースターに火が点火しスノーホワイト・ゼロは発進し隣にスノーホワイト・ゼロと同系列の機体が並んで飛行する。

宇宙ステーションの近くにある光が飛んでいた、光の中には赤と青、額にティガのように菱形の、回りが金色の淵に囲まれたダイナクリスタルが付き、胸に銀で大きい金色に塗られた溝が流れるプロテクター、その中心にカラータイマーが付いたウルトラマン、ウルトラマンダイナ・フラッシュタイプが飛んでいた。

「まったく……参った参った……次元震が起きたと思ったらギヤラクシークライシスが起こったなんてなあ」

少し人間臭いがダイナの変身者も人間なため仕方ない、更には元の世界では行方不明扱いで異世界に流れ着き旅をしていたが光の国に寄った際にギヤラクシークライシスが起きたと聞き地球へ向かって、その元の世界がこの世界と融合したと知り。

「まさかこんな形で帰れるなんて……リョウ、みんな、待つてよ……アスカ・シンがすぐに帰還するぜ！」

ダイナは更に飛行速度を加速し地球へ向かうがそこであるものを目にした。

「アレはスノーホワイトか……………」

その機体はよく知っていた、ガッツウイング1号の宇宙用の実験機だからだ。

「ネオマキシマ……………まさかな」

ダイナは引き返しスノーホワイト・ゼロに着いていく事に、だが同じように後を着いていくものが……………

【では始めてくれジングウジ】

「ラジャー!!」

まずはネオマキシマエンジンに切り替えそれを起動しブースターを温め飛び続けると。

「ゼロドライブ、起動します!!」

そしてネオマキシマを越えるゼロドライブエンジンに切り替え、ダイナはそれを見て。

「ゼロドライブ……………!!」

かつて自分もその実験機に乗った事があったなと思いながら追い掛けているとスノーホワイト・ゼロは更に加速していきネオマキシ

マの領域を越えてゼロドライブの領域に達しようとしたその時。

「ガシャアアアアアッ！！！！！！！！！！」

「っ！」

その後を追う怪獣が現れた、それは青い皮膚が外骨格に覆われ左右の肩から伸びた羽根を展開した宇宙有翼骨獣ゲランダが現れたのだが。

「ゲランダだって！？」

スバルもゲランダの存在に気付き実験の中止を命令されるがゼロドライブのエンジンを停止したら追い付かれ命の保障がないと思ったその時。

「ジュワッ！」

ゲランダを光が吹き飛ばした、そこに駆け付けたのはウルトラマンダイナ・フラッシュタイプだった。

「まさか……………あの……………伝説の……………ウルトラマンダイナ！」

ダイナが駆け付けたのにホッとし戦闘区域から離脱するためゼロドライブのシステムをゆっくりと落としていく。

「デュワッ！」

ダイナとゲランダは飛行しながら激突するがゲランダはしぶとくスノーホワイト・ゼロを追い掛けるため距離が離れない。

（しぶてえーな！）

青い手裏剣光線ビームスライサーを放つがバリアで防がれた。

（っ！今のは……………亜空間バリヤー……………！）

普通ではあり得ない能力を持っていたためダイナは驚く。

（スフィア……………）

それは宇宙球体スフィアが何かに取り付き得るバリアなため、だがスフィアの親玉グランスフィアはダイナが倒した、その生き残り判断し必殺技を放とうと腕を十字に組むが。

（コイツのバリア破ってもコイツが効くか微妙だな……………）

だがかつてゲランダと戦った事があり必殺技を放ったのだが倒せずある戦艦が倒した事があり事実上ダイナはこの怪獣に勝った事が無い。

スフィアが合成した事によりゲランダは超合成獣ネオゲランダとなっていたのだ。

スフィアは人類が外宇宙に行くのを良く思っておらず全生物を一つにするという野望を持ち行動していたためこのゼロドライブの実験途中のスノーホワイト・ゼロに襲い掛かったのだろう。

「人類の夢の邪魔をさせてたまるかあああああつ！！！！！！！！」

腕を十字に組み青い必殺光線、ソルジェント光線を発射するが亜空間バリヤーで一瞬だけ防ぐが撃ち抜かれゲランダに命中し爆発し炎が巻き起こるがその中から赤い光線ジービームを放つゲランダ。

「うわあああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

光線はスノーホワイト・ゼロのブースターを霞め火花が散り制御不能となる。

「しまった!」

ダイナは腕を胸の前に交差しプロテクターがなくなり銀と青、ダイナクリスタルも青くなった超能力戦士のミラクルタイプにチェンジするとスノーホワイト・ゼロの元にテレポート。

(パイロットは……………)

高速で飛んでいたからか光線が霞めた機体の衝撃が強かったのかスバルは気絶しておりシステムのチェックすらままならず。

(仕方ねえ!)

ダイナは光に包まれると粒子となりスバルの体に纏うと光は消え、スバルは目を覚めますがこれはダイナが憑依して体を動かしているのだ。

「えっと……………新型かよ……………コイツの記憶探るか!」

Dスバルはスバル本人の記憶を見て新型の操縦の仕方を覚えると操縦桿を右手で握り左手でシステムをチェック、エンジンを落とそうとするが後ろからネオゲランダの追撃が。

「スフィアの奴しつけない!」

振り切ろうとあるシステムを起動させた。

「取り敢えず振り切る！停止したら近くのZAPに拾ってもらえば！」

ゼロドライブを起動させ再び加速、ネオゲランダもそれにしぶとく着いていく。

「いけえええっ！！」

そしてゼロドライブで入れる光の空間に入るがネオゲランダも入ってしまう。

「ガアアアッ！」

再びジービームが放たれブースターに命中してしまう。

「やべっ！」

完全に制御不能に陥ったスノーホワイト・ゼロは暴走し光の空間からネオゲランダと共に姿を消した、いや、この宇宙から姿を消したのだった、まるで神隠しにあったように……

幻想郷の八雲邸の近くの森の中では。

「四季様、待ってくださいよ。」

その中、赤っぱい髪の毛を左右小さいツインテールになっており江戸時代の服装みたいな服を着て鎌を持っていかに死神つかこまち死した小野塚小町、名前から女性であるのは明白。

「これでもゆっくり歩いていますか？」

緑色の髪の毛で黒金白と少し目立つ帽子を被り紅白のリボンを付け紺色を基準にした服装の四季映姫・ヤマザナドゥ、彼女は幻想郷の地獄の閻魔で死者を裁いたりするのが仕事、ヤマザナドゥは役職名で幻想郷の閻魔という意味。

二人は普段は忙しいがたまに休みだったためもあるが八雲邸、紫に用があったりもする。

因みに小町は三途の川から地獄まで魂を運ぶ水先案内人だがサボるためほとんど映姫に怒られてる。

「最近幻想郷が変だと感じませんか？」

「え？それは前からですけど……確かに最近はずごく……それに」

一度区切り真剣な表情に。

「半年前、破壊神と次元神が現れるなんて……」

死神も神のためザギとノアの事は詳しくは知らないが名前だけは知っていた。

「ええ、それと怪獣が多く現れるようになった、少し八雲紫が絡んでいるのではないかと思ったのでそれを確かめに」

「そのためにあたい達の休暇は潰れるんですね……………とほほ……………」

中間管理職の悲しき定めなのか、映姫は実に真面目なため休暇を返上してでも真相を確かめると同時に説教もしに八雲邸へ向かうのだった。

そして歩いてるその時！

「退いた退いたあゝ！」

「ん？わっ！？」「」

一台のマウンテンバイクが二人の間を通過した、カズキが確実に乗っていた。

「危ないなゝもう、アレ確か外の世界の乗り物のマウンテンバイクですよ」

「本当に危ないですね、アレに乗ったものを後で見付けだしてお説教を」

少し気の毒に思う小町だった。

そして八雲邸。

「今回はどう言ったご用件でしょうか？」

紫が居間で対応していた、紫の式神の狐の妖怪で狐耳に帽子を被った八雲藍やくもらんはお茶を出していた。

「近くまで参りましたので」

完全に嘘であつたがそれぐらい見通せるし用件は何かわかつていたが。

「それはどうも」

一応返した、するとやはり怪獣などやノアやザギの事を聞かれたため、どうせすぐバレるなら話した方がいいたろうと、だが少し待ってもらふ事に、その話をするためにある人物が帰ってくるのを待つ事に、すると。

「ただいま！」

大きなブレーキ音に土煙を上げてマウンテンバイクを横にして停車させるカズキが藍の式神の化け猫の少女の猫耳で帽子を被った橙ちえんを担いで帰ってきた。

「橙えええええええええん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そこで藍が大きく反応、橙が帰ってくるのが遅いと心配した藍が力ズキに探すように頼んだのだ。

「藍しまゝ」

「橙！どこにいたんだ？心配したんだぞ」

藍は駆けてくる橙を抱き上げホツとする。

「ごめんなさい、行つたことない道に入ったら迷子になつて……」
「橙が無事でよかった、カズキ様、ありがとうございます」

「いって」と返したら藍と橙は紫達の邪魔にならないため別室に入つたのだつた。

「ってあれ？そつちの二人どこかで……」

一瞬だつたためか顔までは覚えていなかった。

「さっきそれであたい達にぶつかり掛けたよね？」

二人はマウンテンバイクがあるからすぐにわかつた。

「あ、そういえば」

それを聞いた紫は少しまずいと思つた、実は紫は映姫が苦手である、生真面目、説教魔、理屈っぽい等々が、マウンテンバイクでぶつかり掛けたなんて言語道断、説教対象に。

「その貴方、上がって正座して座りなさい」

「え？」

「いいから座りなさい」

「あ、はい」

言われた通り上がり正座して座る。

「貴方は一体何を考えているのですか？あんなものでぶつかったらどうするのですか？」

目を瞑りながら説教が始まった。

10分後……

「だいたいあんなものが………」

更に20分後……

「ガミガミこみこみ」

そして更に30分後、説教が始まり一時間は経った。

「それでもってこうでって、聞いてます?」

時間が経ったなと思い目を開けると。

「……………すう……………すう……………」

爆睡していた。

「寝るなああああああああああーっ!!!!!!!!!!!!!!」
「」

その事に更に激怒、長くて小町と紫も一緒になって寝ていた。

「「「あ、ごめんなさい」「」」
「あなた方もですか八雲紫、小町」

怒りと呆れに見舞われたため息を吐くと少し落ち着いて一時間前に話していた話題に戻す事に。

「はあ………まったくあなた方は」

「ストップストップ！また話が戻る！」

そこでカズキがストップを掛けて映姫も確かにと我に返る。

「それでこの二人誰！？」

カズキにはまだそこからだった、映姫と小町とは面識がないため無理もない。

説明のため軽く10分経過……

「閻魔様と死神かあ………」

ちゃんと理解したみたいだった。

「それで、アンタ誰なんだい？」

「俺は八雲カズキ」

「八雲って………ええ！？」

同じ名字、血縁者が何かなのは明白。

「貴方はいつから子持ちになったのですか？」

「軽く20年ぐらい前？」

取り敢えず20年ぐらい前にカズキを産んだと説明、更に父親は宇宙警備隊隊長のウルトラ兄弟の長男ゾフィーとの間の息子と捕捉。

「あの方の……」

映姫もゾフィーもこの事は知っていた。

「頭に炎が燃え上がった事や捏造した事は？」

もちろんそんな事は父親にしかないほとんどない。

「隠し子に近い感じに外の世界で育ちましたから」

「後でもう少し貴方と話さないといけない事が……また言つと話が脱線したままになりますので戻します」

また説教かと思ひホツとする三人。

聞かれた事は怪獣の大量発生やザギやノアの事を聞かれ正直に全て話した、外の世界はこの幻想郷が知る世界ではなく多元世界となり遙か未来となつてしまった事も。

「そうでしたか」

「あたい達が知らない間にそうなつてたなんて……」

事の大きさに驚愕する二人。

「幻想郷と八雲カズキ等の幻想入りしたものは戻れなくなるタイムスリップをしてしまったと」

その簡単に纏めた今の状況を述べる映姫の肯定するように頷く。

「アンタも大変だったね」

「まあ……もう……気にしてないから」

間が空いて言っているため結構気にしており未練があるみたいだった。

「ちょっと藍と橙の所行つてて」

「う、うん……」

やはり今の話はキツイと思っていたが当事者もいた方が進むと思ったのとどのくらい立ち直ったかを確かめる意味も込めて参加させたがまだ早かったと自分を戒める。

カズキは別室に行き席を外す。

「アレでもマシにはなった方なんですよ？」

多元世界になって自分の時代の世界に帰れなくなった時の荒れようなんて……」

「わからなくてもいいですが」

「明るく振る舞っても内心は未練と外の世界はどんなのだろうと考えていますから」

カズキの心境について話していると小町は外を覗き空を見上げると。

「四季様、アレ………」

二人も空を見上げるとそこには黒い雲の渦、どこかどこかの空間を繋げるゲート、ワームホールが開いていた。

「多元世界となって次元が不安定になり幻想入りする外の世界の人間が増えた、そういうわけですね」

「はい」

するとワームホールの中から一機の機体が、それは宇宙で行方不明となったスバルが乗るスノーホワイト・ゼロだった。

「どうするどうするどうする！」

Dスバルは焦っていた、昔自分が乗った機体とは違うシステム等が搭載されているため使い方がわからなかったのだ。

「機体は昔のなのにシステムは最新型って！」

このままでは墜落して大惨事となる、そこに。

（体を俺に返せ！）

スバルの意識が戻ったのだ。

「お前、意識が」

（ああ、だから体を、コイツの事は俺が一番よく知ってる！）

「わかった、頼むんだぜ、お前の名前は？」

（ジングウジ・スバル、アンタ、ウルトラマンダイナだろ？）

「話が早くて助かる！」

ダイナはスバルの意識に体を返すと意識が戻ったスバルは凄まじい速さでシステムをチェック。

「機体本体に問題はない……………ならブースターを切り離せば！」

そして、ブースターを切り離すコードを入力すると実験用のブースターは切り離されガッツウイング・ゼロとなり可変翼が展開しスタンバイモードから高機動モードになり墜落していたが一気に急上昇し飛翔する。

「見たかぁ！俺の超ファインプレー！」

（あー！俺の台詞うー！）

ガッツウイング・ゼロは水平に飛行しスピードを落とす。

（お前すげーな）

「整備士の技術も少しかじってたからな、システムのチェックと機体の動かし方はバッチリ覚えてるツスよ！」

適当な場所を見付けV・TOL機能でその位置に浮遊すると下部から車輪が三つ出て着地する体制に入る。

（そうだお前、なんでこんな古い機体使ってるんだ？

ゼロドライブの実験機のプラズマ百式があるはずだぜ？）

「俺、このガッツウイングが好きなんツスよ、無理言ってこれを使わせてくれて頼んだんす」

（気に入ってるからか……………わかった、当分はこのままがいいな、状況が把握できてねえからな）

「当分よろしく、ウルトラマンダイナ」

ガッツウイング・ゼロは地上に着陸、マスクやヘルメットを取りコックピットを開け外に出る。

「てかここどこだろ？」

辺りを見渡すが回りは木ばかりだった。

「地球に似た景色だけどこんな場所数少ないはずだぜ？」

どこにいるか確かめようとしたがエラーが出て場所がわからずじまい。

（降りて、探索してみよーぜ）

「賛成」

スバルは後部座席からガッツブラスターという光線銃と一つのケースを持ちコックピットを閉じて降りる。

（ガッツブラスターか、まだ使ってたんだなスーパーGUTS）

「主力の一つツスから」

ガッツブラスターを手に持ち辺りを警戒しながら歩くスバル。

「何が出るんだ……出るなら可愛い女の子が」

（お前、女好きかよ）

「それが健全な男子の性ツスよ」

ダイナは確かには思いつつ、自分も何かいないか警戒して見ていると。

(スバル、何か来る)

「え？」

草が揺れる音が聞こえてきてその方向を向きガッツブラスターを構える。

「何が出る？怪獣？化け物？妖怪？それとモンスター……」

ほとんど同じ意味の言葉だが気にせず引き金に指を掛けると。

「この辺りですね」

と出てきたのは映姫だった、それに対しスバルは。

「可愛い娘キタ——」
「—————!!!!!!!!!!」

大声を出して大いに喜んだのだった。

To be Continued:

EPISODE 03 もう一つの光（後書き）

長くなりそうだったので二話構成に、前回も二話構成にすればよかったぁ……………！

最後なんかフォーゼっぽい事を（笑）

スバルの元ネタはスパロボのタスク・ジングウジと流星のロックマンの星河スバルで性格はタスクとリリなのスバル・ナカジマ似でバカで女好きです。

ダイナは憑依してます、もちろんアスカが。

スフィアはギャラクシークライシスにより生き残りが何体か紛れ込んだためゲランダに取り付いてネオゲランダとなりました。

次回予告

映姫

「貴方はなりふりかまわず……………」

スバル

（説教臭くて堅物な女の子……………結構好み！）

カズキ

「外の世界……………」

ネオゲランダ

「ギシャアアアアッ……………！！！」

スバル

「本当の戦いは……………」

ダイナ

「これからだぜ！」

次回【EPISODE 4 目覚めよスバル】

お楽しみに！

EPISODE 4 目覚めよスバル（前書き）

なんか全然タイトルとは違う内容に。

登場怪獣

超合成獣ネオゲランダ

登場

EPISODE 4 目覚めよスバル

「可愛い娘キも二度も言わなくていいです！」すみません」

なぜか前回叫んだのにもう一度叫ぼうとしたため映姫に止められたスバル。

「何ですか？いきなり見た瞬間大声を上げて、初対面の方と出会ったらずは自己紹介、それが基本ですよ？」

「あ、はい」

「少しそこに正座して座りなさい」

言われた通りに正座するとやはりお説教が始まった。

（10分後）

「だいたい最近の若者は……………」
(オッサン臭い説教だな)可愛いのに)

↓ 20分後 ↓

「ということでありがたいですよ」

スバルは映姫の説教をニヤニヤしながら聞いてる、注意しないのは目を閉じてるからだ。

そして30分後とやはりまた一時間経過した。

「というわけでした……………ん？」

そこでようやく目を開けスバルがニヤニヤしているのに気付く。

「私は漫才しているつもりはないのですが？」

「いやあゝこんな美人さんに説教してもらえるなんて」

「……………ありがとうございます、ですがそれとこれとは話は別ですよ？」

間が空けてから礼を言うのだがそんなので騙される閻魔様ではなく再び説教が始まろうと、これにはさすがのスバルも驚いていた、大抵なら美人とか綺麗とか言えば話は逸れるが映姫は違った。

（まさかコロツと騙されないなんて……………しかも性格キツくて説教臭くて美人、俺好み）

（お前……………）

スバルと同化したダイナは半ば呆れていた。

「それで貴方……………えっと……………」

説教始めたがいいが名前聞いていなかった。

「あれれ？自分がまずは自己紹介って言ったのに俺から言わせようとするんツスカ？」

「揚げ足取らない！」

恥ずかしそうに怒鳴り少し落ち着いて自分の名前を教えスバルも教えた。

「では話の続きを……………」

「俺に発言権なし!？」

そろそろ飽きてきたため自分からも話そうとしたがまた始めようとしたが口を挟んだ。

「忘れてました、貴方は外来人ですね」

「いや、俺日本人……………えーきちゃんも日本人でしょ、名前からして」

「えーきちゃん……………まあいいでしょう」

映姫は幻想郷について説教を交えて説明を始めた。

「なるほど……………てことはここ地球……………」

光の空間の中で突然消えたと思ったならワームホールから飛び出して幻想郷に着いたのかと確信した。

「物分かりが早くて助かります、なので貴方は早く外の世界に帰るべきです」

「た、確かに……………」

帰りたいたのだが目の前の美人を放っておくのは勿体ないなと思っていたりしダイナにまでバカ呼ばわりされていた。

そこでやっと第三者が会話に入ってきた、それは小町だった。

「四季様、もしかしてアレに乗っていたのって？」

「彼みたいです」

正座してるスバル見て説教されたなとわかり苦笑するが。

「うつひよ！また美人！」

「あたいの事かい？嬉しい事言ってくれるね」

小町とは馬が合うようで会話が弾もうとしたが。

「貴方達……………」

「ヤバッ……………四季様キレた」

小町の経験上キレたらいつもより長い長い説教が始まるだろうと悟るが逃げれるわけもなく説教が始まってしまった。

その頃ガッツウイング・ゼロの元にカズキがやってきていた、スバルを見付けるよりも先にそっちが見付かったのだ。

「これが未来の世界の機体か」

正確には異世界なのだがカズキに取っては未来だった、機体の装甲を触り考え込み、そして思う、外の世界に出てみたいと、だが複雑だった、変わってしまった古巣に戻る勇気が出なかったのだ、怖くて。

「やっぱりまだ幻想郷に居た方がいいか」

まだと言っには出る気はあるがそれがいつになるか誰もまだわかっていない。

「カズキ様」

後ろに藍がやってきた、一緒にガッツウイング・ゼロとそのパイロットであるスバルを探していたのだ、紫は嫌々だが映姫の言う事は逆らえず探している。

「藍……………」

「どうかなさいましたか？」

ガッツウイング・ゼロがある方を振り向いて表情を隠す。

「何でもない……………何でもな……………」

前を向こうとすると急に抱き締められた、少し懐かしい感じもした。

「ゆっくりでいいんですよ……………焦らずゆっくり」

藍にはわかっていた、カズキが焦っていると。

「ありがとう……………」

それから離れると。

「昔これでもカズキ様が赤子の頃抱いた事があるんですよ」

「だから懐かしいと思ったんだ」

納得した、自分のその気持ちに。

「では行きましょうか、四季様がこの機体のパイロット見付けたみたいなので」

「うん」

二人は映姫やスバルと小町がいる八雲邸へ向かった、ここに来る前藍が合流したから来るように促したのだ。

「というわけなんす」

幻想入りする前自分が何やっていたかを話すスバル、中にはダイナの事も出てきたが今自分の中にいるとは言っていない、言おうとしたがダイナに止められたからだ。

「ウルトラマンダイナか……………」

「聞いた事ないっすか？ちょっと前に世界救って行方不明になったウルトラマンですよ」

カズキ達が知らないのは無理もない、元々この幻想郷は普通だったから100年昔の存在だったはずなのだから。

「まあいいつす、取り敢えず帰してもらえますか？」

「そうですね、というわけで八雲紫、彼を外の世界の宇宙に………」

映姫は言うが紫は少し何か言いにくそうな顔だった。

「申し訳ないのですが………この時代の外の世界の地名も覚え切れていないので……宇宙は一応行けますがちょっとですね………」

宇宙には少し因縁があるらしく映姫はそれ悟る、だが宇宙や地球に何があるかもまだ把握していないためせいぜい地球か宇宙のどこか、帰したら迷子になってしまう。

「そんな〜」

この時代という言葉は反応しようと思ったが宇宙には帰れない事が分かり落胆していたのだが。

（まあもう少しここに居れるのか………）

少し嬉しそうだった、紫、藍、橙を見て確信したのだ、この幻想郷には美女、美少女がたくさんいると。

（上手く行けばハーレム完成するんじゃない）

顔がニヤついていた、それを映姫が見て。

「よからぬこと考えてますね？」

「ギクツ！」とお決まりの声を上げ一瞬にしてバレ。

「もう少しありがたい言葉を聞かせた方がよろしいでしょうね」

スバルは墓穴掘ったと思いながら説教を受けようとしたその時だった。

突然何かがすごい早さで突っ込んできた。

「文！？」

それは鴉天狗で文々。新聞を発行している射命丸文しめごまる あやだった。

「カズキくん大変です！里の上に怪獣が！」

「なんだって！？」

スキマを使い人里へ行く事に、スバルが軽く驚いていると文もその後を着いていく。

「小町、私達も行きますよ」

「やっぱり」

映姫と小町もスキマを通り人里へ。

「怪獣……まさかな」

ある考えがあつた、自分も幻想入りしたのならば襲った怪獣もして

いるのではないかを。

「俺もちよつと行つてきます!」

スバルもスキマに入つていった。

「あらあら、元気いいわね」

紫は残るのだった。

そして人里、上空を飛んでいたのはやはりスノーホワイト・ゼロを襲っていたネオゲランダだった。

ネオゲランダは品定めするかのようにどこから襲つか円を描くように飛んでいた。

「ありやモネラ星の怪獣じゃねーか？」

ジンは上を見上げネオゲランダを見ているとカズキ達が到着し合流しスバルを見る。

「ん？お前……………まさか」

「な、なんだよ？」

「……………今はいいか、ベリアルの子以来だな」

それを言つたためスバルの意識下のダイナはジンが誰かわかったのだった。

気付けばカズキはおらず上空にネクサス・アンファンスが飛んでいた。

「アレは……………ウルトラマンネクサス！」

その名を叫ぶスバル、ネオゲランダはネクサスに気付き襲い掛かる。

（ジュネッスブレイブ……………いや！）

ネクサスは青く腰の辺りに銀のファッショントワーが流れるスピードとテクニクが向上し右腕にアローアームドネクサスが着いたジュネッスブルーにスタイルチェンジ、ジュネッスブレイブは本物のネクサスと同化していたため他と同じように使っていたが本物のネクサスと同化を解いたため大量の消耗が激しくなっているのだ、ジュネッスやジュネッスブルーは普通に使える。

（これなら素早く攻撃できる！）

ネクサスは手裏剣光線パーティクルフェザーを連射するがネオゲランダは亜空間バリヤーを張り攻撃を防いしまった。

（なんだと！？）

想定外のため動揺を隠し切れず突撃するがネオゲランダのジービームが迫る、避けようとしたが里に被害が出るためサークルシールドで防ぎ再びパーティクルフェザーを発射するが防がれる。

（予想外だった！まさかバリヤー使うなんて）

ネオゲランダは突撃し羽根でネクサスを切り裂く。

「ヴワァ!?!」

体に火花が散ると今度は逆方向から突撃されまた羽根で切り裂かれる。

「ハアアアアア……!!」

光線を放とうと両手の間にエネルギーを貯めていくがジービームによる強襲を受け妨害されてしまう。

「ネクサス大丈夫かよ!」

地上のスバル達は不安になっていた、このまま負けるのではないかと。

（おいスバル!）

（ダイナ?）

ダイナに話し掛けられるスバル。

（すまない、俺はこのまま黙って見ていることができない）

（まさか……俺にダイナに変身して戦えとか?）

しばらく黙り込むため当たりなのだろう。

（そりゃいきなりウルトラマンになって戦えなんて嫌だよな……
やっぱり俺が分離して）

ダイナの考えは早く変身して戦った方が無駄な時間使わなくていい
と思ったからであるが、だがそんな了承してくれるわけないと思い
スバルから離れようと意識を集中しようとしたが。

（いい、戦わせてくれダイナ）

（スバル？）

思っても見なかった答えが返ってきた。

（俺もこのまま見ているなんてまっぴらごめんさ）

スバルは女好きだが正義感は常人より遥かにあった、見ているだけ
は自分の心が許さなかったのだ、焦ってきたためガッツウイング・
ゼロは八雲邸の近く、なら自分がすぐに戦うためなら。

（……………すまねえ、恩に着る）

（いいさ、宇宙で助けてもらったからな！）

スバルは決意、すると手に光が集まり茶色く顔が彫られたアイテム、
リーフラッシャーに構成され握られる。

「スバル、それは一体？」

映姫に質問されるが。

「そんな事は後！」

「……………カズキを頼んだぜ、ウルトラマンダイナ」

ジンはわかっていたのだ、スバルの中にダイナがいたのが。

「ウルトラマンダイナって……！」

スバルは前に出てリーフラッシュャーを強く握る。

「本当の戦いは……！」

リーフラッシャーを持った腕を下げる。

「（ここからだぜ！）」

意識下のダイナも共に叫ぶとそのまま腕を振り上げ。

「ダイナアアアアアアアーッ！！！！！！！！！」

リーフラッシャーのクリスタルが開き光に包まれるとその場から飛び立つ。

「ギシャアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」?

光はネオゲランダを吹き飛ばし巨人の姿、ウルトラマンダイナ・フラッシュタイプの姿となる。

「ウルトラマン！」

「お前がネクサスだったなんてな」

始めてスバルがダイナに変身しているとわかり驚いているとネオゲランダが体当たりを仕掛ける。

「ショワッ！」

ダイナはフラッシュ光弾という光線を放つが亜空間バリアーに防がれてしまうが諦めなかった、今の自分はウルトラマンだと言い聞かせ。

（まだまだ！）

青い手裏剣光線ビームスライサーを連射する、亜空間バリアーに防がれるがそこを狙いだった。

「シエアッ！」

そこにネクサスが回転キックを背中に仕掛けネオゲランダに初めてダメージを与えると同時に赤い力のジュネッスにスタイルチェンジする。

（行くぜスバル！）

（やってやろうぜカズキ！）

二人のウルトラマンは突撃しネオゲランダの体にパンチを繰り返す、亜空間バリアーを張るがそれさえ破りダメージを与え殴り飛ばしそこにパーティクルフェザーとビームスライサーを打ち込み追い討ち。

「アレがウルトラマンの力」

「そうさ、最後まで諦めなければウルトラマンは不可能を可能にする！」

ジンも続いてゼロに変身、ネオゲランダに急上昇しながらウルトラゼロキックを打ち込む。

（お前さっきのー！）

（おう！俺はウルトラマンゼロ、セブンの息子だ！）

やはりダイナもティガである光と同じ反応、ネオゲランダはジームを放つがダイナのウルトラバリアーで防がれる。

（合体光線でバリアー打ち破るぞ！）

（（ああ！））

ゼロは左腕を横に水平に伸ばし右腕の拳が光る。

ネクサスは腹部の前で両手を交差し拳が上に向くように曲げその間に青い稲妻が走り両手を上げるとアームドネクサスに青い光が纏う。

「デヤツ！！！！！！！！」

「シエアツ！！！！！！！！」

腕をし字に組みゼロは金色の光線ワイドゼロショット、ネクサスは青い光線オーバレイ・シュトロームを放つ。

「シヨワツ！！！！！！！！」

ダイナはソルジェント光線を発射、三つの光線は一つとなりサード・ブラスターという合体光線となり亜空間バリアーを打ち破り、更にネオゲランダの体を打ち抜いた。

「ギシャアアアアーツ！！！！！！！！！！？」

ネオゲランダは大爆発を起こした、ここで初めてゲランダをウルトラマンの光線で倒したのだった。

「やりましたね四季様！」

小町は両手を挙げ大喜び、映姫も心の中で喜ぶのだった。

「まさかゼロがここにいたなんてな」

ダイナの意識に変わったDスバルはジンと会話する、これで宇宙に帰れる目処が立つのだが。

（なあダイナ）

（なんだ？）

スバルはDスバルに話し掛ける。

（もう少しここにいていいか？）

（まあお前が居たいならまだこのままがいいな）

了承してくれたためスバルはまだ幻想郷に残る事にし、ダイナはまだ同化したままに、それが一番いいと思い変身もスバルに任せる事に。

「ところでえーきちゃん」

スバルの意識に戻るといきなり話し掛け。

「何でしょうか？」

「これから一緒にお茶しない？」

デートの誘いな事をするが。

「貴方って人は……………」

先ほどの女に対する態度にカリカリしていたため。

「まさか……………」

「そこに座りなさああああああああい……………!!」

説教が始まるのだった。

T o b e C o n t i n e d …

EPISODE 4 目覚めよスバル（後書き）

今回はあの似たような怪獣が二体登場。

次回予告

カズキ

「怪獣の像が動き出した!？」

紫

「魔法の森の魔力が原因ね」

にとり

「ウルトラホーク1号出勤」

スバル

「行くぜ光ー!」

光ー

「ああ!」

次回【EPISODE 5 怪獣総進撃】

EPISODE 5 怪獣総進撃（前書き）

今回河童が暴走しています、これから暴走させるつもりです。

登場怪獣

凶暴怪獣アーストロン

爆弾怪獣ゴーストロン

登場

EPISODE 5 怪獣総進撃

幻想郷に新たなウルトラマン、ティガとダイナが現れ三日が過ぎようとしていたある日。

魔法の森の中、そこで魔理沙とその親友のアリス・マーガトロイド、メガネを掛けた森と人里の間にある香霖堂という雑貨店の店主の森^{もり}近霖之助^{ちかりんのすけ}が何かを見上げていた。

「昨日までこんなデカイ像なんてあったか？」

「無かったわね」

「あつたら気付く」

三人が見ていたものは二つの鉄でできた怪獣の像だった、片方両手が鎌で長く鋭い角が生えた怪獣、もう片方は前者の怪獣に似ているが角と鎌はなくひらひらした背鰭が生えた怪獣の像だった。

「どうする？」

「そうだな………香霖堂の売り物にしたらどうだぜ？」

「却下」の一言で片付けられ。

「とりあえず………カズキに言っとく？」

「だな」

魔理沙とアリスは博麗神社へ向かう事に。

「それにしてもこれ、一体なんなんだ？」

怪獣の像を見て何かただならぬ不安を感じていた、これがもし動き出したらどうなってしまふかと思うが。

「そんなわけないか……誰かが手を加えないかぎり」

そんな事は滅多にないと言い聞かせながら店に戻ったのだった……
……二体の像が微かに手を動かし目で睨んでいるにも気付かずに。

「怪獣の像ねえ……」

博麗神社の縁側、魔理沙とアリスが訪れ四人でお茶を飲みながら怪獣の像の話していた。

「あんなにあそこに置いたままじゃちょっと怖くて仕方ね、もしかしたら動きだすかもしれねーし」

動かないとも言いきれない、カズキは何かアイデアないかこめかみに指を当てて考え込む。

「そっだな……ふむう……」

考え込んでいると。

「なら運べばいいんじゃない？」

後ろから声が、それは霊夢のものだった、そのアイデアを聞いた力ズキは。

「なるほど……運ぶ………」

脳裏にヘリコプターが災害で出動し空高く静止しそこから隊員がふら下がりビルの中の被災者を抱えて救出するという場面が。

それが人ではなく巨大な物体、それを一機だけではなく後二機増やしてワイヤーとかに巻き付け吊り下げるのだが。

「だけどそんな機体、ないんだよね」

クロムチェスター とガッツウイング・ゼロがある、だが小型機なため機体の数を増やさなければならぬ、ウルトラマンに変身するのは人々に余計な混乱を与えるだけ。

「ダメだ、ぶら下げるのはいいと思うけど機体が足りない」

後ろへ大の字で倒れると天井が見える。

「機体？あるぜ（あるわよ）？」

魔理沙とアリスの言葉に大きく反応し食い付いた、それは霊夢も反応。

「多元世界になっちまっただろ？そしたら過去や異世界の解散した

防衛チームの機体が流れ着いて来たんだ、それをペンドラゴンの修理に関わったにとりが立ち会ってその機体を修理したりしているところだぜ」

にとりとは、妖怪で河童の少女、河城にとりの事でこの幻想郷の天才エンジニア。

「妖怪の山の地下に確か格納庫って奴を作ってそこで修理してるみたいだぜ」

「河童の技術は世界一！」

こうしてはいられずカズキは妖怪の山に行く前にパイロットを集める事にした。

「え？パイロットを？」

「お願い、手伝って二人共」

まずは人里に行きジンとジンと同居しているスバルに頼み込んだ。理由ひ話すと快く了承してくれて改めて妖怪の山へ向かう事に。

「よく来たね」

妖怪の山中、そこにある滝の前に河童の少女、河城にとりがいた。

「にとり、どこにあるんだよその流れ着いた機体って」

「まあまあ慌てなさんな」

何かのリモコン出し赤いスイッチ押すと岩肌的一部分がスライドして出入口が現れた。

「ここから入れるよ」

そのままにとりの後を着いて行く三人、ようやく扉が見え近付くとスライド、幻想郷つてこの河童いれば現代社会並みの街になるんじゃないかと思ひながら扉を潜った。

扉の向こう側には広がる鉄の壁が広がりそこに色々な防衛チームの機体が格納され秘密基地状態だった。

「『河童の技術は世界一！』」

三人は叫ばずにはいらなかった、なんでこんな技術あるのにこんな発達してないと思ったが禁句だと思ひ言わなかった。

「ウルトラホーク1号にウルトラホーク3号……！」

ジンはいち早く巨大な銀と青で尾翼に1と描かれたウルトラホーク1号と小型で尾翼に3と描かれ機首が尖ったウルトラホーク3号に気付く。

「全部流れ着いて来たんだよ……後まだあるよ」

次に見せたのは機首が赤く両翼にミサイルが着き尾翼に流星のマークが描かれたジェットビートルに尾翼が二つで両翼に機関砲、銀の装甲に赤いラインが流れるマトアロー1号と同じようなマトアロー2号に両翼と後部にプロペラが着いたマトジャイロもあった。

「全部にとりが直したんだよ……」

「そうだよ、改造もしたし後まだ他にも機体は流れ着いてるからそれも直しておくよ」

にとりはそう言つと格納庫内の設備について説明し始めスバルはスパーGUTSは絶対にとりが外の世界にいたら放っておかないな
と思った。

その頃、紅魔館にいる光一は咲夜に紅茶の淹れ方を習っていた。

「淹れ方上手ね」

「まあ家事には自信あるから」

のんびり過ごしていた、魔法の森に怪獣の像が現れた事は知っていたがあくまでも像のため気にしていなかった。

「咲夜〜お茶〜」

レミリアの声が聞こえてきた、咲夜はすぐにいなくなり紅茶を届けに行った。

「怪獣の像か……………文々。新聞で見たらアーストロンとゴーストロ
ンだったな」

アーストロンとゴーストロンという怪獣は外の世界にも現れた事がある凶暴な怪獣だがなぜそんな怪獣の像が？と光一は思っていた。

「どこの文化のものなんだ」

こういうものは文化に関わる事も多い、誰が何のために作ったかわかれば苦労しない。

「嫌な予感するな……………」

「その予感当たってるかも」

「うわっ！？」

突然後ろに紅魔館の地下にある図書館の管理人で紫の長い髪でパジヤマが目立つパチユリー・ノーレッジが現れた。

「パチユリーさん！？」

「場所が悪いわね、あそこは魔法の森、普通の人間がいたら魔力で気分が悪くなったりする、けどもしあんな変な像とかが置かれていたらどうなると思う？」

少し考え出した結論は。

「幻想郷もアンバランスな空間、だから像が魔力を吸収して……………まさか！」

光一も気が付いた、アンバランスな空間の幻想郷、もし魔力漂いずっとそれに浸っていると普通の人間は体調を崩す魔法の森に正体不明な像が置かれれば超常現象的な事が起こるかもしれないと。

「行きなさい、それが貴方の使命のはずよ」

光一は走りだし紅魔館から出ていった、その後に咲夜が来たがパチユリーが事情を説明してくれたおかげでサボリではないとわかったが外の門番は爆睡していた。

「ジェットビートルとウルトラホーク1号とマットアロー1号が大型機だからそれでワイヤーで釣り上げて」

にとりからの説明を聞きカズキはジェットビートル、ジンがウルトラホーク1号、スバルがマットアロー1号に搭乗。

すると床が動き出しジェットビートルはエレベーターで上がりゲートが開き機体は外に出る。

「ジェットビートル、スクランブル！」

レバーを引き下部の三つの噴射口から火が吹き宙に浮かぶ。

「早苗、お茶」

「はい」

山中にある守矢神社では早苗が二人の神の赤い服と綱が目立つ八坂^{やさ}神奈子^{かなこ}と帽子が目立つ盛矢諏訪子^{もりや すわこ}のお茶を淹れようとしていたところだったが。

「地震!？」

急に強い揺れが起こる、すると何かが動く音が響き三人は外を覗く。

「なんじゃこりゃーっ!？」

神奈子は思わず叫んだ、それは山が割れてスライドしてそこからウルトラホーク1号が出てきたからだ。

「すごい!秘密基地みたい!」

「なんだよこの近未来な秘密基地は!」

「河童あ!?!河童が何かしたのかな!?!」

早苗は大喜びだった、合体ロボとか好きなため秘密基地も守備範囲。

「ウルトラホーク1号、発進!」

ジンがスイッチをオンにするとウルトラホーク1号の後部の五つの噴射口は火を吹き飛び立った。

「飛びましたよ神奈子様!諏訪子様!」

「てかこれ戻るのか?」

「さあ？」

マツトアローは妖怪の山の裏側の崖に設置されたゲートから発進した。

三機はジェットビートルを前に、後ろに右にウルトラホーク1号、左にマツトアロー1号が飛び魔法の森へ。

「二人とも聞こえるか？」

「聞こえてるぜ」

「右に同じく」

通信機が使えるかテストし作戦の説明。

「怪獣の像を一つずつ山の裏側の荒れ地に運ぶ」

「了解！」

「ラジャー！」

それぞれ違う返事を返すと現場に到着、霖之助はその三機を見ていた。

「大丈夫なのだろうか」

ただならぬ不安を感じながら見送った。

三機が像の上空に着くと下部のハッチが開く。

「ワイヤー投下！」

ワイヤーが降り先には何でも引っ付く磁石が付いており先に鎌と角を持った怪獣の像から運ぶ事に。
磁石は上手くくっ付き上昇して像を釣り上げようとしたその時だった。

「な、なんだ!？」

急に機体は激しく揺れバランスが崩れる。

「一体どうしたんだよ!？」

「俺に聞くなよ!」

するととりから通信が入る。

【怪獣の像が動いてるよ!】

「はあっ!？」と同時に間抜けな声を上げ下を見ると次に運ぼうとしていた怪獣の像は動いており運ぼうとしている鎌と角の怪獣を引っ張り色まで金に変わっていた、この怪獣の名は爆弾怪獣ゴーストロン、名前の由来はかつて時限爆弾を抱えていた事であるがこのゴーストロンにはそんな物騒な物はない。

「なんで動いてるんだよ!？像じゃなかったのか!？」

「切り離すぞ!」

ワイヤーを切り離すとゴーストロンは大きな音を立てて倒れると次は鎌と角の怪獣の像が動き出した、色は黒い凶暴怪獣アーストロンだ、この二体は同種族と言われている怪獣である。

この二体の像はとある惑星で作られ溶かした鉄に細工をして像に流

し込む事で動くのだが今回は魔力が原因で動き出したのだ。

「ギャオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!」

アーストロンは体に付いたワイヤーを振り払い二体は人里へ向かい歩き出す。

「マジかよ！攻撃！」

三機は機首からビームを放ち攻撃、だが進行は止まらない。

「遅かったか……………ティガアアアアアーツ!!!!!!!!!!!!!!」

光一はスパークレンスを掲げ起動し光を放ちティガ・マルチタイプから一気にパワータイプに変身し二体の前にジャンプして着地し行く手を阻む。

「ティガ！」

スバルが名前を言うとティガは二体の胸部に手を当て押し出そうとする。

（熱い！コイツらの体、まるで熱した鉄みたいに熱い！）

手の平から煙が立ちジューと焼ける音が聞こえる。

「おいおい本当に動きだしちまったぜ！」

霊夢と魔理沙、アリスが現場にやってきて状況を見る。

「アレがウルトラマンティガ……………異世界だった世界を救った光の巨人」

意味深そうに霊夢は言うがティガは力負けし掛けていたがアーストロンの背中に火花が散る、マットアロー1号の機関砲による実弾攻撃だった、アーストロンの注意はマットアロー1号に向けられる。

「相手は一体だけだ！やっちまえティガ！」

「ん……………ハッ！」

ティガはゴーストロンを押し飛ばすとハンドスラッシュを放ち攻撃。アーストロンは口から高熱のマグマ光線をマットアロー1号に向け放つが避けられる。

「やはりあの二体の像……………」

「香霖」

三人の元に霖之助がやってきた。

「見た時から感じてた、この怪獣達は元々戦うための像だったので
はと」

アーストロンとゴーストロンの凶暴さを見て語る。

「どこの誰がどこで作ったなんてわからない、だがこの怪獣達の像は人々から時と共に忘れ去られここに流れ着いたと思うんだ」

「霖之助さん……………」

「そう、一番大事なものと共に……………」

するとアーストロンはマグマ光線をマットアロー1号の左翼に命中させる。

「うわあああつ!?!」

「スバル!」

カズキは叫ぶがゴーストロンの高熱光線ファイヤーマグマが迫り避ける。

（スバル、変身だ!）

「ああ!ダイナアアアアアーツ!!!!!!!!!!」

スバルはリーフラッシャーを掲げ起動し光を解放しダイナ・フラッシュタイプに変身、機体は丁寧に持って地上に下ろす。

（ウルトラマンダイナ!）

ティガはその名を叫ぶ。

（その声は光一か!）

（スバル!）

ここでティガとなった光一とダイナとなったスバルは再会。

（話は後だ）

（だね）

二人はアーストロンとゴーストロンの方を向く。

「二人の英雄ね」

「そうね」

ティガはスカイタイプにチェンジ、ダイナはミラクルタイプにチェンジしスピードで翻弄する。

アーストロンは鎌を振るうがダイナには当たらず顎を掴まれる、バリヤーを手に纏い掴んでいるため熱さは感じないのだ。

「ショワッ！」

そのまま持ち上げ投げ飛ばす。

「ハッ！」

ハンドスラッシュを連射しゴーストロンを近付けさせなくする。

（光ー！）

（ああ！）

ティガは右腕を斜め上に向けティガ・フリーザーという冷凍光線を放ちとダイナは超能力でそれを吸収し強化させアーストロンとゴーストロンの打ち返すと猛吹雪が二体を襲い凍らせる。

（今だ！）

ティガとダイナは飛び立ち互いの肩に手を片方だけ置いて高速回転を始める。

「すごい風！」

霊夢達は木に掴まり吹き飛ばされないように踏ん張りジェットビートルとウルトラホーク1号は暴風の圏外に出る。

ティガとダイナを中心に竜巻が巻き起こりアーストロンとゴーストロンは竜巻に巻き込まれ宙に浮き回転、すると体が引き契られていく、合体技のストームテンペストを炸裂したのだ。

アーストロンとゴーストロンは体が完全にバラバラになり倒されたのだった。

「まさかお前までここにいたとはな」

「僕の方こそ」

光一とスバルは再会に喜んでいた、だがそこに。

「あなた方……………」

「えーきちゃん？」

映姫がやってきた、理由は…………

「これ、どうするのですか？」

ストームテンペストにより魔法の森の一ヶ所だけ木々も吹き飛びハゲていたのだ、アーストロンとゴーストロンの残骸も散らばり霧雨邸とマーガトロイド邸にも被害が。

「わたしの家がああああ………！」
「私の家もおおおお………！」

自宅の成れの果てを見て啞然としていた、二人は当分博麗神社で泊まる事に。

「判決を下します」

映姫は白黒つける程度の能力で白黒つけようとしていた。

「あなた方は黒！霧雨邸とマーガトロイド邸はあなた方が修理しなさい」

「あゝ………やっぱり………！」

二人は崩れるように座り込みそれから数日間一日中修理に没頭する事になったのだった。

T o b e C o n t i n e d …

EPISODE 5 怪獣総進撃（後書き）

因みに今回出たストームテンペストは初代とジャックと違うところはスカイタイプとミラクルタイプの時でないと使えないというのが、マルチとフラッシュで使うにはまだまだ無理という事です。感想お待ちしております。

次回予告

ゼロ

（ありゃピット星人の宇宙船じゃねーか）

椀

「お待ちを」

ピット星人

「やっぱり父親と同じね！」

早苗

「エレキング……………？」

ゼロ

（倒したはずなのに！）

次回【EPISODE 06 奪われたウルトラゼロアイ】

EPISODE 6 奪われたウルトラゼロアイ（前書き）

登場怪獣

変身怪人ピット星人

宇宙怪獣エレキング

EXエレキング

カプセル怪獣ミクラス

カプセル怪獣ミンティオス

登場

EPISODE 6 奪われたウルトラゼロアイ

「デュワッ！」

ある夜、幻想郷に謎の宇宙人の宇宙船が飛行しておりジンはそれに気付きゼロに変身し追跡を始めるとそれを待っていたかのように宇宙船は光線を放ち攻撃する。

（ありゃピット星人の宇宙船じゃねえか）

ゼロが言うにはその宇宙船は変身怪人ピット星人の宇宙船だと分かりかつて地球を何度か侵略しに来たがウルトラセブン、ウルトラマッックスが阻止した。

（攻撃してくるって事は侵略目的だな、させないぜ！）

緑色の光弾ビームゼロスパイクを放つが当たらず宇宙船から光線が放たれた。

（危ねっ！この野郎！）

額のビームランプから緑色の光線エメリウムスラッシュを発射、宇宙船に命中、大破はしなかったが小さな爆発を連続で起こり煙を上

げ山中に墜落していった。

（チツ、森ん中落ちたか……………これ以上の追跡は無理そうだな）

カラータイマーが赤、黒と点滅を始めたためゼロは引き返したのだ。
った。

人里のモロボシ家宅、スバルも同居人として暮らしている。

「よー寝た」

ジンは起きるがスバルは起きない、映姫に命じられた霧雨邸とマーガトロイド邸の修理が終わり徹夜のためほとんど寝ていなく疲れていたからだ。

「このまま寝かせておくか」

そのままにして洗面、歯磨きを済ましてから自宅を出る。

「やべえ……………まで寝てりゃ良かったか？」

夜中に宇宙船の追跡をしたからか寝不足気味だったが行かないわけにもいかない、大破してないためまだ何かしですか可能性もある、そのため妖怪の山へ向かう。

妖怪の山はにとりが所々偽装している場所があるためほとんど要塞と化していた、河童の技術は世界、いや、宇宙一かもしれぬ。

「そういえば1号の発射口、守矢神社巻き込んでたな」

この前のアーストロン、ゴーストロン戦の事を思い出しながら山中に入ろうとしたら。

「お待ちを」

「あ？」

目の前に犬耳や尻尾を生やした天狗の犬走いぬばしり権もみじがカタツと音を立てて上から降りてきた。

「なんだ権か」

「妖怪の山は人間が足を踏み入れるのは禁止されています」

元々妖怪の山は人間が足を踏み入れるのはあまり好ましくないのだが。

「ですが、あなた方であれば話は別ですが」

権もウルトラマンの正体を知っている者の一人でもある、そのためウルトラマン、それに関わる人物の出入りはよしとしている。

「サンキュー、後見張りご苦労さん、はいこれ差し入れ」

ジンが出したのは何かが包まれた風呂敷。

「おはぎ入ってるから食べてくれ」

「いつもありがとございます」

天才肌なのか一度やった事はよく覚えている、というよりは初めてやる事をほぼ完璧にこなす事ができ料理も早苗から習って作れるようになった。

「夜中の宇宙船ですか？」

山中の道を歩き出す、椋も知っていた、仲間の天狗からの情報である。

「ああ、飛べないと思うけど……………」

そこで追跡を続行しなかった理由も付け加えた、時間が無かったと。

「てか所々偽装してあるよな」

「あはは……………そうですね……………」

地面を見ると鉄の板が見えたりしていた。

「だけど地底に繋がる空洞の出入口の周辺には手を付けてないみたいですがね」

「地底にもなんかあるのか……………」

初めて地底にも土地があると聞き興味を持ち始めるが昔セブンに地底深くに人類が作ったものではない施設がありそこで酷い目あった

とか聞かされていた、レオには車はものすごく危ないものと聞かされていた。

「……………」

「どうかなさいましたか？」

「いや、何も」

少し放心状態だったが呼び掛けられ我に戻る。

「てかにとりもよくこんな短期間で山を要塞にしたな」

「そうですね……………最近じゃ天狗の警備団にも扱い方教えてますから」

怪獣も増えてきたからか流れ着いた機体の修理と量産をしているにとり、天狗にも扱えるようにしていた。

「天狗達も頑張って欲しいな」

「できる限りは」

話していると二人は森の中で怪しい人影を見つけた。

「何かいましたよ!」

「ああ!」

ジンは先に走りだし後を追うように樫も走り人影を追い掛けるが途中で見失う。

「見失いましたね」

「分かれて探すか」

「はい」

それぞれ違う場所を探す事にしジンはその足で森の中深くに、椀は飛んで上から探す事に決まった。

「どこ行きやがった……………」

深い森の中を歩くジン、人影の正体を確かめなるべく進んでいく。

「親父からもらったこれを……………」

ジンは銀色の光線銃ウルトラガンXを持ち辺りを警戒する。

「っー」

足音が聞こえ音を頼りにその足音の主を追い掛ける。

（速い……一体）

追い掛けていると湖の岸に到着。

「ここは……………」

湖の近くには守矢神社が見えていた、守矢神社が幻想入りした時に一緒に湖ごとしていたのだ。

「綺麗だな……………ん？」

右を向くとその先には昨夜追跡し撃墜した外装の一部が焼け焦げ穴が空き中が見えていた宇宙船が不時着しておりそれに入る人影が見えた。

宇宙船に接近し、何も仕掛けがないか石を投げ確かめてから宇宙船に空いた穴から中に侵入した。

「さて……………」

箱の中からカプセルを出し放り投げると小さく爆破し霧が発生。

（ミンティオス、頼むぜ）

カプセル怪獣ミンティオスを解放。

（あいよ！）

ミンティオスは実態がない霧だが姿を隠したり偵察が得意な怪獣のためその特性を活かし宇宙船の中を偵察させ自分も中を歩き操縦室らしき部屋に入った。

「ここだな……………」

操縦室の奥に入っていくと扉は閉まり閉じ込められてしまった。

「しまっ……………」と扉の方に行くが手遅れだった。

「ウフフフフフフ」

不気味な笑い声が聞こえてきた、振り向くと柱の陰から赤い眼と黄色い眼をした宇宙人、変身怪人ピット星人が現れた。

「ピット星人……………」

ウルトラガンXを向けるが少し目眩がしてきてふらつき武器を落と

す。

「ウフフフフフフフフフフ」

（まさか……………催眠ガスを……………）

ジンはそのまま倒れ気絶、ピット星人は左腕に付いていたウルトラゼロプレスレットに手を伸ばすのだった。

「はっ！？ここは？」

そして目を覚ますと見慣れた光景が、守矢神社の一室の天井で上から覗くように早苗と桜が見ていた。

「早苗……………桜……………」

「森の中で倒れていたのを早苗さんが」

「一体何があっただんですか？」

ジンは頭はくらくらしていたが無理に起き上がり頭を掻く。

「確かピット星人の宇宙船に侵入して操縦室に入って……………それ

から……………」

そこで大事なものがないのに気付いた。

「ブレスレットがない……………！」

変身アイテムのウルトラゼロアイを収納したウルトラゼロブレスレットが無くなっていたのだ。

「まさか……………くそっ！」

立ち上がろうとするが二人に止められる。

「まだフラフラじゃないですか！」

「もう少し休んでからに！」

だが置いてあったウルトラガンXを持ち立ち上がろうと。

「頼む！行かせてくれ！」

焦っていた、ブレスレットがなく変身アイテムもない、今の自分に何ができるかと。

「ウルトラマンになれない俺に何ができるんだよ！」

その怒鳴り声に二人は震えた、いつものクールだが熱いジンではなく焦りと恐怖に怯えきった雰囲気だった、もう何かを失いたくないような。

「……………もういいです、言っても聞かないなら行きましょう！」

早苗は折れ行くと決意、椛も行くと同じし三人は神社から出て宇宙船が着陸している湖の岸へ。

岸に到着し宇宙船は森の中に移動していたが確認できた。

「アレですね」

「ああ、行くぞ」

歩き出したその時だった、湖の中心から水柱が上がりそこに黄色い黒い牛の模様に長い尻尾、黒いアンテナのような角を二本生やした宇宙怪獣エレキングが現れた。

「エレキング………！」

だが変身はできない、ならカプセルを出し投げると二本の大きな角を生やしたカプセル怪獣ミクラスを放った。

「頼む、ミクラス」

ミクラスはそのままエレキングに突進し食い止める。

「今の内に」

「私も怪獣の方を！」

早苗は飛んでミクラスに加勢しスペルカード等で攻撃を加える。

「俺達に行くか」

「はい」

ジンと椛は宇宙船の中に潜入していく。

「また来てやったぜ！」

今度も自分が空けた穴から潜入し操縦室の中に。

「性懲りもなく、今度は仲間連れてきたのね」

ピット星人が待ち構えており後ろのデスクにウルトラゼロブレスレットが置かれていた。

「それを返してもらいましょうか」

椀が刀を抜くとピット星人達は一斉に襲い掛かった。

「ハッ！」

二人は避けるとジンはピット星人Aの背中を蹴り飛ばし壁に激突させるとピット星人Bが飛び掛かるが椀が刀を振るい一閃、それを食らえばいくら宇宙人でも一溜まりもなく避ける。

「すまねえ！」

「いえ、来ますよ！」

ピット星人AとBは殴ろうとするがジンは両腕で受け止めジャンプし回り蹴りを繰り返して頭を蹴る。

「くそっ！」

光線銃を構えジンに目がけ引き金を引くが。

「ジンさん！」

椀は心配し声を上げるがそれを余所にジンは光線をジャンプし足や腰を曲げ避けていく。

「うそ!？」

「ギヤアアアアッ!!!!!!!!!!」

それに動揺しているとピット星人Bの断末魔が聞こえ横を向くと椀が刀を振り上げて迫っていた。

「く、来る……………」

だがその願いが届く事はなく振り下げ一閃されピット星人Aも倒された。

「スゲー」

「いえいえ」

椀はウルトラゼロブレスレットを持ちジンに渡す。

「サンキュー」

左腕に再び嵌め、二人は外へ出る、その際にミンティオスを回収、外ではミクラスがエレキングに追い詰められ苦戦していた、そのためミクラスを回収しウルトラゼロアイを出し着眼しウルトラマンゼ

口に変身しそのままウルトラゼロキックでエレキングを蹴り飛ばす。

「ジンさん取り戻したんだ!」

早苗は嬉しそうにゼロを見る。

エレキングはミクラスとの戦いで疲れ切っていたためエメリウムスラッシュを放ち頭を吹き飛ばし倒した。

「デュッ……………」

一件落着かと思ったがその時だった、辺りに紫のオーロラみたいなものが漂う。

「この光は……………」

「わかりません、けど嫌な予感します」

早苗その予感は的中した、湖の中には蛇のような得体の知れないものが泳いでおりゼロの回りを泳ぎ回っていた、そして姿を水中から現す。

「そんな!さっきの怪獣は今ジンさんが!」

(EXエレキングだと!)

それはエレキングだったが違った、蛇のような体をした巨大な怪獣EXエレキングだったのだ、EXエレキングはそのままゼロに巻き付く。

「デュアアアアアッ!!!!?」

そして放電し電流を流しゼロを苦しめていく。

「キキイーツ！」

EXエレキングは苦しむゼロを見て嘲笑うかのように鳴き声を上げる。

「弾幕じゃ当たっちゃう……………どうしたら……………」

だがそんな事で諦めるゼロではない、ゼロは自分の体からエネルギーを放ちEXエレキングを攻撃し巻き付きから解放される。

（へ、てこずらせやがって）

ゼロは突撃してくるEXエレキングにゼロスラッガーを投げ付けバラバラに切り落とすとその肉片は爆破していく。

「瞬殺……………ジンさんすごい」

宇宙船は飛んで逃げようとしたがワイドゼロショットで破壊された。

「よかった……戻ってきて」

ウルトラゼロブレスレットを見てそう呟く、そこで早苗が。

「大事にしているんですね」

「……ああ、これは、俺がもうウルトラマンの名を手羽なさいようにすると誓った証だから」

その意味ありげな言葉に疑問にするがジンはそのまま去っていった。

「一体………」

(すまない………これはここにいるみんなに知られたくないんだ………罪人となり追放された自分を………)

顔に影を作り表情を暗くして歩いていると呼び止められた。

「桜か」

桜が来たため表情を明るくして応対。

「今回はありがとうな、ブレスレット」

「いいですよ、大事なものが戻って何よりです」

軽く会話を済ませると。

「じゃあまたな椀」

ジンは犬耳が生えた頭を撫でてから妖怪の山を後にした。
撫でられた頭を手で触りポカーンと道で立っていた椀を文が見つけたのだった。

T o b e C o n t i n e d . . .

EPISODE 06 奪われたウルトラゼロアイ（後書き）

ジンさん主人公差し置いてフラグ乱立（笑

次回予告

「スフィアだと!？」

ムサシ

「彗星怪獣ドラコ……!」

スバル

「ガッツウイングは俺の魂だからな」

????

「君の体を貸して欲しい」

カオスリドリアス

「くえええええっ!」

ムサシ

「僕は………よし! コスモオオオオオオオス!!!!!!!!!!!!!!」
「!」

次回【EPISODE 07 光との遭遇】

EPISODE 07 光との遭遇（前書き）

今回はゼロが3月にお世話になるウルトラマンが登場！

登場怪獣

彗星怪獣パワードドラコ

宇宙球体スフィア

カオスヘッダー

友好鳥獣リドリアス

カオスリドリアス

超合成獣ネオカオスパワードドラコ

カオススフィア

登場

EPISODE 7 光との遭遇

外の世界、スバルが所属していた宇宙ステーション・イカロス3ではやはりスバルが行方不明になり慌ただしかった。

「まだスノーホワイトの反応掴めないか？」

「はい……………」

司令官に話し掛けられムサシは浮かない顔で答える。

「心配するな、アイツはああ見えて運が強い奴だ、どこかで生きてるはずさ」

司令官はそう言うが心配はしている、ムサシを落ち着かせようとするための言葉なのだ、それを言い離れムサシは画面とにらめっこする。

（スバル……………）

だがそこに違う反応が数個、これはスノーホワイト・ゼロの反応ではないと完全にわかっていた。

小惑星に偽装した監視カメラの映像を回すと映っていたのは白くて丸い物体の宇宙球体スフィアが映っていた。

「スフィアだと!？」

全滅したと思われていたスフィアが現れムサシは慌てて警報を鳴らし戦闘体勢に。

「非戦闘隊員はシェルターへ避難を」

ムサシはオペレーターとしての役割を果たすため職員の避難誘導を開始と同時に小惑星に偽装した防衛システムを起動させスフィアに攻撃を開始するが逆襲を受け数を減らされて行くが。

【ガッツウイング小隊発進します】

「ラジャー、お氣をつけて!」

黄色いガッツウイング1号の小隊が発進しスフィアの迎撃に出た。

「シルバーシャークを機動します」

何個かの小惑星からシルバーシャークという兵器を機動させスフィアを確実に赤いレーザーを発射し打ち落としていく、ガッツウイング小隊も戦果を上げていた。

【怪獣だ!】

ガッツウイング小隊からの報告で怪獣が接近していると報告が、監視カメラの映像を見ると映っていたのは。

「コイツは彗星怪獣ドラコ!」

赤く硬そうな皮膚に身を包み二対の羽根に手は服の裾みたく大きく中に鎌を隠し持ち赤い眼の彗星怪獣ドラコだがこのドラコは欧米に現れた個体でパワードドラコと言われているのが、

胸には過去の個体にはない発光体が付いており頭部には紫色の突起物が生え更に凶暴さが増しており、手の鎌は更に鋭く長く伸びていた。

シルバーシャークによる攻撃が放たれたが亜空間バリヤーで防がれてしまった。

「まさか……………スフィア合成獣……………」

パワードドラコはスフィアに取り付かれ、更に別の生命体と合体した超合成獣ネオカオスパワードドラコと変化していたのだ、それからまたもやスフィアが現れガッツウイング1号を撃墜していつてしまふ。

【うわあああーっ！！！？】

パイロット達の悲鳴が何回も響きムサシの顔は苦痛の表情になっていく。

「ギシャアアアッ！」

ネオカオスパワードドラコは遠吠えを上げると他のスフィアに取り付かれていないパワードドラコの群れを呼び寄せ小惑星に偽装した兵器を破壊していく。

そして宇宙ステーションに接近するネオカオスパワードドラコ。そこに高速で接近する青い光が現れたがムサシは気付く暇はなく、ネオカオスパワードドラコは口から光線を発射、スフィアに取り付かれて得た能力である。

宇宙ステーションにネオカオスパワードドラコ、スフィアの攻撃は直撃していく。

「うわああああああーっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ムサシがいた部屋にも炎は回るのだが青い光がその部屋に入りムサシを守るように包み込んでいく、そして宇宙ステーションは破壊されスフィアの目的は果たしたのだった、そして次の目的地は地球、だが日本でも欧米でもない場所であった。

幻想郷では……

「にとりゝ、それそっちなゝ」

「わかったゝ」

妖怪の山の秘密基地、ベースマウンテン（仮 名前募集中）ではスバルがガッツウイング・ゼロと切り離れたブースターを運んで格納庫で光一にとりと修理していた。

「光一もわりいな、付き合わせちまって」

「いって、僕もガッツウイング好きだし、それに……………」

視線の先にはパチュリーがいた。

「パチュリーさんが興味あるって言ってたからちょうどいいかなって」

なるほどと呟きガッツウイング・ゼロの整備を進めていく。

ある草原、風が吹き葉は揺れその葉が鼻に擦るように当たり目を覚ますものがいた。

「ここは……………空？」

そのものは宇宙にいたはずのムサシだった、ムサシは起き上がり回りを見渡すが何もなかった。

「なんで丘にいるんだろ……………宇宙にいたはずなのに……………宇宙でスフィアに襲撃されて青い光に……………ん？」

気付くと手に青い宝石輝石が握られていた。

「なんだろうこの石……………だけど温かいな……………」

取り敢えず輝石をポケットに仕舞い立ち上がりもう一度辺りを見渡す。

「どここの田舎だ？」

ビルも見えなく遠くには人里が見えていた、まずはそこに行こうと歩き出そうとしていたら。

「クエエエエエッ！」

真上を巨大な羽根を広げた水色の皮膚をし腹部が肌色っぽく嘴を生やし頭部に赤い鶏冠が生えた怪獣が通過した。

「リドリアスだ！」

その怪獣の名は友好鳥獣リドリアス、外の世界でも確認されている怪獣だった。

「けどなんでスーパーGUTSは出動していないんだ？」

怪獣が出ればスーパーGUTSは出動し危害を加える事がないなら市街地から遠ざけるのだが。

「だけどこれからどうするか考えよ……………」

歩き出す、里に向かって。

（まずはここがどこか突き止めないと）

幻想郷を知らない彼に取ってはどこのかわからない、まずはどんなのかを調べようと人が集まる場所へ。

（それにしてもこんな場所地球にあったか？もしくは未開拓の惑星？）

そう思いつつ歩きようやく里の前の魔法の森の中に入る、何も知らないため普通に入るがムサシには何も影響はなかった、何かに守られるように。

「ここまで深い森の中、すごいな……………」

そう呟いているとその先の草の中に何か隠れていた。

（まさか人間がここに来るなんて……………チャンス）

そこに隠れていたのは古そうな傘を持ったオッドアイの右が青つぱく左は赤つぱいからかさお化けの少女の多々良小傘^{たたらこがさ}がムサシを驚かそうとしていた、ここに誰か通るまで待っていたようだ。

（そろそろ来る……………）

驚くと期待に胸を膨らませ足音が近付き自分の前に来た瞬間。

「驚け〜！」

飛び出して叫ぶとムサシは横を向き呆然と立っていた。

「驚け〜！」

大事な事のため二回言った、だが驚かない。

「……………」

しばらく沈黙が続き小傘の目からジワッと熱いものが零れた。

「あー！ごめん！驚いた！驚いた！」

これは良心が痛む、なんとか宥めようと声を上げる。

「本当？」

「本当、だからここがどこか教えて？」

「外人人なの？」

まずはそこからの説明が始まりムサシは幻想郷の事を知り小傘と一緒に歩く。

「そんな場所だなんて……………」

「そう、わたしはからかさお化けの多々良小傘」

「お化け……………僕は春風ムサシ、よろしく小傘」

「うん、よろしく」

二人は歩いていると里に入り、小傘がお世話になっているという寺に行く事に。

「一二、一二」

命蓮寺みよつれんじという寺の前に到着し入ってみると黒っぽい服で金髪っぽい髪の毛の女性や虎柄の髪の毛の少女に船乗りが着るセーラー服の少女に頭巾を被った女性、ネズミっぽい耳と尻尾を生やした少女と何か正体がわからなそうな少女がいた。

「小傘、そちらの方は？」

黒っぽい服の女性に聞かれて魔法の森で歩いていたのを連れてきたと告げると。

「そうでしたか、私は聖白蓮ひょうびくわんと申します」

丁寧ていねいに自己紹介すると続いてネズミっぽいのはナズーリン、頭巾くもい いちりんのは雲居一輪、セーラー服むすねのは村紗水蜜、虎柄とらぐらのは寅丸星、正体しょうたいがわからなそうなのは封獣ぬえ。

「そんな事が……それは大変でしたね」

宇宙ステーションで何かあったか教えるムサシ、最初は宇宙ステーションが何かを説明していた。

「はい……ですがなぜか幻想郷に」

「ですがなぜそのスフィアという物はあなた方を……」

「過去の記録だと人間が宇宙に進出するのをよく思わない生命体みたいですよ」

生命体と聞き智能もかなり高いと判断。

「それなら話し合えばわかるはずなのに……」

「………そうですね………ですが奴等は話し合うどころかすべての生命体を取り込んで一つになろうとしていたんです」

すべての生命体が一つになる、だがそれはすべての生きるものが同じ考えしか持たなくなること、それではつまらなく夢もロマンもない世界になってしまう、スフィアの行動理念も付け加える。

「同じ考え……それは確かに阻止するべきですね」

白蓮は妖怪や神、仏、人間は平等であるべき、そう考え行動している、だがスフィアがやるのはそれに近くそれに遠い事、いくら平等であるべきでもそれでは意味がない、

一つになって平等になっても同じ行動しかやらないのならつまらない世界になってしまふ、ましてやスフィアがその上に立ってしまうため平等とは言えない。

「外の世界ではそんな危機が……話し合いはどうだったのでしょうか？」

「スフィアの一方通行でしたよ、いったい人が犠牲になりました」

話は重くなってきた、切り替えようと別の話題を。

「そういえば外の世界にも怪獣がいるんですね」

「はい、中には可愛くて人間に友好なものも」

「そうですね、こちらにも現れるんですよ」

先ほど見たリドリアスの事を教え何回か保護された事があると説明。

「怪獣を保護……それは素晴らしいですね、怪獣もウルトラマンも平等だと私は考えていますから」

「ここにもウルトラマンが……名前わかります？」

白蓮はこの幻想郷にいるウルトラマンの名前を上げていく。

「ゼロとブリザードは知りませんがティガは闇、ダイナはスフィアを倒した英雄でネクサスとメビウスは昔地球を救ったウルトラマンです」

だがムサシはゼロは知らないがその変身者は知っているがここでまだ言う必要はないだろう。

それからムサシは博麗神社に行けば外の世界に帰れると知り向かうとしていた。

「ありがとうございます」

もう会うことはないだろうなと思い挨拶していた。

「あなたと会えてよかったです、ムサシさん」

「こちらこそ、もう会うことはないと思いますがみんなの事は忘れません」

小傘が案内してくれると言う事で歩き出そうとしたらポケットの中が青く強く輝いた。

（聞こえるか？）

（誰？）

ムサシは輝石を手に取り回りを見渡すが誰も話し掛けていなかった、
それどころか回りの景色、人が止まっていた。

（君がその手に持つ輝石が私だ）

（そうなの？君は……）

（私は君達から言うウルトラマンだ）

輝石から頭に響く声はウルトラマンのものとわかり驚くムサシ。

（ウルトラマン！？まさか僕が幻想郷にいるのは？）

（そうだ、済まない、あの時助けられそうだったのが君だけだった、
仲間を助けられなくて済まなかった）

（いいよ、君も来るのが大変だったんだ、けどなんでスフィアは
……）

（スフィアには生き残りがいた、それが集まると同時にある生命体
も現れた）

（生命体？）

（パワードドラコに取り付いていたものだ、あれにはドラコだけで
はなくカオスヘッダーというウイルスも取り付いていたんだ）

初めて聞く名に首を傾げた。

（カオスヘッダーとスフィアはもうこの地球に侵入している、いや、
この幻想郷にも侵入していると言った方が的確だ）

（なんだって？なぜカオスヘッダーとスフィアはこの幻想郷に？）

（幻想郷は外からでは回りは見えない、まず始めにここを制圧しよ
うと目論んでいるらしい）

するとこの幻想郷は更なる危険に見舞われる事になる。

（カオスヘッダーは取り付いた怪獣を凶暴化させる、どんなにおとなしい怪獣でも）

（そしたら小傘やみんなが危険な目に！）

（私はカオスヘッダーから地球上の生物を救うためにやってきたのだ、だが地球上で活動するには時間に限りがある、エネルギーを抑え活動するには誰かと同化しないといけない）

（それなら僕の体を使って、一度終わったと思った人生、それに白蓮さん達の話だといつでも戻れるみたいだから近いうちに外に帰ればいい、だから僕はこの幻想郷を守るために戦う）

ムサシその決意にウルトラマンは共感した。

（ありがとう）

（僕は春風ムサシ）

（私は……………コスモスだ）

（コスモス……………優しい名前だね）

コスモスは再び礼を言いなぜ今話し掛けたか聞くとカオスヘッダーに取り付かれた怪獣が近付いているという事、いきなりだがいつも人生はいきなりのためムサシは覚悟を決めると回りは動き出す。

「ムサシ？」

「ごめん小傘、まだ僕この幻想郷に残るよ」

なぜと聞こうとしたが荒々しい鳴き声が聞こえ魔法の森の方を向くとその上空には頭が紫の突起物に包まれ眼は凶悪なのを表すような赤、嘴と爪も長く鋭くなったカオスヘッダーがリドリアスに取り付いたカオスリドリアスが飛来してきた。

「リドリ阿斯？」

「か、怪獣！」

小傘は自分が驚かす方なのに自分が驚きムサシの後ろに隠れた。
するとガッツウイング・ゼロが飛んできた。

「あの機体……スバルのだ！」

そうスバルのテスト機体だった、ガッツウイング・ゼロはカオスリ
ドリ阿斯の前を通る。

「まさか修理仕立てのコイツをもう使うなんてな」

パイロットはもちろんスバル、カオスリドリ阿斯はガッツウイング・
ゼロに注意が行き進路を変え里から遠ざかっていく。

「ってムサシ!？」

ムサシはガッツウイング・ゼロとカオスリドリ阿斯が進む方向に向
かい走りだす。

「クエエエエーッ！」

カオスリドリ阿斯は口から青白い光線を放ちガッツウイング・ゼロ
を攻撃、だが宙返りをし避けられ後ろに回られ緑に光るニードルレ
ーザーで攻撃するがカオスリドリ阿斯もそれを避け地上に降り立つ
と上を向きガッツウイング・ゼロを攻撃。

「そう簡単には落とされないぜ！」

それも避けつつレーザーで足下を撃ち威嚇、それに怒るカオスリドリアスは光線を発射、だが命中せず。

すると、紫の突起物が生えたカオスヘッダーに取り付かれたカオススフィアの大軍が飛来した。

「スフィアかよ〜！」

カオススフィアは光線を放ちガッツウイング・ゼロの邪魔をする。

「そく！」

それをムサシは見る。

「このままじゃ……」

輝石を見つめると石は太陽の光で輝く。

「僕が戦えて怪獣を救う力があるならその力を貸して欲しい」

そう念じると輝石は輝きを増し手に包むようにすると真ん中に浮かび「ウルトラマンコスモス」と呟き続けもっと強く光り、そして。

「ウルトラマン……！」

輝石は右手の人差し指に付くようになるとその人差し指と親指を立て天に向け。

「ウルトラマン……コスモオオオオオオオオオス!!!!!!」

輝石から更に強い光が解放されムサシを包んでいき巨大化、光が消えると青と銀の光の巨人が立っていた。

「ウルトラマンだって!？」

その名は、ウルトラマンコスモス・ルナモード!

コスモスはカオスリドリアスに立ち向かって行きもつと里から遠ざけるため押し出していく。

「セアッ!」

押し出すとカオスリドリアスはコスモスを敵と認識し光線を放つがムーンライトバリアという光の壁で防がれそれに怒り爪で引き裂こうと襲い掛かるがコスモスは腕でそれを受け止め回転し距離を取り右手を伸ばし左手を軽く曲げ構え声を出す。

「セアッ!」

「クエエエエエエーッ!」

カオスリドリアスは声を上げ更に怒るがコスモスは眼から光を放つ、ルナスルーアイでカオスリドリアスの体内のどこにカオスヘッダーが潜んでいると見通すと手から光の粒子の塊、ルナエキストラクトを首に放つとカオスヘッダーは分離し元のリドリアスに戻る。

リドリアスは頭を下げお辞儀するとその場から飛び去る。

それを見送ろうとしたがカオススフィアはその暇を与えてくれず攻撃を仕掛けた。

「う……………!」

だがそれを耐え抜くと腕を十字に組み青い光線、ルナ・スペシウム

光線を発射する、カオススフィアを打ち落としていき負けると悟った残りのカオススフィアは撤退した。

「スゲー……………怪獣をおとなしくしたと思ったたらあのトゲトゲスフィア達を片付けちまうなんて」

コスモスはその場から消え立っていた足下にはムサシが。

「本当に僕はウルトラマンになったのか……………」

空を見上げ呟くと小傘と白蓮達が出てきたのだった。

それからムサシは命蓮寺に泊まる事に、この幻想郷をカオスヘッダーやスフィアから守るために。

T o b e C o n t i n e d …

EPISODE 07 光との遭遇（後書き）

ネオカオスパワードドラコの登場は日食の日を迎えた時にでも。
メビウートの出番は一応ありますが……………数人で倒すかと。

次回予告

光一

「外の世界に一度戻ろう」

カズキ

「外の世界か……………」

紫

「あなた、みんなを連れていつてあげたら？」

早苗

「孤門さん達が守り抜いた世界、見なくていいの？」

霊夢

「行つてきなさいよ、私も……………着いていくから……………」

カズキ

「俺、スーパージューツに入る！」

次回【EPISODE 08 新たな世界へ……】

感想お待ちしています。

EPISODE 8 新たな世界へ……（前書き）

今回はカズキがやっと外の世界に、そしてアイツの孫も現れます。

登場怪獣

巨大異星人ゴドレイ星人

登場

EPISODE 8 新たな世界へ……

「ムサシまでこっちに飛ばされるなんてな」

「僕の方こそ、光一とスバルが幻想郷にいたなんて」

光一、スバル、ムサシの三人は博麗神社におり再会を喜んでいた。

「だからなんでここに来るのよ」

しかも居間でお茶を飲みながら寛いでいた。

「まあいいじゃん、ここ妖怪の溜まり場なんだ……… あんふあんす
!？」

「殴るわよ？」

言う前に殴ってはその言葉は意味ない、それを突っ込むと陰陽玉が
落下してきそうなため言わなかった。

霊夢もこういうのは嫌いではないためお茶とお菓子を用意して出し
ていた。

「そついえばさ霊夢ちゃん」

「何よ？言っておくけど私はこのバカと付き合ってるからダメよ」

スバルに話し掛けられたため口説かれるかと思ったが違うらしい。

「違う違う、外の世界にいつでも行けるんだよね？」

「……………そうよ」

カズキがいる所でその話はしたくなかった、だが三人は事情を知らない、だから余計な事を言わないでおき。

「カズキ、買い物行ってきてくれない？」

「あ……………うん」

外の世界の話題が出て軽く放心状態だったが呼び掛けられ我に返りメモ帳に買うものを書いてからカズキは出掛けた。

「で、いつ戻る？」

「明日ぐらいには、親に当分戻らないとか荷物纏めたらまたこっちに来るよ」

「……………そう」

スバルはあまり感付いていなかったが光一は違った。

「なあ霊夢、なんでカズキはさっき上の空だったんだ？」

「気付いてたのねアンタは」

「そうだったか？」

「言われてみれば確かに……………」

ムサシも薄々気付いていたようだった。

「……………アンタ達には教えておくわ、半年前の出来事とこの幻想郷で起きた最大の異変を」

博麗神社から出たカズキは里へは向かわずある場所へ向かっており
そのある場所に到着した、幻想郷の奥地にある妖怪の山とは反対側
にある太陽の畑に。

「……………」

太陽の畑は向日葵がたくさん綺麗に咲いている場所でカズキに取っ
ては姉のように慕っている妖怪の活動拠点でもあるのだ。

「あら、カズキ」

太陽の畑を一望できる丘に座っていると話し掛ける女性が。

「幽香……………」

日傘を差したその彼女の名は風見幽香^{かざみ ゆうか}、花を操る程度の能力を持ち
カズキの母の紫と同等ぐらいかもしれない実力を持つ妖怪だ。

「何かあったの？」

何かある度にこの太陽の畑に来ては向日葵をボーッと眺めている、
彼女もカズキの行動パターンはお見通しだった。

「…………… ちょっとね」

「外の世界の事？」

何でもお見通しだった、ほとんどは外の世界の事で思い詰めてここに来るからだ。

カズキは正直に頷くと幽香はその隣に座り日傘を閉じる。

「ここは一年中咲いてるよな………変わらずに」

「変わらずに」、その言葉はカズキに取っては重い言葉だった、幻想郷も、自分も、ほとんど変わっていないのに外の世界は百年ぐらい経ってほとんど変わっている、そう思っていたからだ。

「そうね」

「俺は変わったのかな？ 外の世界が変わったと同時に」

「そんなの関係なしに変わっているわよ、あなたは」

言葉のキャッチボールは静かに続く、聞こえるのは風が吹く音と草が揺れる音だけだった。

「……………カズキ、あなたあの時泣いた？」

「……………泣いてないと思う、それを通り越すくらい哀しかったって事かな？」

「……………しれないわね」

今日感じた風より強い風が吹くと。

「カズキ、あなたは一度ここから出た方がいいわよ、外の世界の風を感じた方がいいわよ」

「……………だけど」

「だけでもないわよ、昔、もうその人間はいないと思うけどこんな事言った男がいたは」

懐かしそうに、優しく実の姉のようにカズキに語り掛ける幽香はその男が言った言葉を口に出した。

「例え怖かったり辛かったりする時こそ、逃げるな、闘え」

「逃げるな、闘え……」

「ええ、あなたならずっとそれをやってきたはずよ」

幽香から見たカズキは怪獣達の果敢に立ち向かっていく強い青年だった、それを言うと本人は否定する、それには肯定した。

「あなたは外の世界から逃げようとしているのよ、変わった世界から、世界や人は変わるものでしょ？」

首を傾げ問うとカズキはそれを肯定。

「幽香、泣いていい？」

「もちろん、私はあなたの姉代わりなのよ」

幽香本人も弟のように思っていた、カズキは泣き出すと抱き寄せ頭を撫で背中を優しく撫でるのだった、数分すると心地よかったのかそのまま寝に入ってしまった。

「寝ちゃったわね……………」

「可愛い寝顔ね」

そこに紫がスキマから出てきて顔を覗かせる。

「まったく、本当にこの子あなたの息子？ 胡散臭くないし、てかそれ以上に純粋で正直者よあなたの子は」

「そりゃ私とゾフィーの息子なんだから」

ウインクし自慢気に言うつと幽香は寝ているカズキをおんぶし落ちたメモ帳を拾い買い物に行く所だったのかと思うと紫は藍に買いに行かせると言いメモ帳を預けその場から歩き出した。

「という事よ、この幻想郷で起きた最大の異変と戦いは」

ダークザギとの激しい激闘とサロメ星人が起こした計画を語ると三人は驚愕しある事がわかった、カズキには外の世界には帰る場所はない。

「カズキ……………居場所ここしかないのか……………」

「ええ、本当は行きたい、けど怖いよ、変わり果てた自分の古巣に行くのが」

縁側から空を見上げていると声が聞こえてきた。

「霊夢さん」

早苗が庭に着地した、買い物物の帰りだろう。

「うひょ！かわい……………あーうおん！」

スバルは最後まで言えずムサシにも殴られた、スバルには容赦ない二人。

「まったく」

「どうかしたの？」

「買い物帰りに少しお兄ちゃんに挨拶に……お兄ちゃんは？」

同じように買い物に出掛けているから会っているかと思っていたが会っていないらしくどこ歩いているのと思っていると。

「おじやまするわよ」

「あ、幽香……カズキ？」

そこにカズキをおんぶした幽香がやってきた、買い物は藍がすると伝えておく。

「またかわ……あすともんす！」

また殴られた、学習能力ないな。

「賑やかな、いつも通り」

「まあね、悪いわね」

「いいわよ別に」

カズキを縁側に寝かせると男達は男達で話させておき寶錢箱の前に。

「ああ見えて弱いんだから私の弟分は」

「そうね……強がって表に出さないんだから」

太陽の畑で会話した内容を二人に話し幽香は。

「ねえ、もしカズキが外の世界に行く決意したら、私が着いていつ

ていいかしら？どうせ暇だし」

「……………頼んでいい？最近また結界が不安定だから動きにくくなりそうなのよ」

「もちろん、あなたはもうカズキの事は諦めているんでしょ？」

早苗に話を振るうと頷き返し今はジンが好きと伝える。

「彼は意外にもてるから気を付けた方がいいわよ？」

「ですよ……………そうだ幽香さん、もしかしたらお兄ちゃん、写真持ってると思うんでそれに写った風景と観覧車がある場所に行けるなら」

「わかったわ、妹分の頼みも聞いてあげるわ」

「私は妹分なんですわね」

弟分の妹分は自分の妹分と同じと言いお前のものは俺のものと言わんばかりのジャイアニズムだった。

「霊夢、弟をよろしくね」

「それはこっちの台詞よ、外に行く時はよろしくね」

それから、光一達三人は外の世界に行き親族に会ってからまた幻想郷に戻り、そして数日後、今度はカズキは外の世界に行く事になり付き添いで幽香が着いていく事になり八雲邸の庭に来ていた。

「この前は買い物代わりにやってくれてありがとう藍」

「いえいえ、お役に立ててよかったです」

「だからってなんで抱き締めるの？」

なぜか藍に抱き締め頭を撫でられていたがまあそれはそれで気持ちがいいから気にしない事に。

「ところで紫、あなた今の外の世界の地理を理解した？」

「大丈夫よ、昔の地図と今の地図仕入れて照らし合わせたから把握したし宇宙にも行けるわよ、けど今日は私のスキマじゃないし」

そう、今回はカズキがどこまで境を操る程度の能力が使いこなせるかを見るためのテストでもあるため紫は力を使わないのだ。

「じゃあ……………」

カズキは精神を集中させ思うがまま、目の前にスキマができた。

「できた……………」

「よし、それじゃ行ってきたさい、幽香、後はよろしくね」

「わかったわ」

二人はスキマを通り外の世界へ向かった。

「大丈夫でしょうかカズキ様」

「大丈夫よ、あの子は私達が思うほど子供じゃないわよ、まあまだ

まだ子供だけど」

そして外の世界、メトロポリスと呼ばれる日本の都市の郊外の森の中にスキマが開きそこからカズキと幽香が出てきた。

「到着」

静かに呟いた、いつもなら元気がいいはずだがやはり変わってしまった故郷に来るのは胸が痛いのだろう。

「行きましょう」

頷くと二人は歩き出し都心を目指す、歩いている途中無料で配布されている新聞等を取りそれで今は2123年と知る、カズキがいた時代は2021年、本当に100年は過ぎていた。

「本当に100年過ぎた世界なんだ……………」

「妖怪で100年なんてあつという間よ、あなただってそうなるかもしれないわよ？」

カズキも妖怪とウルトラマンの間に生まれたもの、妖怪以上に生きるかもしれない。

「もしかしたら妖怪って気付かないでこの時代に来ていたかもしれないわよ？」

「そう……………」

自分が妖怪だと知っていれば少しは楽だろうが知らなかったらどれだけ辛いのだろうと思いつつ今、この時代の事をもっと知ろうと電気屋のテレビを見て地球を侵略するため飛来した凶悪な宇宙人をスーパーGUTSが撃退したというニュースが流れていた。

「これがスーパーGUTS……………」

画面に映る機体を見て赤いラインの機体はクロムチェスターに、青いラインはチェスター、黄色いラインの機体は機首に巨大な砲門があるものが空を飛んでフォーメーションを組み宇宙人を攻撃する映像だった。

「前はウルトラマンダイナも居たのにな」

そこに電気屋の店主が店内から出てきた。

「え？」

前にダイナが居た、だがそのダイナは今は幻想郷にいる、どういう意味か詳しく聞いてみると六年ぐらい前にウルトラマンダイナが現れスーパーGUTSと共に戦い、宇宙での戦いにダイナはワームホールに呑み込まれ行方不明となっただけらしい。

ウルトラマンメビウスであるヒビノ・ミライやジンからダイナとは

共に戦った事がある仲と聞きM78星雲の世界に迷い込んだと分かった。

「そうだ、聞いていいですか？」

カズキは店主にある事を聞いた、それは憐がいた遊園地の事だった。

「ああ、その遊園地なら知ってるよ」

その遊園地はまだあるらしくアトラクション等は作り直され新しくなっているが自然等はそのままらしい、二人はその遊園地に行く事に。

「まだあつたんだ……………」

少しホッとしていた、まだ変わっていない場所がある事に。

そしてその遊園地に到着し園内に入る、アトラクションや建物は変わっていたが配置や道は変わっておらず人々で賑わっていた。

「人が多いわね」

「うん、ここ元々デートスポットに人気だから」

「悪いわね、霊夢じゃなくて」

軽く冗談言っていると目の前で女の子が泣いていた、迷子だろう、放っておくわけにはいかないため駆け寄ろうとしたら一人の青年が

颯爽と現れた、その青年の顔を見てカズキは驚いた。

「憐？」

「えっ……………」

青年は自分の事だろうと思い反応しカズキを見る。

女の子を迷子センターに送り届けるとレストランで話す事に。

「えっ！まさかあなたが千矢カズキさん！？」

青年はカズキを知っていた、一番驚いたのは100年前ぐらいに行方不明になった人間がこうして当時のまま戻ってきた事に、そこは深く聞かない事にした。

「俺の名前は千樹憐^{せんじゅりん}、千樹憐^{せんじゅれん}は俺のじいちゃんです」

千樹憐、彼は三番目のデUNAミストだった男でジュネッスブルーは彼がネクサスとなった時に使っていた姿だった。

「じいちゃんは俺が産まれる前に死んじゃったんですが父さんによく話していたみたいです、カズキさんはすごい奴だったと」

自分はそんな男じゃない、と戒めてた。

「そんなんじゃない……………」

「あなたはまず自信を持つところから始めなさい」

隣で紅茶を飲む幽香に言われ俯きながらコーラをストローで吸い、飲む。

「もつと元気がある人だったとか聞いていたんですが………まあいいや」

それから話を済ませ燐に別れを告げて遊園地を後にした。

「……………」

「どうかしたかしら？」

カズキは空を見ながら歩いており不注意だった。

「この時代があるのは孤門副隊長やナイトレイダーが守り抜いたからなんだよな」

孤門一輝^{こもん かずき}、五番目のデユナミスト、ウルトラマンノアにも変身を遂げたカズキの前のデユナミスト。

カズキがいた時代ではナイトレイダーAユニットの副隊長を務めていた。

彼やその仲間達が戦っていたため今の時代がある、そう思い始めていた。

「なあ幽香、幻想郷もこの今の世界も守るなんて……………」
「できるわよ、あなたなら」

孤門が守った世界、自分が守った幻想郷、この両方を守る、そう決意しようとしていたその時だった。

市街地に巨大な宇宙人が現れた、巨大なハサミの刃のような手に胸の四つの発光体、顔は三つ縦に並んだ発光体が順番に点滅する巨大異星人ゴドレイ星人が破壊活動を始めた。

「宇宙人！」

宇宙人が現れた事により人々は混乱し逃げ惑う、ゴドレイ星人は胸の発光体から紫色の光線を放ち街を焼き尽くしていく。

そこにスーパーGUTSの主力戦闘機、ガッツイーグルが到着、赤、青、黄色のレーザーを発射し攻撃するがゴドレイ星人は手でレーザーを跳ね返す。

「今度こそ逃がすな！」

ガッツイーグルにはスーパーGUTS隊長のコウダ・トシユキとカリヤ・コウヘイ、女性の副隊長ユミムラ・リョウに科学担当のナカジマ・ツトム、この中では新人であるフドウ・ケンジが搭乗していた。

ゴドレイ星人は前にある街を焼け野原にしてしまった事がありスーパーGUTSは今度こそ倒さなければと意気込む。

「分離して攻撃を仕掛ける！」

「ラジャー！」と全員返事をする。ガッツイーグルは分離、フドウが乗る赤いラインの小型機体 号、コウダとカリヤにナカジマが乗る横に長い青いラインの機体 号、リョウが乗る黄色いラインの機首の砲門が大きい機体 号に分離し攻撃を開始する。

「アレがスーパーGUTS」

カズキはまずスーパーGUTSの戦いを見ていた、ナイトレイダーを継ぐ防衛チームの実力はいかなるものかを。

「ゴドレイ星人の弱点は胸の発光体だ」

ゴドレイ星人は巨大な手で攻撃を防ぐ、だがそこはいつも胸だ、スーパーGUTSはそこが弱点と判断、なんとか手を使わず攻撃するにはどうするかを考える、

今はウルトラマンダイナもない、どうすればと思っているとゴドレイ星人は光線を発射、号を霞める。

「うわぁっ!？」

「フドウ隊員！」

機体は大きく揺れ操縦不能に陥り墜落を始める。

「っ!」

カズキはエボルトラスターを取り出し。

「孤門副隊長が守ったこの世界も、俺は、守る！」

鞘からエボルトラスターを抜き振り上げると光に包まれその場から飛び去る。

「頑張るなさい」

幽香は光を見送りゴドレイ星人は号に光線を放とうとしていたが赤い光球が現れゴドレイ星人を跳ね飛ばすと号の前に止まり巨人の姿となり機体を掴む。

「アレは……」

「まさか……」

「光の……巨人？」

コウダ、カリヤ、リヨウの順で喋る、 号を助けたのはウルトラマンネクサス・アンフランスだった。

「ウルトラ……マン……」

システムは回復し 号は飛び立つとネクサスは立ち上がりゴドレイ星人の方を向く。

「シエアッ！」

構えると走りだし立ち上がったゴドレイ星人にパンチ、キックを食らわしていくがすべて手で跳ね返されていく。

（硬い、コイツのハサミみたいな手は恐ろしく硬い！）

後ろに下がろうとするが振り向くとそこには遊園地が、まだ園内には人が残っており燐や職員が避難誘導を行っていた。

（このままじゃ……）

なんとか遊園地から離そうと突進してくるゴドレイ星人と押し合いとなるがゴドレイ星人の方が力は強く押されていた。

（くっ………！）

するとゴドレイ星人の背中にレーザーが命中し火花が散る。

「借りは返すぜウルトラマン」

フドウはそう呟き三機はゴドレイ星人の背中に攻撃していく。

隙ができネクススはゴドレイ星人を押し飛ばしジュネッスブルーにスタイルチェンジ、ここは力のジュネッスが有効だと思うがそこはカズキの計らいなのだ、憐の話聞いたカズキは今回ジュネッスブルーでゴリ押しで倒そうと、憐のやり方で倒そうとしているのだ。

「シエアッ！」

ネクススは走り飛び蹴り、パンチと攻撃を加えていき防がれるが遊園地から遠ざけていく。

「フ、ハッ、シエアッ！」

キックを連続で放っていくがすべて防がれたが大きく吹き飛ばす。

「ハッ、シエアッ！！！！！」

手を十字に組みクロスレイ・シュトロームを放つがやはり防がれる、防ぐ体勢のままゴドレイ星人は光線をチャージする、前に破壊した街もこの貯めて強力にした光線で焼け野原にしたのだ。

（奴のハサミが硬いなら奴の光線を当てたら）

そう考え強力な光線が放たれるとサークルシールドで受け止めると後退る。

「何をするつもりなんだ……………」

ガッツイーグルに合体すると機首にエネルギーを貯めていく。

「ハアアアアア……………！」

光線が止まるとバリアで包んだゴドレイ星人の光線を左腕に纏い突き出し放つ青い強力な光線、ナックルレイ・ジエネレードを放つと同時にガッツイーグルはトルネードサンダーという強力な光線を放つ、

ゴドレイ星人は手で受け止めたのだが自分が放った光線でもあり強力過ぎてハサミは碎け散る。

（よし！）

そして右腕に光の矢が現れ狙いを定めアローレイ・シュトロームを放ちゴドレイ星人を真つ二つに切り裂く。

ゴドレイ星人は両手を下げ後ろへ倒れ爆発、倒されたのだった。

「よっしゃー！」

スーパージョウの面々は勝利を喜びネクサスは姿を消した。

そしてカズキと幽香は幻想郷の八雲邸に戻ってきた、紫はいつもより明るくなっていたカズキを見て安心していた。

「母さん」

「何？」と紫は返すと。

「俺、無茶だと思う、だけど、俺が守り今も守るこの幻想郷と孤門副隊長やナイトレイダーが守り抜いた外の世界、両方を守りたい、だから」

紫も幽香も分かった、何が言いたいかを。

「スーパーGUTSに入りたい」

「もちろんオツケーよ」

即了承を得られて頭を深々に下げて礼を言つと。

「なら訓練学校に入るために試験受けなきゃね」

カズキはスーパーGUTSに入隊するためにまず訓練学校ZEROに入学するための試験を受ける事になったのだが、前にナイトレイダーの入隊試験を受けていたためすらすら入れたのは言うまでもなかった。

T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
.
.
.

EPISODE 08 新たな世界へ……（後書き）

因みにカリヤは隊長という柄じゃないと思ったのでコウダが隊長、リヨウが副隊長に、フドウ・ケンジは皆さん覚えていますか？

訓練学校でアスカと争っていたフドウ・タケルの弟を、彼ならスーパーGUTSに入っているはずだと思い入隊させておき 号のパイロットに。

因みにカズキが入る頃にはコウダはいません、参謀になりますので、後ヒビキ隊長はゴンドウ参謀が居なくなった席に入る形で参謀になったという設定です。

当分カズキは出ないかもしれないかもしれませんが、参謀になりませんか？ ジンも入隊させようとしたのですが彼はZAPの史上最強の貨物船のクルーなのでやめました（笑）

次回予告

ムサシ

「リドリアスも元気になってきたな」

白蓮

「怪獣って可愛いですね」

「ガゴオオオオオッ！！！！！！！！」

ムサシ

「アレはゴルメデ！」

コスモス

「絶対に許さない…………絶対！」

次回【EPISODE 9 爆発する太陽の炎】

感想お待ちしております。

EPISODE 9 爆発する太陽の炎（前書き）

今回はマジギレコスモスが……………コスモスは怒らせたらいけない
ウルトラマン。

登場怪獣

友好鳥獣リドリアス

古代暴竜ゴルメデ

カオスゴルメデ

登場

EPISODE 09 爆発する太陽の炎

「リドリ阿斯も元気になってきたな」
「そうですね」

妖怪の山の裏側、そこに前にカオスヘッダーに寄生されムサシが助けたリドリ阿斯が羽根を休めているのをムサシと白蓮が見ていた。

「これもムサシさんのおかげですね」

コスモスがムサシというのは命蓮寺の妖怪達は知っていた。
妖怪の山に行くと言ったためムサシ一人では危険だと言う事もあり着いてきていたが白蓮自身リドリ阿斯の事を気に掛けていたため一緒にここまで来たのだ。

「そうですね？」

「はい、ムサシさんならカオスヘッダーに取り付かれた怪獣をすべて救えますよ」

リドリ阿斯を救った事により過大評価する白蓮、その言葉で少し照れて自信を付けるムサシ。

「もっと頑張ります、カオスヘッダーに取り付かれた怪獣達を助け

ていきます！」

「その意気ですよムサシさん」

微笑み掛けられ頬を人差し指でポリポリ搔きながら更に照れてリドリアスに別れを告げてから命蓮寺に帰って行った。

「クエエーッ」

「そういえばなんでそんなに怪獣を気に掛けるんですか？」

少し疑問に感じた、必要以上に気に掛けているため聞いてみる事に。

「小さい頃、怪獣に助けられた事があるんです」

「怪獣に？」

「はい、ヒドラって言う鳥の怪獣なんです」

高原竜ヒドラ、かつて初代ウルトラマンと戦ったが倒されずいずこともなく飛び去った怪獣で交通事故で亡くなった子供達の化身と言われておりウルトラマンが逃がしたのは背中に子供を乗せているのを見たため倒さず逃がす事にした怪獣である。

ムサシは小学生の時ハイキングで大室山という場所に行き迷子になり崖から落下してしまった時にヒドラに助けられたらしい、子供達の魂の化身であると言われているため命を落とし掛けた幼い時のムサシを助けたのだらう。

「まだあるんですよ、ハイキングでまた迷子になった時に、ヤマワ

ラワ山脈って所でヤマワラワって怪獣に」

ヤマワラワ山脈に生息するヤマワラワという怪獣は童心妖怪と呼ばれており子供や純粋な心を持つ人間にしか見ることでできない妖怪として語り継がれている。

「それって運がいいのか悪いのか……………」

山で迷子に二回もなるなんて、助けられたからって運がいいのか分からないため苦笑するしかなかった。

「ですよ〜」

「そして宇宙でコスモスに助けられて」

今回で三度目、二度あること三度とはこの事だろう。

「しっかりしてそうどこか抜けてますよね？」

「は、はい……………」

しっかりしようと意識するのだがその人間の性はそんな簡単には変えられないためこれから先苦労するのは目に見えていた。

「頑張ってくださいね」

そんなムサシを心から気持ちを含めて応援する白蓮だった。

その頃、地底で何か目覚めようとしていた、古代から生きる暴竜が。

二人が命蓮寺に到着し中に入ろうとすると地震が一瞬だけ起き地面が揺れる。

「地震？」

「そうですね」

「二人共お帰りなさい」

星が気になり中から出てきて丁度二人がいたため迎える。

二人は「ただいま」とか言う。

「地震あつたけど大丈夫星？」

「はい、中は大丈夫ですムサシ、ですけど唐突でしたね」

先の地震が気になりつつ中に入ろうとしたらまた地震が起こる、今度は長く揺れ遠くで土が舞い地底から古代暴竜ゴルメデが現れた。

「怪獣！」

ムサシの出番がやってきた、白蓮と星に「行つて来る」と告げ走りだし変身アイテム、コスモプラックを出す。

「コスモオオオオオオオオオオオオオオオオオース!!!!!!!!!!!!!!」
「！」

コスモプラックを掲げて蓄みたいなカバーが開くと光を解放しムサシはコスモス・ルナモードに変身し巨大化、ゴルメデの前に立ち里に入れさせないように制止する。

（待て！ この先は行つてはダメだ！）

ゴルメデに語り掛けるが興奮しているため聞かず火炎弾を連射してきた、コスモスはそれを手刀やキックで切り払いしていき接近していく。

「ハアアアア……………シエアッ！」

突撃してくるゴルメデの腹に手刀を打ち込み後退させていく、ゴルメデからの攻撃もあるがすべて食い止めていくがある事に気付いた。

（この怪獣、弱っている？）

ゴルメデが弱っているように見えておりこのままではゴルメデを死なせてしまう、そう思ったコスモスは手に光を集めて凶暴化した相手を落착かせる光線フルムーンレクトを照射し凶暴化していたゴルメデを落착かせた。

（なんでゴルメデは……………）

するとゴルメデに不気味な光が纏われる。

（まさか！）

「星、まさかアレは……………」

「カオスヘッダー……………」

ゴルメデはカオスヘッダーに寄生されていたのだ、カオスヘッダーは離れゴルメデの生命エネルギーを吸収し姿を借り実体化、カオスゴルメデとなる。

「シエツ！？」

カオスゴルメデは雄叫びを上げ弱り切ったゴルメデに光線を放つ、ゴルメデは光線を浴び倒れてしまった。

（ゴルメデ！）

コスモスはゴルメデに駆け寄り抱き起こすが息は無く、死んでしまっていた。

「ムサシさんが頑張って助けたのに……………」

「カオスヘッダーめ……………！」

ゴルメデの亡骸を横にし拳を震わせながら立ち上がりカオスゴルメデを睨む。

「ハアアアアア……………デヤアツ！」

気合いを入れ左腕を最初に挙げて入れ換えるように右腕を挙げ赤い光を全身に纏い青い姿から赤く太陽のような姿に変化し額にサニー

スポットという赤いクリスタルに変わっているウルトラマンコスモス・コロナモードに変身した。

「コスモスが、変わった」

「ハアアアアア………デイヤツ！！！！！！」

コスモスは声を荒ら上げ構えると走りだしカオスゴルメデにキックを食らわせ蹴り飛ばす、ルナモードでは考えられない荒々しい攻撃を繰り返したため白蓮と星は驚く。

「コスモスが………怒っている？」

感じていた、コスモスは怒り、カオスゴルメデを絶対に許さないという雰囲気を出していたのに。

「デヤアツ！！！！！！」

ジャンプして右足で上段回し蹴りを頭部に食らわせると次は左足で回転して振り向きざまにキックを食らわせ蹴り飛ばしすぐに接近し立ち上がった瞬間顎に強烈なアッパーを食らわし腹部に連続パンチを打ち込んでいき背後に回り込み尻尾を掴み振り回して遠くへ投げ飛ばす。

「ハアアアアアア………！！」

気合いを入れ両手を上げ赤い光が放たれ前に突き出してエネルギーを圧縮し腕を引いてから思い切り突き出し赤いエネルギー光線を発射するブレージングウェーブをカオスゴルメデに食らわすと粉々に爆発し吹き飛んだ。

「……………」

コスモスはゴルメデを抱き抱えていずこともなく飛び去った。

「ムサシさん……………」

それからムサシは帰ってきた、暗い顔をしながら。

「助けられなかったんだ……………僕はゴルメデを……………」

ムサシはもうカオスヘッダーによる被害を出さないと誓い白蓮達はそんなムサシを応援するのだった。

T o b e C o n t i n e d . . .

EPISODE 09 爆発する太陽の炎（後書き）

次回もカオスヘッダー出ますよ、天使面した悪魔が……

次回予告

光一

「誰だ!？」

スバル

「なんで俺、こんな所にいるんだ？」

映姫

「貴方はだいたい……」

咲夜

「天使なんて……いないわよ、ウルトラマンはいるけどね」

ティガ

「この幻想郷にお前達みたいな悪魔は」

ダイナ

「必要ない!」

次回【EPISODE 10 悪魔の逆襲】

EPISODE 10 炎魔の逆襲（前書き）

タイトルが変わったのは閻魔戦士じゃなくて炎魔戦士だったので（笑）

間違えました、ごめんなさい、マジでごめんなさい。

登場怪獣

カオスキリエロイド

登場

EPISODE 10 炎魔の逆襲

「咲夜、これここでいい？」

「いいわよ」

紅魔館で光一が咲夜と一緒に掃除をしていた。

「美鈴も昼寝しないでちゃんと門番やってくれればいいのだけど……」

軽く愚痴を零し苦笑しながら聞いていると外からくしゃみする音と
いびきが聞こえてきた。

「やっぱり寝ているわね……」

怒気を放ちながら歩き門へ向かう、光一はこの後起きる事にまでも
や苦笑を零したその後美鈴の悲鳴が聞こえた時だった、悲鳴は途
中で止まり様子が変だと走りだそうとしたが体は動かす回りの景色
や妖精メイド達は動きが止まっていた。

「な、何が……」

「また君が現れたのか」

すると声が聞こえてきた。

「君がここに現れた所為でこの世界の住人は君達を守護神だと思っている」

「誰だ………正体を見せろ！」

だが声は聞こえなくなり景色が動き出し自分も動けるようになると悲鳴の続きが聞こえた。

「一体今のは………」

「なんで俺、こんな所にいるんだ？」

「あたいだって知らないよ」

ここは三途の川、小町が使う船になぜか死んでもないのにスバルが運ばれていた。

「お説教があるのは確かね」

「お説教のためだけに地獄に行かなきゃいけないの!？」

「覚悟しておくんだね」

深いため息を吐き地獄へ向かう遊覧船はどんぶらこどんぶらこと進んでいく、着くまで暇かと思いきや小町が色々な話を話してくれたため退屈ではなかった。

「小町って色んなこと知ってるな」

「まあね」

だが話す時は一方的、死人に口無しとはこの事であるとスバルは実感していた。

「そろそろ着くよ、降りる準備をしたした」

船は彼岸という場所に到着し映姫がいる場所まで歩いていく。

「ここ生者は滅多な事がない限り来れないんだよね、だってここは元々死者の魂裁いて地獄行きか天界行きか冥界行きて決める場所だから」

「何！？ 俺なんかした！？ えーきちゃん困らせるような事したかな！？ 答えてよこまっちゃん！」

まさかここで死ぬような事して裁判に掛けられるのとかあらない事を考え始める。

「死んだら死んだらであたいが送ってやるよ」

「嬉しいような悲しいような……………」

この後どうなるか不安になりつつ歩いていると……………

「四季様、罪人連れてきましたよ」

「裁判掛ける気満々!？」

「ご苦労様です小町」

「ではあたいはこれで」とその場を後にしようとしたら止められた目を離すとすぐサボるから。

「で、なんで俺はお呼ばれ……………まさか俺は実はもう死んでるからここに来れたとか!？」

「違いますよ……………今回は特別に生者であるあなたをここに来させたのです」

特別にを強く強調しもしかして誉められる?とか思いながら話を聞く事に。

「小町からあなたの事をよく伺うのですが」

自分の事だった、小町は自分が知らない所から俺を見て映姫に教えていたんだなと思い自分はいいい行いしていると自信があったが。

「聞くところによればあなたは美しい女性に会ったんに口説き文句を言つてナンパしているようですね」

雲行きが怪しくなってきた、嫌な予感ばかりしてきた。

「限度というものもありますよね? 必要以上に体を触る行為もしていると小町から聞いています」

余計な事と思ったが今は目の前の方の話を聞く。

「よってあなたは性格が曲がり曲がっています、ですので白黒はつきり付けます」

息を飲む、小町も自然に息を飲むと。

「あなたを私の傍に置き私の補佐をしていただきます」

思わず声を上げた、小町もだ。

「上の方からも許可を取っております、生者をこの地に入れるのは気が引けますがあなたを更正させるためにもあなたをここに置きます」

笑うしかなかった、お役所の仕事なんてやった事ないしまさか死者を裁く閻魔様の補佐なんて仕事内容を考えただけでも恐ろしい、嘔吐したら舌を抜くところを見るのではないとか。

「いいですね？」

とか聞くが閻魔の判決は絶対のため断れずスバルは渋々了承した、映姫の傍に居られるからいいかと前向きに考えて。

「手始めにこの書類全部に判子とサインをお願いします」

出して来たのは大量の書類だった、机の上に置いてその上には判子とボールペンが。

「ではよろしくお願いしますね」

「はい……………とほほ」

小町に救いの眼差しを向けたが「あたいの仕事は死人の魂をここに送り届けるのが仕事だから」と言い残しそそくさと去った、サボるのは確実だろうと思ったが頼みの綱は切れ、目の前にある大量の書類に判子とサインを付けていくのだが。

「まさか閻魔の補佐をする事になるとは光の戦士も落ちたものだな」

映姫や小町ではない女性の声が響いた、回りを見渡すと回りの景色は止まったようで動いていた映姫もピタリと止まっていた。そこにフードを被った女性が入ってきた。

「誰だ？」

このスバルは口説き文句を言わないくらいその女性を警戒していた、ここは生者は来れない場所、たまたま自分映姫の説教の為に特別な許可があっているがその女性がこの場にいる以上無闇な事はできない、なんでもかんでもナンパしているわけではなかった。

「お前は誰だ？　なんで俺が光の戦士だと？」

「貴様から感じる光の波動で判る、宇宙に消えた光の波動が」

正体を証すつもりはないらしい、それを察し警戒を解かないスバルは青い光線銃ガッツブラスターを抜き銃口を向けるが不思議な力で弾かれると自分の弾かれ壁に激突してずり落ちると肩を踏み付けてくる。

「私達を倒したいならさっさと巨人に変身しな」

相手が何者なのか判らない以上無闇な戦闘はできない。

「するもんか……………」

「せいぜい強がりな」

女性は消えると回りは動きだし今のスバルの現状を見て映姫は多少混乱する。

「どうしたのですか!？」

「大した事ないから大丈夫」と返しフラフラしながら立ち上がる。

「書類整理今はできそうにないや、幻想郷の方に用ができたから」

リーフラッシャーを出すと起動させ等身大のダイナ・ミラクルタイ
プに変身、テレポーターションを使いその場からいなくなった。

「いつもあんなに真剣なら私も文句は言わないんですけどね……
小町もそうですし」

問題児の部下ばかり持って苦悩する上司だった。

「あの声はなんだったのだろうか………」

紅魔館で未だ掃除中の光一は先ほど自分に話し掛けてきた声の主に
ついて考えていた、話の内容からウルトラマンに強い恨みを抱いて
いるのが分かる、もしかしたら以前マドカ・ダイゴから聞いた事が
ある怪人かもしれない、炎魔戦士の名を持つあの………

「光一、拭き残しがあるわ」
「あ、すみません」

考え事に集中していた為掃除が疎かになり窓が綺麗に拭けていなかったため咲夜から注意を受け掃除に集中する。

「何かあったの？」

普段真面目な人間が集中していなかったのを見たら誰でもそう聞くだろう、光一は先ほどの事を話すべきか迷っていたが。

「何かあったら言いなさい、ここであなただけが上司なんだから」

その言葉に吹っ切れ光一は先ほどの出来事を咲夜に話した。

「ウルトラマンに強い恨みを抱いている敵ね……………」

「目星は付いてる、おじさんから聞いた事があるかなりの強敵みたい……………僕が勝てるか……………」

不安な表情を浮かべていると。

「勝てるかどうかなんて分からないわよ誰も」

レミリアは運命を操る程度の能力を持っている、人の運命を見る事もできるが誰もがその運命を辿る事はない、未来は無数に別れているのだ、木の枝のように。

「初めから諦めていたら勝てないわよ」

最後にそう言い。

「ありがとう、咲夜」

最後に礼を言い再び仕事に戻った。

「スバルはちゃんと仕事やってるかな？」

三途の川の畔、やはりサボっていた、草原に横になって昼寝をし始めようとした瞬間だった。

「な、なんだい!？」

突如赤と青や黄色い光の粒が混じった渦巻く光が現われた。
光は消えるとそこに現れたのは等身大のダイナ・ミラクルタイプだった。

「ダイナ……………てことはスバル!」

ダイナは光に包まれるとスバルの姿に戻る。

「やっぱりサボってた」

「いやアンタもそれは……………」

スバルもサボりに思われていたようだがどうにか誤解を解く。

「あそこに簡単に行く奴がいるなんてね……………そいつかなりのやり

手だね」

「だろ？」と返すと中有の道ちゆうののみちという妖怪の山の裏側に位置する道を通る。

「お、屋台だ」

その道は屋台が多く並んでいた。

「ここは生者も来れるからね、祭り好きな奴がよく来るんだよ」

「まさか地獄の経済状況が悪いからって罪人に働かしてるんじゃない……」

スバルの考えは当たりだった、地獄で責め苦や労働に対して模範的態度であった罪人の卒業試験的なようなものをかけているが地獄に落とされるレベルの罪人だけあって売上ちよるまかしたりなどの悪事を働く為、また地獄に逆戻りとループしているらしい。

「何回もえーきちやんに裁かれるのかよ」

「そりゃ幻想郷で悪事するからね、ヤマザナドゥは幻想郷の閻魔って意味だし」

豆知識的な事を言った後に。

「あと元地蔵だし」

「あの道端に置いてあるような!？」

「うん」

「だからあんなに説教臭いのか……」

「まあそれもあるけど……」

話ながら中有の道を抜けるていく頃には夜になっており辺りはすっかり暗くなっていた。

「暗いな……………」

「いつもより気味が悪い……………」

この異様な空気に二人は気付いていた、すると妖怪の山から青い火が吹いたと思いきや山からではなくその向こう側から青い火柱が立っていた。

「なんだいアレ!?!」

「行ってみるぞ!」

二人は急いで火柱が立つ方へ走りだす。

「アレは……………」

紅魔館からでもその火柱は見えており。

「……………呼んでる」

光一は感じていた、その火柱に呼ばれていると。

「あの火柱に?」

レミリアに問われ頷くとスパークレンスを取り出す。

「行かないと……………」と呟いた後、光一は走りだしていった。

「光一は勝てるのでしょうか？」

「さあね」

レミリアには見えていた光一の運命が、今はこの場では言わなくてもいいことだろうと口を閉じた。

魔法の森の中、そこに火柱は消え巨大な人型の巨人が立っていた、灰色の骨のような浮き出た模様に胸の発光体、そしてそのおぞましい顔に足に纏った青い炎が特徴の力オスキリエロイドが。カオスキリエロイドは暴れる素振りを見せなかった、暴れるを目的にしているようではなかった。

「アレは……………」

ムサシはその巨人を見て恐怖を覚えた、異様な殺気に。

「ムサシさん、あの怪獣は……………」

白蓮に問われ過去にキリエロイドという怪人が現れたと教えその怪人に似ていると、そうカオスキリエロイドは炎魔戦士キリエロイドにカオスヘッダーが寄生した姿だがキリエロイドはどういう系列でカオスヘッダーに寄生されたか不明だがその姿となり何かを待っていた。

その待っていた者が目の前に降り立った。

「チエツ！」

ティガ・マルチタイプがカオスキリエロイドの前に立ちはだかる。
カオスキリエロイドはティガを待っていた、キリエロイドは二回現れ二回共ティガに倒されたという因縁がある、その為ティガが現れるのを待っていたのだ。

（キリエロイド、お前達はガタノゾーアが現れた時、世界を捨てて逃げたと聞いているぞ）

まずは話し合う事にした、なぜこの世界に帰ってきたかが判らないからだ、どういう目的なのか判らない以上無闇な戦いは好ましくないと思う。

（簡単な事だ、我々はここが多元世界になり戻って来たのだ、この力を手にするために）

手に青い炎を出しそう言う、カオスヘッダーの事だろう、キリエロイド達は戻ってくるつもりだったのだ、ウルトラマンを倒す為に、その為の力を手にする為に自分の世界を捨てて力を求め。

多元世界になったのをどこかで知るかもしれないどこかの世界にいた時に巻き込まれた、そのどちらかが原因でこの世界に戻ってきたのだ。

（そうか……………その為に、光を受け継いだ僕を倒す為にこの幻想郷に……………）

（そう……………だがもう一人）

ティガ……………自分以外にもう一人、名前が上げるとしたら一人上がった。

た。

（ウルトラマン……ダイナ……）

光を受け継いだ者、ジングウジ・スバル、ウルトラマンダイナだった、ダイナはアスカ・シンが宇宙に消えた父親、アスカ・カズマが光となったものと同化し変身していた、今のスバルはアスカと同化している形でダイナに変身している、

光を受け継いでいるようなものだ、ダイナ……スバルも。

（これで3000万年前の恨みも晴らせる……この怒りの炎でええええええええええつ!!!!!!!!!!!!!!）

カオスキリエロイドは右腕を伸ばして走りだしその右腕を振り上げ拳を振り下ろすが右に移動して攻撃を避け。

「ハッ！」

そしてカオスキリエロイドに胸に手刀を打ち込み、伸ばし切っていた腕を掴み背負い投げを食らわす。

「キリイ！？」

カオスキリエロイドは体を跳ね上げ立ち上がる。

「ギリイッ！」

するとカオスキリエロイドはその場から消えた。

（消え……ぐわあっ！？）

すると背中に火花が散り前のめりへ倒れ膝を付く。

（高速移動……………）

カオスキリエロイドは高速移動を繰り返してきたのだ、俊敏さが上がり更に足に磨きが掛かった為その俊敏さを利用して高速移動をしいるのだ。

上がったのは俊敏さだけではなくその足に纏う青い炎、青い炎は赤い炎より温度が高く。

「キリイイイーツ!!」

「グワアッ!？」

手から火炎放射を放ちティガに追い討ちを掛ける。

「ん……………ハッ!」

ティガはそのスピードに着いていく為、スカイタイプにチェンジするが。

（遅い!）

（ぐっ……………!）

だがカオスキリエロイドのスピードに着いてこれず打撃を何発も食らいボロボロになっていく。

（見えない……………どうすれば……………）

スバルと小町はカオスキリエロイドと戦い苦戦するティガを目撃。

「ちょっとヤバいんじゃないのアンタの友達！」

「ヤバいどころじゃねーなありゃあ」

リーフラッシャーを取り出し変身しようとするが空から何かが急降下しキックを放つ、二人はギリギリのところを避け自分達を攻撃した者を直視する、それはティガと戦っているカオスキリエロイドだった、もう一体いたようだった。

「まさか強敵がもう一体いたなんてな……………！」

今度こそリーフラッシャーを起動させダイナ・ミラクルタイプに変身、スバルはミラクルタイプの方が戦いやすいようだ、スバルは手品が得意で手先が器用なため奇跡の技が自由に使えるミラクルタイプが好みなのだ、アスカは前に突き進み力でねじ伏せるストロングタイプが好みだが。

「さあ、行くぜ！」

ダイナが構えると小町も大鎌を持ち構えるとカオスキリエロイドはティガと同じように高速移動をやはり姿を消すが……………

「高速移動しているところ悪いけどあたい、距離を操る程度有能力、距離を詰めたり離したりする事ができるのさ」

カオスキリエロイドの背後に小町が居り大鎌で一閃されるが鎌自体

には切れ味がないため切るではなく打撃によるダメージに、因みに鎌を持っているのは死神は鎌を持っていると信じてる人々の為に「死神は本当に鎌持ってるんだ」という感じ、つまりサービスで持っている。

「ギリイツ!？」

一閃された後、バランス崩し勢いが余り転がり込む、止まった後に立ち上がると目の前にダイナが迫ってきておりバク転し距離を離すが背後にダイナがテレポーターションで回り上段キックを食らわし後頭部を蹴る。

「ショワッ!」

その後にチョップを食らわす、次に両肩に両手でまたチョップを食らわしていき体を回転させ思い切り足を伸ばしてカオスキリエロイドを蹴り飛ばすとその背後には小町がおり。

「こつちこつち〜!」

大鎌を横に振るい一閃しカオスキリエロイドは体がくの字に曲がり地面に落下して大きく弾む。

ダイナと小町はカオスキリエロイドに対抗できる能力があつた為、それほど苦戦はしていなかった。

「キリイイイイイイツ!!!!!!!!!!」

火炎放射を二人に向け放つ、ダイナは前に立ちウルトラバリアーで火炎放射を受け止める、威力が強い為圧されていると思いきやそうでもない。

「ハアアアアア……………！」

受け止める火炎放射は光に変換されていき、カオスキリエロイドの攻撃が止まるとその吸収したエネルギーを体内に溜め込んでおきウルトラサイキックというサイコキネシスでカオスキリエロイドを宙に浮かせる。

「キリイイイーツ！？」

藻掻くが地面には降りれず、また火炎放射を放つがそれが命取りだった、同じようにウルトラバリヤーで防ぎ、攻撃が止まった瞬間手にカオスキリエロイドの火炎攻撃を吸収し光に変換されたエネルギーを伸ばした右手からすべてレボリウムウェーブ・ゼロとし打ち出し、カオスキリエロイドに直撃し爆散した。

「見たか？ 俺の超ウルトラスーパーデラックスマジック！」

変身を解いてスバルの姿に戻る。

「すごいな、まさかあんなことまで」

「まあ、はい」

すると手から花をいきなり出した。

「手品には仕込みをしておかなきゃな」

「こんな事もできるんだ、見直したよ」

見直すなら役所仕事させられる前にやってくれと言いたいがもう覆せないだろうと泣くしかない、そして後はティガである。

ティガは肩で息をしており身体中傷付いていた、持久力がないスカイタイプでは尚更。

カラータイマーは点滅しており、タイプチェンジもさせる暇を与えてはくれない為パワーにもマルチにも戻れない、どうしたらと思っていると突然回りの時が止まった、昼間にカオスキリエロイドが時を止めたような嫌な空気ではなかった。

「早く敵を倒しなさい光一」

後ろに咲夜がいた、どうやら自分とティガだけは動けるように時間を止めたのだろう。

頷いて返すとカオスキリエロイドがいる方を向いてパワータイプとなりその背後に回り込み羽交い締めになると時間は動き出す、カオスキリエロイドは何が起きたか理解できず藻掻くがパワータイプの力の前にはどうする事もできず、そのままバックドロップを食らい後頭部を強打、立ち上がるうとするが強烈なパンチが腹部に叩き込まれくの字に体が曲がりその後に関し蹴りで頭を攻撃され。

「タアアアアアッ！！！！！！」

アームハンマーでまた後頭部に攻撃され前に屈むとかかと落としを背中に食らい地面に叩き付けられる。

「ハアアアアア……………！！」

カオスキリエロイドを頭が下に向けて持ち上げそのまま一気に落としウルトラヘッドクラッシャーを食らわせてから両足を掴みそのまま振り回してジャイアントスイングでカオスキリエロイドを投げ飛ばす。

「ん…………ハッ！」

マルチタイプに戻ると腕を後ろに引いてから前に伸ばし手を重ね両手をゆっくり横に広げると暗闇を照らす一筋の光が現れる。

「フツ……………タアアアアッ！！！！！！！」

腕をし字に組んでゼペリオン光線を発射、立ち上がったカオスキリエロイドの胸に命中し、光線が止まるとカオスキリエロイドは爆散し倒された。

（終わった……………）

ティガは星が輝く夜空へ飛び去った。

「咲夜」

紅魔館、レミリアは紅茶を入れる咲夜に話し掛けた。

「なんででしょうか？」

「あなたが助けにいかなくても光一は勝てたわよ」

レミリアが見たのはそういう運命だった、ティガフリーザーを放ちカオスキリエロイドの足を止めてからパワータイプに戻り猛反撃を食らわしてからマルチタイプに戻りゼペリオン光線で倒すという運命だったらしい。

「そうでしたか」

「ええ、さて、仕事中に紅魔館から抜け出した処罰はどうしましうか？」

「なんなりと」

冗談半分でそう言われているのは分かるがあえて言わずレミリアに言葉を返す咲夜。

光一は疲れており帰ってきた瞬間倒れて眠ってしまった為、部屋に運ばれて寝に付いていた、またキリエロイドが攻めてくるかもしれないと感じつつ……

「今回の働きぶりは評価します」

一方スバルは映姫の所に戻っていた、言われていた仕事をしながら話を聞きつつ、カオスキエロイドを倒したのは評価されたようだ、すぐに危険な存在だと感じたその感の鋭さも。

「いやあゝまあ、どんなに可愛い女の子だからって危ないのぐらいは見分け付くよ」

サインや判子を付けつつ返していく、事務仕事は得意じゃないと言
つておきながら得意だった、理由は始末書をよく書かされる事が訓
練学校時代多かったから。

「少しは見直しましたよ、よくやりましたねスバル」

何かを求めるような子供の目で作業を止めて詰め寄る。

「な、
なんで
ですか？」

少し動揺しつつ問うと。

「見直したなら俺とデートしよーよーえーきちゃん」

その瞬間、自分の発言に後悔した、すぐに調子に乗ってきた為。

「あなたという人は……罰として」

ドンと出したのは自分の分の書類の山だった。

「私の分もやってもらいましょう」

「えええええええええええええええええつ!!!!!!」

T
o
b
e
C
o
n
t
i
n
e
d
.
.
.

仕切りという名のキャラ紹介（前書き）

すみませんが一話から直します、仕切りとしてキャラ紹介を投稿します。

ではキャラ紹介どうぞ。

仕切りという名のキャラ紹介

八雲カズキ

年齢／英雄光時19歳／現在20歳

性別／男

イメージ／CV／三木眞一郎

種族／妖怪／ウルトラ属

好きなもの 博麗霊夢、カステラ、和食 or 洋食

嫌いなもの ダークザギ、ザ・ワン、トマト、キレた時の八雲紫（
BB Aに反応した時）

ウルトラマンネクサスに変身していた青年だが今は分離しネクサスの本当の姿であるウルトラマンノアが残した光でネクサスに変身しているがただその光で変身しているのではなく父親の血、宇宙警備隊ゾフィーの光も受け継いでいるためその光も合わせ変身している。

幼少期は幻想郷の治安が悪く母親の八雲紫の外の世界に住む人間の夫婦の知り合いに預けたが新宿でのビースト・ザ・ワンの事件に

よりその親代わりを失い施設で暗い幼少期を過ごし里親をことごとく断ってきたがダークザギの事件から一年後、

ナイトレイダーの孤門一輝の「諦めるな」という言葉に目に光を取り戻しナイトレイダーに入隊するのを夢見て入隊するが三ヶ月後、紫や参謀のイラストレーターである吉良沢優により幻想郷へ誘われる。

そこで博麗霊夢と出会い博麗神社に住むことになり様々な絆を築き上げてきた、だがサロメ星人の計画により様々な世界が融合する第二次ギャラクシークライシスが起こり外の世界の時代が100年以上進みカズキがいた時代ではなくネオフロンティアと呼ばれる時代となってしまう自分の世界には帰れなくなってしまった。

絶望をしたがウルトラマンメビウスであるヒビノ・ミライのおかげ立ち直り本当の母が紫と知り、それから霊夢に想いを告げ恋人同士となりその後ノアに変身しザギとの戦いで勝利しノアと分離、ノアの光を受け取りその後もウルトラマンネクサスとして幻想郷に生き残ったスペースビーストや怪獣と戦い平和を守っているがそれにより霊夢は不安に感じている。

容姿は金髪でアホ毛が跳ねている、服はナイトレイダーのズボン履き上着は肩に背負うように掛け左腕には通信機であるパルスブレイガーを装着している。

モロボシ・ジン

年齢（地球人年齢） / 英雄光、現在20歳

性別 / 男

イメージC V / 宮野真守

種族 / ウルトラ属 / ? 属

好きなもの 仲間、ハヤシライス、コーヒー、東風谷早苗？

嫌いなもの ウルトラマンベリアル、修行（だけど努力は怠らない）、寒い所、八坂神奈子と洩矢諏訪子（嫌いと言うよりは苦手）

ウルトラセブンの息子の若き戦士、ウルトラマンゼロだが母親が不明のため種族はウルトラ属しかわからない。

左腕にはウルトラゼロアイを収納するウルトラゼロブレスレットが嵌められておりノアからバラージの盾の欠片を授かったが東風谷早苗に首飾りとして渡した。

光の国で最大の禁忌を犯し掛けたがまだ父親とは知らなかったウルトラセブンに止められK76星でウルトラマンレオの元で修行し悪のウルトラマン、ベリアルが解放された時、スペースペンドラゴンのクルーと共にベリアルを倒しその後ペンドラゴンと共に宇宙を駆けその際にセブンが別の宇宙で同化したジンという青年の姿を借りている。

サロメ星人の計画によりネクサスの宇宙の幻想郷に迷い込み自分の宇宙も融合してしまうがカズキ達と共にダークザギを倒しその後ペンドラゴンには戻らず幻想郷でゆるやかに平和を守りながら生活している。

容姿は少し長い黒髪 of 青年で服はいつもZAPの制服をズボンに

上着は腰に巻いている。

Episode・01【夜戦 ナイトバトル】（前書き）

リメイクスタートです、当分こっちはネクサス、メビウス、ゼロの
三人で過ごしたいかと。

登場怪獣

プロブタイプビースト・ペドレオン（グロース）

登場

Episode・01【夜戦 ナイトバトル】

ここは幻想郷^{げんそうきょう}、東の国、日本のどこかにある不思議な異空間の中にある土地、ここは普通の人間は行き来できず特殊な方法でないと来れない場所である。

ここには人間だけでなく妖怪や幽霊も暮らしている。

この不思議な世界、だがあなた方が知る幻想郷とは少し違います、この幻想郷には妖怪だけではなく怪獣という驚異が存在しています、なぜ現れるようになったのか、それは今から半年前、暗黒の破壊神ダークザギが復活するために送り込んだからだ。

最初はスペースビーストと呼ばれる人間の肉体と恐怖を捕食する種類の怪獣だけだったが宇宙人の計画により様々な次元の怪獣や宇宙人達が送り込まれ更には幻想郷で外の世界と呼ばれている地球が100年以上も時が経過してしまったが宇宙人の計画に利用された幻想郷だけはそのままだった。

その計画でダークザギの復活は早まったがその破壊神と戦い勝利した英雄がいた、その名は……………

ウルトラマン……

Episode . 01

夜戦 ナイトバトル

ある晩、魔法の森と呼ばれる森の中、ここははじめめており普通ではない化け物茸の胞子が舞っておりずっとこの場にいたら普通の人間では瘴気に長時間は耐えられないため妖怪もあまり近付かないが瘴気に耐えられる人間にとっては安全でありその茸の胞子の幻覚には魔法の力の源である魔力を高める効果があるため魔法使いを志すものが好んで住み着くこともある。

だが、妖怪すら近付かない森でも足を踏み入れその胞子を吸収し力を貯えているものがある、それは………怪獣である。

「グエエエエエエエエー！！！！！！」

どんなに高い木よりも巨大な生物が森を横断していた、ナメクジのようで腰の辺りまで縦で左右に開く口を持ち頭部に二本の短い触手が生え両手は無知のようになやかな三本ずつ触手が生えており背中にコブみたいなものが付いたプロタイプビースト・ペドレオ

ン（グロース）が森の先にある人間が住む人里を目指していた。

「夜中からご苦労なこった！」

ペドレオンの進行方向に簾に跨り夜空を自由に飛ぶ白黒の服と
んがり帽子を被った金髪の少女が現れた、彼女の名前は霧雨きりさめ魔理沙、
この森に住む魔法使いである。

「グエエエエ！」

ペドレオンは頭部の触手の間から火炎弾を発射し前方にいる魔理沙に攻撃を仕掛けた。

「おっと！」

体を右斜めに向けて移動し火炎弾を避けるとレーザーを放って
い、これは幻想郷で行われる弾幕ごっこで使う攻撃で殺傷性は場合
によりできるため今放っているのは殺傷性があるレーザーである。

「キュイイイーン！？」

レーザーはペドレオンの右肩に命中し火花が散り苦痛の鳴き声を
上げると左腹部や右側面の首筋に火花が散る。

「霊夢！ アリス！」

「夜中から物騒なものと戦ってるわね」

そこに黒髪の赤いリボンを付け紅白の巫女服を着た博麗はくれい霊夢と金
髪の洋風な服を着たアリス・マーガトロイドが駆け付けた。

「アイツは？」

「うちのは今別件で母親の所よ」

軽く会話をしているとペドレオンは大きな鳴き声を上げズシズシと前進していく。

「今はペドレオンを止めないとな」

「そうね……じゃあジンさんは？」

「アイツは……知らないわ、興味ないし、うちの婿がカッコいいから」

さりげなくというよりは堂々と惚気る霊夢。

「いや、ジンさんが」

「カズキよ」

「てかアリス、ジンはライバル多いぜ？」

なぜか誰がカッコいいかと言合いとなるがペドレオンの鳴き声で目的を思い出す。

「って今は本当にコイツをどうにかした方がいいぜ」

ペドレオンの方を向くとスペルカードという弾幕ごっこで使う物を出し。

「さっさと倒して寝るわよ！」

「おう！」

「ええ！」

自分達より巨大な相手に挑んでいった。

「これで終わりかあ？」
「はい」

魔法の森とは違う離れた場所にある森の中、そこに金髪の髪の毛でダークブルーの特殊な布でできたズボンと上着を着た青年、この物語の主人公である大型の銃ディバイトランチャーを担いだ八雲カズキと狐の大きな尻尾を生やし中華風な服を着て頭の耳を隠すように帽子を被った狐の妖怪、八雲藍が小型のペドレオンを掃討した後だった。

二人は家族みたいなもので藍はカズキの母の八雲紫の式神、簡単に言えば手伝いとかそんな感じである、八雲紫とは幻想郷を隠す结界を管理する妖怪であり最古の妖怪でもある、詳しい説明は本人が出た時に。

「ご苦労様でしたカズキ様、近頃ここ一帯にペドレオンが大量発生していたので森に住む妖怪に危害を加えていたので」
「そっか、だけど藍もご苦労さん、後は俺がやるよ」

もう終わったはずと首を傾げる藍、カズキは上着のチャックを下

げ懷から白く赤と青のラインが入った短剣型のアイテム、エボルトラスターを取り出すと真ん中に埋め込まれたクリスタルが発光していた。

「そういう事ですか」

「ああ、じゃあお休み藍」

「先に休ませてもらいますね」

カズキはエボルトラスターの鞘を握ると抜き上げ光が解放され包み込まれ赤い光の球となり飛び立った。

「キュイイイン！」

「いつにもましてしつこいな！」

魔法の森、ペドレオンの進行は止まらずこのままでは里に入られてしまうというギリギリの所だった。

「てかジンはなんで来ないんだよ！」

「多分ねてるわ、あの人寝たら朝まで起きないから」

「なんでお前は人の生活リズム知ってるんだよアリス」

ペドレオンは両手の触手を振り回し接近できなくする。

「あーもう！ ペドレオンのくせに！」

キレ掛けている霊夢、だがそこに光の球が飛来しペドレオンにぶ

つかり跳ね飛ばした。

「来たみたいだぜ」

「別件は終わったのね」

光の球が消滅するとそこにしゃがんで頭を前に突き出している状態で地面に着地した胸に赤いY字のクリスタルが付き二つの乳白色に輝く眼がある銀色の巨人……八雲カズキが変身したウルトラマンネクサス・アンファンスが駆け付けた。

「シュウウウアアアア………！」

右腕を上に向け曲げて左腕を拳にし前に突き出す構えを取る。

「キュイイイン！！」

ペドレオンは立ち上がり戦闘意識を見せ高々と鳴き声を上げるとズズシと走りだしネクサスに立ち向かっていく。

「シェッ！」

一瞬ピンと腕を伸ばすと走りだしペドレオンとぶつかり合い取っ組み合いとなり押し合いとなる。

「シェアッ！」

右腕で首筋にパンチを叩き込むとずっしりとした重い音が響き左足でローキックを繰り出しペドレオンを攻めていく。

「フ、シュワッ！」

ペドレオンを持ち上げ飛行機投げをし遠くへ投げ飛ばすと左側で両手を添えその中に青白い稲妻が走りスパークする。

「霊符『夢想封印』！」

スペルカードはそれに書かれた名前を宣言しなければならぬため不意打ちなどではない、霊夢が使用を宣言すると複数の光弾が放たれていく。

「恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙はミニ八卦炉という道具を出してそこから超極太のレーザーを発射し最後に。

「魔光『デヴィリーライトレイ』！」

アリスがスペルカードの使用を宣言して光線が放たれるとネクサスは腕を十字に組んで薄いピンクに近い赤で輝く光線クロスレイ・シュトロームを放った。

「ギューイイイイイイーン!!!!!!!!!!!!!!」

攻撃はペドレオンを直撃し大きな苦痛の鳴き声を上げ、光線が止まるとゆっくりと倒れつつ体が青白く発光し四散しペドレオンは倒された。

「終わった終わった」

「最近自棄に多いわね、ペドレオンの出現率」

ダークザギが倒され約三ヶ月、ペドレオンの出現率が高く昼夜問わず現れ霊夢などの実力者が相手をする日々が続いていた。

「……………」

ネクサスは赤い光を放ちながら薄くなっていきその巨大な姿を消した。

「消えたぜ？」

「大丈夫よ」

霊夢の背後に亀裂が入り空間に中が目だらけの隙間ができる。

「迎えは来てるから、じゃあお休み」

その中に入ると隙間は閉じた。

「じゃあわたし達も帰ろうぜ、お休みアリス」
「お休み魔理沙」

二人も自宅への帰路に着いた。

ここは博麗神社、ここに霊夢が巫女として務めている、ここから外の世界にも行けるが一番の問題は賽銭箱がすっからかんなことだけ。

「ふう……………着いた着いた」

鳥居の内側に隙間が開き中から霊夢が出てくる、賽銭箱の前にはカズキが立っていた。

「お帰り霊夢」

「お帰りはこっちょ、神社から出掛けてどんくらい経ったと思っているのよ」

カズキはこの博麗神社に霊夢と共に住んでいる、それは元々カズキは外人だが妖怪の息子でもある、理由は母親の紫が外の世界の人間の夫婦にまだ赤子のカズキを預けたからだ。

外人人とは外から来た人間ということである。

カズキが住み始めたのは約十ヶ月ぐらい前であり幻想郷に送り込まれた時に霊夢と出会い外の世界に返すまで神社に住む事になっていたがスペースビーストが現れた事により幻想郷に滞在する事になったのだが今はこの幻想郷の立派な住人でもありウルトラマンノアからネクサスの光をわけ与えられその光で変身し怪獣やビーストと戦い幻想郷を守っている。

「そっぴや朝から藍に連れられて出掛けたままだったな、ただいま霊夢」

「お帰りカズキ」

挨拶を済ませると微笑み合い裏口の方に回りそこから神社の中に入る。

「お風呂入ってから寝る？ 汗でびしょびしょでしょ？」

「そうする、俺沸かしてくる」

「じゃあお茶準備して待ってるわよ」

数分後、火を起こして湯船の湯を沸かしている間に居間でお茶を飲んでいた。

「後どんぐらい？」

「後3分」

丸いテーブル、それを挟むように座りまるで夫婦のようだった、早く結婚しちまえよという話だが。

「どっち先入る？」

「昨日俺だから霊夢先に入って」

「オッケー」

何気ない話をし風呂を入り寝間着に着替えてそれぞれの布団に横になり灯りを消して眠るのだった。

俺は思っていた、危険だが穏やかなこの日常を一生続けて外の世界とは関わらないで生きていきたいと。

T o b e C o n t i n e d . . .

Episode・01【夜戦 ナイトバトル】（後書き）

このネクサスあまりメタフィールド使わないな……………と思ってたり。
そして今回はアンファンスだけでした、あまりないような、うちでは。

次回予告

カズキ
「これがここで……………」

霊夢
「またペドレオンみたいよ」

文
「号外〜！ 号外〜！」

ミライ
「やはり変だ……………何が起きているのだろうか」

カズキ
「ゴルゴレムなら の出番だ！」

次回『Episode・02』【俺の翼 マイウイング】

Episode・02【俺の翼 マイウイング】（前書き）

寒いですね、こんな時こそ英雄を聴いてテンションを上げるか青い
果実の疾走感でテンションを上げるか激走戦隊カーレンジャーのO
P聴いて元気出すのが一番です！

登場怪獣

岩石怪獣サドラ

インビジブルタイプビースト・ゴルゴレム

登場

Episode・02【俺の翼 マイウイング】

Episode・02

俺の翼 マイウイング

「これがここで……これがそこだな」

ある日、カズキはダークブルーで左右に二つずつタンクを搭載した機体、クロムチェスターの整備をしていた。

「カズキ、お茶淹れたけど飲む？」

霊夢が空を飛んでやってきた。

「あ、飲む飲む」

スパナとか工具を座席に置き、左腕のパルスブレイガーを使いコックピットのカバーを閉じる。

「油と鉄臭いわね……」

「お茶飲んだら風呂入ろうかな」

カズキも空を飛ぶことができる、並んで飛んでいると博麗神社の境内に入る影が見えた。

「あの速さは………」

「文ね、完璧」

魔理沙も飛行速度は速いがそれをも越える速さの妖怪がいるのだ。

「どーせまた勧誘でしょ？」

「だろうね」

二人は境内に降りると賽銭箱の前に短い黒髪でワイシャツとミニスカートを着て帽子を被って首にカメラを掛け肩掛けのカバンを掛けた少女が立っていた。

「どれも清く正しい文々。新聞の射命丸文しやめこまる あやです」

鴉天狗の妖怪で文々。新聞を発行している射命丸文であった。

「勧誘はお断わりよ」

「そんなつれないこと言わさんなって、これを見てください」

一枚の写真を出し霊夢に見せると。

「これは!？」

「あ」

藍の尻尾に抱き付いて気持ち良さそうにモフモフしているカズキが写っていた。

「カズキ……」

相手が女性なためやはり嫉妬を妬くのか黒いオーラを放ちながら近付いていた。

「あ、いや、だって藍の尻尾って気持ちが良いし……………てか藍とは姉と弟みたいな関係……………」

弁解しようと言葉を述べていくが効果はななくどこからか御被い棒を取り出し。

「待て待て待て！ それでどうするつもりだ！？」

「問答無用！」

「ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ツ！！」

数分間、棒で叩かれる音と断末魔が博麗神社の境内で轟いた。

「いやあ、夫婦の仲が宜しいところを見せてもらいました」

ちゃっかりと今の惨状をカメラに収めていた。

「まだいたの？ 勧誘はお断わりだから早く山に帰った帰った」

手をぶらぶらさせて帰れと表していたが。

「あややゝ、まだカズキくんの秘蔵写真があるのにな」

「ちょうだいよ」

「なら私の話を聞いてくださいよ、カズキくんもいつまでも死んでないで」

少し見せられないぐらい血が流れているがすぐに立ち上がる。

「たぐいつの間に撮ってるんだよ」

「幻想郷最速の私にかかれば一瞬通り過ぎれば撮れますよ」

ニヤニヤしながら自慢気に話す文。

「能力の無駄使いだろ」

「そうね、その胸も無駄使いだと思うからカズキ、境界を操って私の所に移して」

因みに今この場にいるパパラッチな天狗の胸は大きいが紅白の巫女は少ししか膨らみがない、そっちがあまり目立たないからか脇を出してるのだろう。

「すごく失礼な説明が……………でどうなの？」

「無理言っな」

境界とは空間の事を差しておりそれを操ったりし空間にスキマを開けて別の場所に移動できたりする、

母親が境界を操る程度の能力を持っているため息子のカズキにも受け継がれている。

霊夢は空を飛ぶ程度の能力、文は風を操る程度の能力を持っているが前者の能力は人間の実力者や妖怪なら誰でも、カズキはコツを掴んですぐにマスターした。

「話が脱線してきたので話を戻しますよ」

カバンの中から何枚か写真を出し二人に見せる。

「何よこの写真」

「カズキくんなら気付くかもしれません」

「……………ここ、全部今回ペドレオンが出現してる場所だ」

その答えに頷く、そう文が撮影したのはここ数日ペドレオンが出現した場所であるが。

「後……………ザギを倒す前に出現したビースト達の出現場所だ」

ザギが倒される前にも様々なスペースビーストが出現した、今回ペドレオンが出現している場所はカズキがまだ“本物”のネクサスとしてビーストと戦った場所でもある。

「なんで前にビーストが出現した場所にペドレオンが大量発生してるのよ？」

「そこに残った肉片からのビースト振動波に釣られて引き寄せられているのか？」

ビースト振動波とはスペースビーストが放つ独自の波長である、それにペドレオンが釣られていると推測する。

「妖怪の山にはバグバズンも現れてます」

バグバズンとはインセクトタイプビースト・バグバズンでカブトムシ等の昆虫の性質を持ったスペースビーストである。

「バグバズンがな………そういえばデイトランチャー量産進んでるの？」

「それはにとりが、何個か生産して天狗達が使用してます」

河城にとり^{かわしろ}、河童の妖怪の少女、この妖怪の山とは妖怪が住む山のことで山と言えはそこである、

そこに住む妖怪達の独自の社会が成り立っており縄張り意識も高いがスペースビーストの事件以降は人間の住む人里と少し繋がりが太くなった。

河童は外の世界と同等、もしくはそれ以上の技術力を持っている。

「バグバズンも集中砲火でしたし、これが今日の号外の記事の内容です」

「なんだ、結構今日の記事は為になるじゃない」

「結構お優しいようで」

「ペドレオンはクラインも出てんだよな」

この前藍と撃退したのが小型のペドレオン、クラインであり飛行形態はフリーゲンと呼ばれる。

「小型ビーストは多いわね、クラインやビーセクタとかフログロスやアラクネアとか」

ビーセクタはバグバズンと同じインセクトタイプビーストで人間より小さいが大群で襲撃する。

アンフィビアタイプビースト・フログロス、10m、巨大なもので40m以上越える時もある、火炎弾を放つ事ができる。

インセクティボラタイプビースト・アラクネア、2mか10m以上ぐらいの大きさに視覚は退化しているが嗅覚と聴覚が発達したビーストである。

「小型ならスペルカードを殺す気で使えば倒せるけど大型になると束にならないとキツイのよね」

基本スペルカードは非殺傷で弾幕“ごっこ”のため殺せないがそれは本人の意志である。

「だから俺やジン、ミライがいる」

ジン、モロボシ・ジンはウルトラセブンの息子のウルトラマンゼ口であり人里に今は住んでいる、
ミライ、ヒビノ・ミライ、ウルトラマンメビウスであり同じく人里にある寺子屋に住んでいる。

「大型ビーストや怪獣はアンタ達に任せるわよ」

「ああ」

今回はビーストの出現場所についての話だけだと思いきや。

「まだありますよ」

次は別の写真を出した。

「混乱すると厄介だと思いましたので記事にはしていないのですが」
その写真には崖の岩肌が何かに噛まれたような後があった。

「捕食した後かと……………」

被害者が出た事により悔しがるがもうこれ以上被害者を出さない
為にもその事を伝える。

「この歯形、どっかで見た事あるような……………」

こめかみを指でなぞりながら脳に記憶した情報を思い出そうとしていた。

「目撃者によると近くで巨大な結晶を見たようです」

「結晶……………ゴルゴレムか」

インビジブルタイプビースト・ゴルゴレム、別の空間に入り移動
する事ができるビーストである。

「大型ビーストの一種で別空間に逃げ込む奴だ」

「そしたら境界操ればいいんじゃないの？」

「まだ母さんみたいに自由にはできないよ、せいぜいスキマで移動
くらい」

姿が見えないとなると山の中で別空間に身を潜めていると判断。

「そのための だよ」

クロムチエスター に搭載されたハイパージェネレータにはネクススが発生させ作る異空間メタフィールドやゴルゴレムが潜む別空間に突入する事が可能である。

「なるほどね、今回はそれが出番なのね」

「出てきたところをデイバイトランチャーで結晶を破壊すれば逃げられなくなるからそこを叩けば」

「大天狗様に提案して今日中には行動できるようにしますね」

大天狗とは妖怪の山で主に管理職を努めており次に偉い。

「お願い、となると夜か……………俺達なりのクロスフェーズ・トラップを仕掛けないとならないか」

「くろ……………何よそれ」

「簡単に言えば罠を置いて罠を仕掛ける、待ち伏せかな？
ビーストも餌がないと動かないから……………不本意だけど誰かに頼むか」

ゴルゴレムを別空間で幻想郷内の妖怪の山の待ち伏せしている場所に出さないといくら引き摺りだしても意味がない、罠を用意すれば確実に近づくと言うことだがリスクが高い。

「……………まあ夜まで時間あるか」

「どんだけのんびりするんですか……………」

天狗達さえ貸してくればいいため細かい所はこちらで組み立てようと考えていた。

「まあゴルゴレムも動くの夜だろ？」

「昼間ならもう襲われて騒いでますからね」

「なら夜まで昼寝しよー」

あくびをしいかにも眠たそうな霊夢は神社の中に入っていった。

「いつも眠たそうですねあなたの奥さんは」

「まだ結婚してないから、まあ眠たそうなのは否定しねーが……
って俺も寝ようかな」

カズキもあくびをしながら神社に入ってしまった。

「夫婦は似るのでしょうか……もしくは紫さんの血？」

疑問に思いつつ黒い羽根を大きく広げ動かし空へ飛んでいった。

「あややゝ、こんにちはミライくん」

「あ、こんにちは文ちゃん」

人里、文はそこに寄りまず最初に出会ったのは茶髪の髪の毛の青
年、ヒビノ・ミライだった、この彼こそがウルトラマンメビウスで
ある。

「良かった、早く会えて」

「どうかしたの？」

妖怪の山で起きた事件の事を伝えに来たのだ、それを教えるとミライはありがとう、と礼を言う。

「夜にはゴルゴレムの殲滅が行われるので耳に入れておいた方が」
「分かった、里はジンさんに任せて山の方に行くよ」

よろしく願います、そう返すと文はまた黒い羽根を広げて飛んでいった、まだ新聞を配っている途中だからだ。

「お仕事頑張つて」

腕を大きく振りながら見送りその飛ぶ羽根を広げた後ろ姿を見て。

「立派な翼だな……………」

ミライは通信機メモリーディスプレイを出し眺める、後ろに描かれた炎を。

「……………俺達の翼……………そろそろできたかな」

空を見上げて山の方へ飛んでいく影を見つめていた。

そんなこんな、思い思いの時間を過ごしているとあつという間に夜となった。

だが山は静かで寝静まっていた、今回はゴルゴレムを誘き寄せる作戦は文が引き受けた、あっちこっちで妖怪が出てきたら現れるものも現れないと考えたからだ。

森の中、カズキが乗ったクロムチェスター が着陸しておりコックピットのカバーの横には霊夢と魔理沙が座っていた。

「飛ぶ時は降りてよ」

「わーってるわーってる」

「だけど引つ掛かるかしら？」

不安点もある、昨夜現れたからと出現確率は半々のはず、必ず出現するとは限らないがゴルゴレムは山に潜んでいるはず。

「……………引つ掛かったみたい」

コックピットのモニターにビースト振動波が感知されたのを示す波長を表示した。

二人は機体から離れるとクロムチェスター は浮上。

「ハイパージェネレーター、スキヤニングパルス、フェイズ・シンクロナイザー起動」

ハイパージェネレーターはネクサスが作る亜空間メタフィールドに突入するための制御装置でスキヤニングパルスはビーストの潜伏する位相座標を突き止める機能でフェイズ・シンクロナイザーは位相空間へ移動するための機能である。

「さて、いきましょっか」

クロムチェスター は加速し光を放ちながらその姿を消した。

「まだですかね……………」

被害があつた現場を中心に文は飛び回っていた、ゴルゴレムを誘い出すため。

「文ッ！」

霊夢と魔理沙が目の前で待っていた、なぜどこを飛んでいるのが分かったのはやはり現場の回りを飛んでおり文は速いため何度も同じ場所を通り過ぎるから一定の場所に立ち止まっていれば合流できるということ。

「あやや、見つかったんですか？」

「ああ、もうカズキが行った」

どこからゴルゴレムが現れるか身構えていると白い霧が漂ってきた。

「霧？」

「なんで霧が……………」

霧が発生する条件は整っていない、考えられるとしたら怪獣かビースト。

霧は忽ち辺りを包み三人の視界を奪った。

「何も見えないわね……………」

見えないが音は響く、鳴き声が、足音が、まるで自分達をこの霧の中、獲物として捉えているかのように。

「散らばる？」

「一ヶ所に固まってたらいいいだからな」

そうですね、と繋げると散会し散らばった、その途端鳴き声の主は三人がどこに行き、散らばったかを搜索していた。

「ギャオオオオオオン！！！！！」

位相空間の中、そこは岩場ばかりの空間でどこを見渡しても緑にしか見えなかった。

「孤門副隊長も同じ空間に入ったんだよね……………」

しばらく飛行していると背中に三個の巨大な結晶を生やし四足歩
行の岩石のようで赤い筋のようなものが付いた皮膚に長い首に何個
も発光体が付き頭部が尖ったインビブルタイプビースト・ゴルゴ
レムが巨大な足を上げて歩行していた。

「ぐ？」

ゴルゴレムはクロムチェスター に気付き頭部を上げそこから光
線を放ち攻撃を始めた、光線を右左と傾け避けていく。

「クアドラブラスター……………アビロツク、ファイヤ！」

操縦桿のトリガーを引き左右の四つの砲門からオレンジの光線と
無数のミサイルを発射しゴルゴレムに襲い掛かる。

「グゴツ！？」

クアドラブラスターは一つの結晶を直撃し破壊するとゴルゴレム
の体がだんだん透明になり消えた。

「さて、あつちに戻るか」

機体はまた光を放ち消えていった。

博麗大結界内、霊夢達は霧の中をさ迷い、見えない敵から逃げて

いた。

「まったく……視界悪いわね……」

危うく大木にぶつかり掛けるぐらいだった。

「グゴオオオオオッ！」

霧の中、近い場所で大きな鳴き声が聞こえると目の前で巨大な何かが光っていた。

「もしかして……」

更に辺りを金色の光が包み込んでいき、霊夢をも巻き込むと赤い大地が広がり空が青く、光り輝いている空間、メタフィールドだった。

「シエッ！」

ゴルゴレムと対峙するエナジーコアの上部に青く輝くクリスタル、コアゲージが付き赤い体となったウルトラマンネクサス・ジュネツスが立っていた。

メタフィールドはウルトラマンが戦いに有利となる効果を持っている、ゴルゴレムの結晶は再生するため再生してもここなら位相空間には逃げられない。

「カズキ……」

視界が良くなり目の前に敵が現れたためお札を自然と出していた。

「ハッ！」

一瞬構えると走りだす、ゴルゴレムは光線を放つがそれをジャンプを避けて落下の勢いを利用し急降下キックを放ち更にもう一つ結晶を砕く。

「ギッ!？」

背後に立ちそこからローキックを何発も食らわし攻撃していく。

「グルルウ……!」

そこでゴルゴレムは頭部の下部から口が付いた触手が伸び後ろを向き口から火炎弾を発射した。

「グワアッ!？」

火炎弾は右肩に直撃、その威力は直撃した場所は黒く焦げる程だった。

「グッ!」

地面に膝を付くとネクサスを尻尾で叩き付け攻撃いく。

（くそっ………）

メタフィードの中でも苦戦は強いられる事はよくある、今回はゴルゴレムはかなり強敵だった、伸縮自在の首のような触手による攻撃により。

「ガゴオオオオオッ!!!!!!」

勢いよく振り向きその長く太い首で足払いを掛けネクサスを倒す。

「グオオッ!？」

背中が大地に叩き付けられるのしかかられ前足で殴られていく。

「グウウッ!？」

腕を顔の前で交差して攻撃を防ぐが当たる所は当たりダメージを食らっていく。

(まさかここまで……………)

触手を伸ばし口を下に向け火炎弾を放とうとしたその時だった。

「グゴッ!？」

白黒の陰陽玉が落下、口に直撃し更に数枚のお札が触手に刺さり傷口から血が噴射。

「グギヤアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!?」

苦痛の叫びを上げつつ後退していると。

「霊符………夢想封印!」

最後に夢想封印が放たれ触手の先端の頭に直撃し爆発し頭は吹き飛んだ。

（霊夢！）

それらはメタフィールドに巻き込まれその中にいた霊夢による援護だった。

「カズキ、今よ！」

ネクススは立ち上がりいつもとは違う構え、右腕を伸ばし左腕を曲げて拳にするとすぐに解き走りだし飛び上がりチョップを首に叩き込むと蹴り上げて両手で掴む、振り払われそうになるが踏張り腹部に。

「シエアッ！」

ジュネッスパンチを炸裂、腹部は柔らかいため拳が腹にめり込みゴルゴレムは更に悲鳴を上げていく。

そして首を腕で締め上げるように掴みそのまま振り回し投げ飛ばすと両手を拳にし腹部の前で交差するとアームドネクススは青く輝きゆつくりと腕を曲げその間に青い稲妻が走り次に両手を挙げ。

「シエアッ！！！！！！！！！！」

最後に両手をし字に組み右腕から青白く輝く光線、オーバーレイ・シュトロームを放った。

光線は倒れているゴルゴレムに直撃し体が青白く発光すると光線が止まった瞬間粒子状に四散しゴルゴレムは消滅した。

同時にメタフィールドも消滅し結界内に出るとネクススは赤いオーラを纏いながら消えていった。

「まだ霧が……………」

「なんだよこの霧？」

カズキが隣に並んで飛び霧の事を聞かれる。

「判らないわ……………」

霧が晴れず視界が悪いまま飛行を続けている文は霧の中に浮かぶ巨大な黒い影を見つけていた。

「もしかして別の……………」

羽根を飛ばたかせて進んでいると頭が危険信号を発し急いで右に寄ると巨大な何か、隕にも見える物が通過した。

「あやや！？」

すると目の前にもその隕の影が見え一瞬で上昇し避けるがその二つの隕は追尾してきた。

「追い掛けてきた！」

それを振り切ろうと加速し飛び回るがしつこく追ってくる。

「しつこい……………！」

迂回したりと急な方向転換で振り切ろうと試みるがその隕は獲物

を狙った鯨のように追ってくる。

「ありや文じゃねーか？」

魔理沙もカズキ達と合流し霧の中、瞬時に動き回る影を見付けていた。

「何かに追われてるの？」

鯨の影も見えていたためそう考えられ。

「ん、そーいや文、スペルカードを使えば……………」

その手があった！、思い出したかのようにスペルカードを出し方向転換し地上に体を向け。

「竜巻、天孫降臨の道しるべ！」

その前方に向け竜巻を出し霧は竜巻により吹き飛ばされ消滅すると地上に茶色にとぐろを巻いたような体に頭部に耳のような突き出た先端に両手に鯨が付いた伸縮自在の腕の岩石怪獣サドラがおり空腹を表すかのように腹の虫が鳴り響いていた。

サドラは腕を伸ばしまた文に狙いを定めていた。

「警戒していたので本気は出しませんでしたけどそのくらいの速度なら！」

避けられる、その言葉を繋げようとしたら反対方向から同じような鯨が付いた腕が伸びてきた。

「もう一体!？」

なんとサドラはもう一体居たのだ、そう先ほど急な方向転換に着いてこられたように見えたのはもう一体のサドラが方向転換したのを察知し襲い掛かってきていたからだ。

「ギシャアアアアッ!!!!!!!!!!」

サドラ達は完全に狙いを定めてしまい他には注意が向かれていなかった。

「マスタースパークで倒してやるぜ!」

ミニ八卦炉をサドラに向けていると反対方向から鳴き声が響いてきた。

「まさかまだいるの!？」

振り向くとサドラのその巨体が迫ってきておりその大きな足で踏み潰そうとしていた。

咄嗟にエボルトスターを出すが無間に合うか間に合わないか、そう感じた刹那、その自分達を潰そうとしていたサドラの頭部の突起物に赤く光る光線が直撃し火花を散らし巨体はふらつきながら後退した、

その突起物は鯨の鼻先のようなレーダーの役割がありそこが弱点でもある。

「今のは?」

真上をクロムチェスター ではない下部が白く、赤とオレンジの

ラインが流れる機体を通り過ぎ上昇すると上部の姿も、炎のようなエンブレムが描かれた両翼に機首が黄色く、後部に一枚の尾翼、鳥のようにも見えるその機体の名はG U Y S ガンウイングー。

「ミライ?」

コックピットの中にミライが見え後部座席には水色の髪の少女も見えた。

「にとり?」

その少女は前半らへんにも説明した河城にとりである。

「にとりちゃん、後は任せるよ」

「いいよ! テストも完璧だし!」

ミライは左腕を曲げるとブレスレットのような赤い宝石が埋め込まれた赤と金のアイテムを出す。

クリスタルサークルと呼ばれる宝石を右手でこすり回転させると金色の光を放ち左腕を挙げ……

「メビウウウウウウウー!!!!!!」

自身の真名を叫び金色の光に包まれるとコックピットから光の球となり飛び出し文を狙う二体のサドラにぶつかっていき吹き飛ばしていく。

「ミライくん!」

光の球は人型となり光が消え赤と銀の体に菱形の青く輝くクリスタル、カラータイマーを付けた巨人、ヒビノ・ミライの本来の姿であるウルトラマンメビウスの姿を現した。

「セアツ！」

左腕を拳にし上に向け曲げ右腕を伸ばす構えを取る。

「ギシャアアアアッ！！！！！！！！！！」

サドラ達はメビウスの回りを取り囲みこの数に勝てるか？、と言わんばかりに鳴き声を上げ嘲笑う。

.....

だがメビウスはその挑発には乗らず乳白色に輝く眼でかかつてこいと布告する、それに気付いたサドラの一体は腕を伸ばし鋏で体を引き裂こうと広げると。

「ハッ！」

変身アイテムでもあるメビウスブレスから金色の剣メビュームブレードを出しその腕を切り飛ばす。

サドラは苦しみながら後退していくがメビウスの移動速度が速く、その刹那、サドラの上半身の下半身は別れ、爆発した。

「ミライ速え」

感心している文が近くに降りてきた。

「ハアアアア………!!」

左腕を大きく回しメビウムブレードから光が放たれノコギリ状の刃が四つ付いた輪が生成されると剣を消滅させ右手でその輪を持ちサドラに向けて投げ飛ばしそのサドラの首は切断されボトツ!、と音を立て頭が地面に落下し胴体は倒れ込んだ。

「セアッ!」

構えを取ると走りだしサドラに飛び蹴りを食らわすと首に手刀を叩き込む。

「ハッ!」

素早く回し蹴りを繰り返していく、一回二回三回四回と。

「ハアアアア………セアッ!」

左腕を輝かせるとサドラを殴り飛ばし距離を取る。

メビウスブレスのクリスタルサークルを回転させ金色の光を解放すると両手を挙げていき無限大のマークが現れ消えると腕を十字に組み必殺技、金色の光線のメビウムシュートを発射した。

「ギシヤアアアアッ!!!!!!!!!!?」

光線はサドラを直撃、光線が止まるとサドラは力尽き倒れ爆発を起こした。

「ミライくん！ あの戦闘機なんですか！？」

カズキが聞こうとした事を先に文が聞いてしまい身を引いた。

「アレは…………… G U Y Sガンウィンガー、俺達の翼の一つです！」

元気よく誇らしげに笑顔で答える彼がそこにいたのだった。

T o b e C o n t i n e d . . .

Episode・02【俺の翼 マイウイング】（後書き）

文はアレでしね、ガンローダーのプリンガーファン！（オイッ
魔理沙は…………トルネードサンダー？

次回予告

カズキ

「これがミライが乗ってた機体なんだ」

ミライ

「GUY Sガンフェニックス」

ヘイレン

「クエエエエエエッ………………！！！！！！！！！！」

文

「は、速い！」

魔理沙

「振り切れない！」

ミライ／カズキ

「パーミッション・タワー・シフト……マニユーバツ……！」

次回『Episode・03』不死鳥の翼 フェニックス・ウィング

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8930x/>

東方超銀河伝説 ウルトラギャラクシーサーガ

2011年12月21日18時53分発行